

# ふるさと

日整会開催に向けて







ふりさか

1995

慶應義塾大学整形外科同窓会誌

1944

1944

1944

# 目次

「あこがれ」	菅野卓郎	(27)	5
あゆみ	矢部裕	(36)	7
特集 日整会開催に向けて	富士川恭輔	(43)	17
現況	矢部裕	(36)	20
はじめに	藤村祥一	(47)	22
	井口傑	(49)	25
	鈴木信正	(48)	26
	坂巻豊教	(50)	28
	小川清久	(50)	30
	堀内雄毅	(52)	31
	竹田行	(47)	32
	花岡英彌	(37)	33
	菅野卓郎	(27)	34
	泉田重雄	(23)	36
日整会に望む			
特集 新名先生のご逝去を悼んで			
「学問一路」故新名正由教授追悼の辞			
新名正由君を悼んで	矢部裕	(36)	39
	水島斌雄	(44)	43

新名正由先生追悼文	.....	三笠元彦(44)	45
故新名正由教授追悼文	.....	山岸正明(49)	47
故新名正由教授追悼文	.....	根本孝一(55)	49
新名先生と日本軟骨代謝学会	.....	山田治基(58)	51
ふるさとに寄せて	.....	野間千賀子(特)	54
私の履歴書	.....	山口義臣(24)	56
よき先生にめぐまれて	.....	小川正三(29)	57
バレエと整形外科医	.....	鷲谷澄夫(30)	59
投稿に悩みあり	.....	高木俊男(特)	62
戦後五十年を迎えて	.....	奥村守彦(特)	63
思い出すままに	.....	王鐘毓(33)	65
課外授業	.....	樋口智久(特)	70
Bungy Jump	.....	Crazy Doctor(44)	72
近況報告	.....	松木忠(特)	76
これは、ロッシーニですよ	.....	岡田菊三(46)	77
開業一年を経て	.....	青山哲(51)	78
開業して思うこと	.....	片田重彦(51)	81
	.....	植野重満(59)	83
	.....	米山芳夫(59)	85

診療部門の現況

脊椎脊髄

膝関節

手の外科

足の外科

肩関節

股関節

腫瘍

その後のスポーツクリニック

関連病院の現況

国立埼玉病院

清水市立病院

東京歯科大学市川総合病院

日野市立総合病院

永寿病院

東海大学病院

防衛医科大学病院

留学便り

シアトルの“NOMO”

リース大学での研究と生活

シカゴよりその一

藤村祥一 (47)

富士川恭輔 (43)

堀内行雄 (52)

井口傑 (49)

小川清久 (50)

坂巻豊教 (50)

矢部啓夫 (53)

竹田毅 (47)

石名田洋一 (40)

高橋惇 (特)

高橋正憲 (48)

市原真仁 (49)

崎原宏 (52)

持田讓治 (54)

朝妻孝仁 (57)

市村正一 (59)

川久保誠 (特)

千葉一裕 (62)

シカゴよりその二 ..... 123  
「さあ、着いたぞ」 ..... 125

スウェーデン留学中 ..... 130

アメリカ留学便り ..... 133

秘書紹介 ..... 136

新入局者紹介

平成六年度研修医 ..... 137

平成七年度研修医 ..... 144

教室便り

助教授就任にあたって ..... 155

教室幹事を終えて ..... 156

教室幹事就任にあたって ..... 157

十月一日現在の教室スタッフ ..... 159

教室人事 ..... 159

桃原茂樹 (63)  
橋本健史 (63)  
池上博泰 (64)  
寺田信樹 (65)  
井口理 (66)  
渡辺理 (66)

藤村祥一 (47)  
戸山芳昭 (54)  
松本秀男 (57)

いあこわし

同窓会長 菅野卓郎 (27)

慶應整形外科は今日学内外において、きわめて大きな存在になっているといえます。学内では矢部教授が院長として重責を果たしておられ、また整形外科は院内において重要な地位を占めております。対外的には、内外の学会、研究会での慶應勢の活躍が目立ちます。

とりわけ日整会においては矢部教授の副理事長について今回の日整会総会々長就任は教室ならびに同窓会のこの上ない名誉であり、慶びであります。

また関連大学に出られている教授、助教授、スタッフの方々もそれぞれの大学において頑張っておられることを嬉しく思います。それにつけても、去る六月新名正由教授には防衛医大教授としてようやく三年、これから自分の教室をつくろうと意欲を燃やしておられた矢先に急逝され、同門の我々としてはかえすがえすも残念で、痛恨のきわみであります。皆様とともに心から同君のご冥福を祈りたいと思います。

一方関連病院ではいずれの病院においても整形外科はその病院を支えるほどの実績をあげ、医長以下教室出張

の方々の努力が伺えます。その結果近年同窓のなかから院長、副院長が多数輩出していることは大変嬉しいことでもあります。かつて整形外科がクライネファッフアとして軽視されていた頃を思うとすばらしいことと思っております。

また開業されている諸兄も、今日の多難な医療事情にもかかわらず、それぞれの地域で模範的な診療をされており、そして整形外科臨床医の指導的地位を得ておられることに敬服いたしております。

以上のように今日慶應整形外科があらゆる分野で活躍し、発展することができるようになったのは、もちろん諸兄各々の優れた力と努力によるものではありませんが、そこには先輩達の開拓してこられた道があったこと、そしてなによりも矢部教授の主宰される現教室の充実した力があってこそはじめて可能であると思います。

前号の「ふるさと」でもふれましたが同窓会員数は現在七〇〇名を越えております。数が多くなるとややもするとまとまりが悪くなる傾向があります。お互いに顔を知らない方々も少なくありません。「ふるさと」はその意味で各分野、先輩、後輩の交流の場として意義があらうかと思えます。できるだけ多くの投稿をお願いしたいと思います。同窓会の集まりは春の日整会時と秋の総会時の

年二回ですが、出席されるのは古い方々に偏りがちであります。できるだけ若い層にも多く出ていただきたくお願いいたします。

さて来る第六十九回日整会総会も最後の秒読みの段階に入ってきました。これに対しては同窓の諸兄から多大のご支援をいただいておりますことを私からも心からお礼を申しあげる次第です。さらにその上お願いですが、教授や教室の係の人たちだけで学会を担当するのではなく同窓会全員が参画していただければ有り難いと思えます。

慶應として恥かしくない立派な学会を開催したいと念願するものであります。



## あゆみ

矢部 裕 (36)

平成五年秋から二年間の教室のあゆみを綴ります。

私は昭和六十一年八月に教授として帰室したので、私の教授としての任期は十二年弱でありました。最初の1/3の創設期、中1/3の成長期は終り、最後の1/3の成熟期に入ったと申せましょう。成熟期の最初の二年間、日整会学術集会の準備はありましたが、病院長職も二期目に入り、すべては順調に航海を続けることが出来ました。まことにあって同窓の皆々様の御支援の賜であります。

御陰様で、オリジナリテイのあるベシックな研究も少しずつは実ってまいりました。海外留学は活発であります。欧文論文の数は未だ足りませんが、少しずつは増えてまいりました。私の任期はあと二年余りです。多くの結実をえて、教室員の皆様が更に大きく伸びてほしいと願っております。

### 一、病院長任期終了

昨日引越しを終え、植村常任理事等への挨拶をすま

せ、本日ただ今（九月三十日、午後零時三十分）、病院長室の鍵を院長秘書に返却し、教授室へ戻ってまいりました。何かほっとした様な、少しはウキウキする様な、ちょっと口笛を吹きたくなる様な気分です。これから整形外科集談会東京地方会へ向います。

一期二年間の副院長に続く二期四年間の病院長業務、終ってみれば早かった気もしますが、結構ストレスはありました。責任の重さも感じました。種々関係各位の意見を聞き検討致しますが、迷うこともございます。しかし最終的な決断は下さねばなりません。その結果が悪ければ、責任をとることは容易なことです。二千余名の教職員と患者さんにも迷惑がかかります。慶應の名に傷がつくこともございます。ともかく無事任期を全うしたことにほっとし、責任が軽くなったことにウキウキし、自分のやってきた成果に大略満足しているから口笛でも吹きたくなるような気分であります。そしてこの間、私を支えて下さった同窓、教室の先生方に厚く御礼申し上げます。

教室の先生方には、また大変に迷惑をかけたことと思えます。院長職務を優先したため、教授総回診、教室連絡会、スタッフミーティング、予演会、そして教室協議会、日整会学術集會実行委員会等に遅刻したり、出席で

きなかつたことは数知れません。にも拘らず、先に進めるべきは進め、待つべき事項は待っていたら、まことに臨機応変な態度で処していただいたスタッフの先生方に深謝申し上げます。院長職務を終えて教授室に戻るのとは通常午後七時頃、それも週二度位しかありません。となると教室員が入れ代わり立ち代わり尋ねて参ります。二、三時間待たせるのは当り前でありました。申し訳ありませんでした。ハウプト投稿論文のチェックが約一カ月、ネーベンで一週弱、しかし学会発表用論文は埼京線の電車の帰りに読みましたから、翌日は返却したはずで

す。副院長時代の二年間は教室にとってもメリットがありました。スポクリの開設や増設、別館中央四階の居室、研究室の整備、改修等であります。しかし病院長になつてからは、病院全体のことを考え、むしろ整形外科とは関係のない、他科のメリットに連がることを優先して行つたので、整形外科にとつてのメリットはあまりありませんでした。のみならず、GCPや医薬品製造業公正取引規約がらみの治験契約、病床稼働率（整形病床は大略一〇〇％）アップの為の同日入退院、服薬指導等困難な新企画は常に整形外科で試行を行つて、その成果と問題点を見定めてから、本格的実施にふみ切つたわけ

す。そんなことで申し訳ありませんでした。しかし何時かは倍になって帰ってきます。

病院長時代の四年間、薬剤部改修と移転、七号棟四、五階産科病棟・NICU・分娩室の改修、MRI増設、リナック更新と増設、無菌病棟開設、内規鏡センター開設が主なハードの実現です。いずれも億単位の工事なし購入費でした。工事のため、この間収入減となることも併せ考えれば、病院の収支が黒字にならなかつたのも止むをえないと考えます。

平成六年二月には、特定機能病院として認可され、本年四月には初診患者紹介率（診療報酬上）が三〇％を上廻りました。これにより、慶應病院の収入は六千万円程の増収となります。本年一月五日の教職員新年交歓会で私は病院長として三つの目標を掲げました。第一は病床稼働率九三％以上、第二は初診患者紹介率三〇％以上、第三は保険審査査定率一％以下（再審査分を含む）の目標達成であります。現在の所、稼働率は九四％を上廻っており、紹介率も三〇％に達することが出来ました。査定率は一・〇五％であります。

本年五月には、表通りに面して信濃町煉瓦館が完成しました。信濃町の顔と呼ばれるに似つかわしい洒落た建物です。テナントはほぼつまり、その賃貸料は医学部・

病院への支援となります。

本年一月から六月まで、植村常任理事の私的諮問機関として病院将来計画ワーキンググループを設置して、隔週早朝に検討会を開催いたしました。教室からは井口講師に参加してもらい、日建設計、内藤設計に依託して、主にハードに関して義塾開設百五十周年を目標として設計プランを引きました。完成すれば、塾医学部・病院が世界の医学、医療の発信地となりうるような学際的構想を画くことが出来ました。三田本塾での評判もよろしいと植村常任理事から聞いて、肩の重荷を下ろすことが出来ました。

時代は移って行きます。執行部も本年十月から猿田享男医学部長（43回）、神崎仁病院長（40回）と若返りしました。新しい波が押し寄せています。新しい方達に期待すると共に私に残された二年余り、邪魔にならない様注意しながら、暖く支援してまいりたいと考えます。

## 二、同窓人事

### ①教室人事

平成六年四月に花岡英弥助教が退職され、井上病院の副院長となりました。その後慶應の客員教授として協力していただいております。その後任として、藤村祥一講師が本年十月一日助教に昇任いたしました。更に藤村講師のあとには、矢部啓夫助手が講師に昇任しました。

平成六年四月から教室幹事（医局長）が堀内行雄講師

から戸山芳昭君へバトンタッチされ、更に本年十月一日からは松本秀男君になりました。戸山先生一年半の名医局長ありがとうございました。

本年も四月一日付で兼任教授に平林冽先生、客員教授に月村泰治先生、大谷清先生、内西兼一郎先生、客員助教授に花岡英弥先生をいただいております。

平成七年十月一日現在、教室のスタッフは次の通りとなります。

教授 矢部 裕（教室主任、診療部長）

助教授 富士川恭輔（教務委員）

藤村祥一（診療副部長、研究副主任）

講師 竹田 毅（スポクリ副部長）

鈴木信正

井口 傑（会計）

坂巻豊教

小川清久

堀内行雄（外来医長）

矢部啓夫（保険医長）

戸山芳昭（病棟医長）

松本秀男（教室幹事）

高山真一郎（研修医担当主任）

### 助手

平成六年度の入室者は一五名、平成七年度の入室者は一八名十三名であります。慶應の教室内で卒後教育が可能な研修医数は一八名が限度であります。本年度は二五名の応募があり、厳正な試験の結果二一名を採用するこ

とに決めました。しかし、一八名を越えた三名の方には  
関連病院（研修指定病院）で最初から研修を行ってもら  
うことに致しました。立川共済病院、済生会横浜市南部  
病院、浦和市立病院の三病院であります。一八分の一と  
して慶應内でコンピューターをたたいているより、面倒  
見のよい部長さんの下、二年間のman to manの研修  
を受けられることが実りが多いのではないかと考え  
ています。卒後研修のあり方が問われている現在、これ  
も一つのtrialであり、良ければ今後この方式を広げて  
行きたく考えています。

伊勢慶應病院では藤井英治君が本年四月一日付で講師  
となりました。

慶大リハビリテーション科では、木村彰男君が平成六  
年十月に助教授に昇格し、更に本年四月に月ヶ瀬リハビ  
リテーションセンターの副所長となりました。

## ②関連大学、関連病院

平成六年三月に東海大学の今井望教授が定年退職され、  
主任教授には福田宏明教授がバトンを受けました。今井先  
生二十年にわたってご苦労様でした。四月二十二日の先生  
の退職記念パーティは大変にスマートで温かみのあるす  
ばらしいものでありました。同年十月には浜田一寿君が講  
師に、平成七年四月には持田譲治君が助教授となりました。  
福田教授は本年四月本院の副院長になりました。

藤田保健衛生大学では、平成六年一月に中村俊夫君が  
坂文種報徳会（はんたね）病院の講師に昇格しましたが、

桑名市で開業のため、本年九月に退職されました。

本年十月から関恒夫教授が坂文種報徳会病院の院長と  
なりました。藤田保健衛生大学リハビリ科の土肥信之教  
授が本年十月一日から地元元広島県立保健福祉短期大学副  
学長として赴任しました。彼が兼任していた藤田学園リ  
ハビリ専門学校長は吉沢英造教授が兼任されました。な  
お、平成六年六月渡辺裕学長に続いて藤田啓介理事長が  
平成七年六月に御逝去なさいました。共に私を育ててく  
れた方々です。心から哀悼の意を表し、御冥福をお祈り  
申し上げます。大黒柱を二本失った藤田学園、大変なこ  
とだとは思いますが、吉沢、関両先生、学園のためにも  
どうぞ宜しく御願い申し上げます。

本年六月、防衛医科大学校、新名正由教授が御逝去され  
ました。健康を管理すべき医師がこんな病に侵されるな  
んで……医者失格です。生前彼を見舞った際の彼の言葉。  
自らの体を慮るだけの時間的ゆとりのない医師。ここ2  
年間若くして亡くなった同窓の数名の先生方。医療のゆ  
がみの責任がすべて医師にあるような書き方をする  
ジャーナリズムの態度、それを信ずる国民。聖職として、  
自分の命まで捧げてしまった真面目な同窓の先生方であ  
る。家族の御気持ちはいかにばかりか。ただ合掌あるのみ。

朝妻孝仁君が本年六月に、小林龍生君が七月に同大学  
校講師となりました。新名教授の後任は慶應において他  
にありません。

昭和大学藤が丘病院整形外科斉藤進助教授が同病院の

員外教授(平成七年九月)となりました。助教教授生活は一八年余にわたります。おめでとうございました。

東京歯科大学高橋正憲教授が同大学市川病院副院長(平成六年四月)になりました。平成六年一月には小柳貴裕君が同大学講師となっております。

関連病院では富山県立高志リハセンター泉田重雄院長と清水市立病院小山明院長が平成六年三月に退職されそれぞれ名誉院長となりました。長い間、御苦勞様でございました。永寿総合病院の崎原宏先生が院長に(平成六年六月)になられ、小川正三先生は顧問となりました。

副院長には立川共済病院の田中守先生(平成五年十一月)、日野市立病院の市原真仁先生(平成六年一月)、国立埼玉病院の石名田洋一先生(平成六年四月)、清水市立病院の高橋惇先生(平成七年四月)、済生会横浜市南部病院の中西忠行先生(平成七年四月)がなられました。真面目な先生方の努力の賜と考えます。おめでとうございます。しかし、自身健康に留意されて下さい。

関連病院からの増員希望はここ二年間で一八名ありました。そのうち一名を満すことができませんでした。なお、七名は御要望に應えきれず、申し訳なく思っております。しかし、今年はフレマンも多かったので、少し時間をいただければ、ご要望に應えられるものと考えます。

### ③留学

この二年間で川久保誠君(英、リーズ大学)、千葉一裕君(米、ラッシュ大学)、市村正一君(米、ワシントン

大学)、橋本健史君(スウェーデン、ストックホルム大学)、桃原茂樹君(米、ラッシュ大学)、池上博泰君(米、ハーバード大学)、井口理君(デンマーク、オーフス大学)、寺田信樹君(スウェーデン、ルンド大学)、堀内行雄君(スウェーデン、ルンド大学)の九名が留学し、いずれも成果を上げている様です。七月から九月までに池上君、橋本君、井口君をして二年半留学していた渡辺理君がいずれもたくましくなって帰ってまいりました。それぞれの診療研究班で留学先が定まって来ている所もある様です。故新名教授が紹介してくれたラッシュ大学は、かなり基礎的研究が出来る様です。今後の関係を大切にして行きたいと思えます。

### ④御開業および退室

御開業、定年退職、その他の理由で教室を退かれた先生方が一九名おられます。内一二名の方が御開業です。おめでとうございます。御繁栄をお祈り申し上げます。

小山明先生、沖永明先生、花岡英弥先生、石下俊一郎先生、末安誠先生は定年退職またはこれに準ずる先生方です。長年の御勤務ご苦労さまでございました。そして教室員への御指導ありがとうございました。

### 三、研究

#### ① 主論文研究制度の改定について

平成六年春の主論文研究テーマ授与(70回生)は、今までのお見合い制度が廃止され、全く新しい形式となり

ました。改定の理由については、ふるさと前号でもかなり詳細にふれてあります。その内容は以下の通りとなります。

- 主論文つまり学位に結びつく研究は、あくまでも本人の希望であり、強制ではない。

- 本研究に応募しうる資格として入室後三年生の終りまでに、大学院語学試験に合格し、副論文を投稿していること。

- 研究テーマをインストラクター（関連病院を含め、学位を有する指導者）から募集し、テーマを出したインストラクターと検討を加え、レジデント本人の能力と対比して、教室として教授（研究主任）が研究テーマを授与する。よってレジデントの希望は二の次となる。有能なレジデントには、かなり難しい基礎的なテーマが与えられる可能性が強い。

- 研究テーマは、資格を持った希望者に対し、三年生の後半に授与して行く。

- 研究テーマを出したインストラクターが指導者となり、投稿するまで指導する。

- 研究は原則として入室八年生位までに仕上げる。遅くとも十年生までとする。十一年生以降は教室からの研究費の支援はなくなる。

- 研究者は、ランニングコストの一〇％を自ら負擔する。この改定案はスタッフミーティングで検討し、教室協議会で諮り、教室連絡会や医長会でも説明いたしました。直接関係する70回生には直接説明もいたしました。

これにより研究と診療班が分離され、診療班とは直接の関係のない、細胞、遺伝子、分子レベルの基礎的研究も進むはずであります。本当に研究をしたい人達が、その能力に応じて、比較的短期間に研究をなしえることとなります。研究費の節約にもつながるはずであります。しかしながら、自分の希望する研究が出来ない、自分の入りたい診療班の研究ができないデメリットもあります。

既に70回生十六名には平成六年四月に授与し、71回生十名には平成六年十二月から平成七年四月にかけて授与いたしました。どうしても語学試験が受からない、或いは副論文が投稿出来ない人も出ています。しかし試験は六回のチャンスがあるし、副論文は二年余りの期間があります。にもかかわらずこの間資格をとりえない人は、主論文研究を成就することは困難と考えたわけです。テーマ汚し（授与した当時はすばらしいテーマであっても十年たてば使いものにならなくなる）や研究費の空費になる可能性が強いわけです。その方達のことを考えれば、研究を希望し、テーマを授与された方は、石に嚙りついても十年生までに仕上げていただきたいと考えます。

これらに關係して副論文テーマの授与も早めました。そして副論文テーマについては大学に在る間（二年生の六月迄）に仕上げる様努力して下さい。七月から出張してしまおうと指導を受ける時間を作るのが厳しくなります。そして、教室のテーマを消化したならば、出張した関連病院の部長さんにオカワリをねだってみて下さい。

## ② バイオメカの研究について

私が慶応に戻ってから最も力を入れた研究部門です。別館中央四階に二室あり、更にスポクリ資料室も使えます。井口講師の努力で大型研究機器とコンピュータも完備されました。理工学部出身の六馬信之君も教室の常勤助手として研究指導が可能です。小川清久講師や中村俊康君の努力でフレッシユなライヘも比較的ふんだんに使えます。私はライヘを用いてのバイオメカという点では世界一の研究室と考えています。そんなわけで、ここ数年各研究班から雨後の竹の子のごとくバイオメカのテーマが出て来ました。犬や猫等ペット動物を使用しての動物実験が困難となったせいもございませう。全部で四十件近くなります。となると並んで待っていても自分の順番が来ない。やれないことを理由にやらない人も出てまいりました。そんなわけで平成六年十二月十五日のスタッフミーティングで、平成七年一年間のタイムスケジュールとワク（研究室を使う時間割）を作りました。六馬君には午後一時から九時まで（月々金）原則として研究室にためてもらおう。そして各研究班のワクは膝が7/4、脊椎が1、股が3/4、肩、手、足班は各1/2、これで5ワクになるはずでせう。

しかし実ったのは現在の所橋本健史君のみです。糞つまり状態なので、便が出ない限り私は今後バイオメカのテーマは授与しないと宣言しました。イレウス状態です。バイオメカのテーマを出した指導者と研究者の先生方、

ともかく高圧洗腸でもして脱糞して下さい。

これだけ整備をした人の身になって考えてみて下さい。腹ふくれるのは私です。

## ③ 大学院と今後の研究

大学院学生が入って六年になります。既に一期生と二期生は卒業しました。一期生の中村俊康君はTFCC（手関節三角線維軟骨複合体）の機能解剖に関する見事な研究をなしとげ、日本手の外科学会で会長賞をとり、今度学位も授与されました。

二期生の井幡巖君は、国立精神神経研究所の生化学部門高坂部長の指導を受け、インターロイキン2により発現誘導されるミクログリア特異的遺伝子の解析の研究、発表を行い、間もなく学位論文を持つことになっています。長いトンネルをくぐり抜け、やっと見つけたグイアモンド、小さくとも光り輝いています。

三期生の楊玄壮君は、国立ガンセンターの山口部長の指導の下、悪性腫瘍遺伝子異常の研究を行いました。

*Liposarcoma S mixoid type* で転座を見出し、well differentiated type-2 の鑑別に役立ちそうです。JJ CDで論文が受理され、これが彼のハウプトとなります。更にラットの線維肉腫の細胞株（リンパ節転移をしない）で発現している遺伝子配列を研究している様です。ミイラ取りがミイラとならない様に。大学院の期限は平成八年三月三十一日です。

四期生は古谷晋君と大津寄雄志君です。ともにT W Y

マウスの異常石灰化機構を調べています。電顕的に軟骨内石灰化の局在異常が見出されました。また非コラゲン性骨マトリックス蛋白の遺伝子発現について序曲をまとめ発表する所です。

五期生は名倉武雄君です。慶應理工学部山崎信寿教授の指導の下、脊椎のバイオメカに本格的に挑戦することになりました。川崎市立井田病院の若野紘一郎長の側面のバックアップもいただいております。

六期生は松崎健一郎君と矢部寛樹君です。そろそろ研究テーマを決めたいと考えています。

中村俊康君以来、大学院に毎年入ってくれます。毎月一回、原則的には第三火曜日午後七時から十一時過ぎまで、休むことなく大学院生と研究について話し合っています。その記録は六十ページを超えました。指導するというより教えられています。バイオメカなら分るのですが、分子レベルの話となると、最近の研究手法を知らない私は、彼らについて行けません。しかし道をつけ、レールを敷く努力はしています。

細胞・遺伝子・分子レベルの研究は、臨床各科の中で、整形が一番遅れている気がいたします。そしてかかる研究は身体局所で分かれている慶大整形外科教室では今迄不可能ともいえませんでした。大学院生を精神神経研究所、ガンセンター、病理学教室へ送り、専修医でも優秀な方を防衛医大故新名教授の所や東京女子医大斉藤聖二先生の所へ送りました。昨日(十月五日)の基礎学術集会の予演会で

はその芽生えを感じています。更に外国へ留学して研究している連中が帰ってくれば、大きく開花するはずですよ。

私は、私の教授時代における研究は、バイオメカまでと考えていましたが、時代のスピードはすさまじく、かつての生化学的手法ではもうどうにもならなくなりました。分子生物学研究室 (molecular biology laboratory) を何とか教室の中に持ちたいと考える様になりました。最後の仕事となりましょう。

#### 四、スポーツクリニック

平成五年十月一日にスポーツクリニックフィットネス部門の開設式が行われました。中央棟地下のスポーツ外来を曲った所で、六号棟地下の三ブロックであります。フィットネス部門はフィットネスルームとコンディショニングルームに分かれます。前者は主に内科系の検査、後者は主に外科系のトレーニングルームで、トレーニングの教育、指導を中心にコンディション調整を行うことになります。

内科、老年科、小児科の患者さんも徐々に増えていきます。スポーツ部長は私矢部と副部長は竹田毅講師の兼任。常勤として整形増本項君、老年科石田浩之君の二人で、他は二十名ほどの医師が兼任で外来を担当しております。臨床実績は徐々に上がってきていますが、更に研究面での充実をはかりたいと考えています。東京のと真中の慶應病院の中で、これだけのスペースを割いていただけだ。

これは喜ぶべきことではありますが、つらいことでもありません。今後この分だけ実績を上げる必要があるからです。手と足を汗と泥にまみれて努力し、日本のスポーツ医学のリーダーとなるべき使命を果さねばなりません。

## 五、日本整形外科学会

### ① 日整会役員会、評議員会

平成五・六年度日整会役員として、今井望教授と村上宝久先生が監事をつとめられました。ご苦労様ございました。平成七・八年度には大谷清先生が理事をつとめてくださっています。よろしく御願いたします。

平成七年一月には評議員の改選もあり、慶應系で九名の評議員（矢部、平林、富士川、福田、石井、新名、吉沢、大谷、石名田各先生）が無投票で決りました。評議員選は平成元年に定員一六〇名で選挙が行われました。関東地区は定員五十一名の所五十四名が立候補しましたが、慶應系は七名全員が当選したわけです。更にこの年の理事選がまれにみる激戦となったわけですが、その意義については前号のふるさとに記しました。

私はその後、評議員選、理事選ともに話し合いの世話人に押され、山内教授、三浦（幸）教授、藤巻教授等と共に調整をはかってまいりました。関東が諸悪の根源である。そして選挙上手の慶應は更にその源と見做されたのかも知れません。幸いに投票をせずに平成三年、五年、七年度の改選は済みました。しかし次回（平成九年春）

の評議員の改選に際しては、話し合いはきびしいものと考えます。それは、平成元年の選挙の結果を基準として、三部門（大学、勤務医、開業医）及び各大学の評議員数の割当がなされるからです。九年も前の選挙結果を基準とされては、どこも納得出来ないわけです。多分選挙になるでしょう。そしてその結果は、その後数年の話し合いの基準となる可能性があるから、今から考えておく必要があります。

### ② 日整会学術集会

本号にて、特集されています。

慶應の整形外科学教室の伝統のすばらしさと大きさを特に感じます。多大の御支援に深謝申し上げます。慶應の名に恥じない学会を心掛けます。あと半年、更にの御鞭撻をよろしく御願ひ申し上げます。

## 六、同窓会会員十一柱逝く

平成五年十一月から本年十月まで十一名の同窓会会員の方がなくなりました。左記の通りであります。

平成六年一月 山内健嗣先生

三月 西 新助先生

三月 末沢慶紀先生

七月 小泉次郎先生

平成七年一月 木城卓二先生

二月 斉藤正也先生

三月 小池 昭先生

六月 鈴木 進先生

六月 新名正由先生

七月 田辺重信先生

九月 鈴木邦雄先生

若い教室員は、御会いする間もなかつた先輩の方が大部分と思います。しかし、木城利光先生、山内圭子君、鈴木康之君のお父様もおられます。これらの先輩方が手塩を込めて作つてこられたこのすばらしい教室であります。ともに、哀悼の意を捧げ、御冥福を御祈りしたいと思います。

#### 七、あと二年半

私の残任期間も二年半となりました。日整会学術集會と私の後継者の養成と学位授与と分子生物研究室とあと一回あゆみを書けば、次の船頭さんに舵をまかせることになります。

先日教室連絡会で学位授与に関する警鐘をならしました。研究発表が終りながら、未だペーパーにしていないう人が多いわけです。平成十年三月の私の最後の大学院医学研究科委員会を通すためには、平成九年十月迄の受理が必要です。ということは平成八年十月以前に投稿する必要があるのであります。そして多くの投稿論文を一度に持つてこられても、私にも能力の限界があり、チェックしきれません。実験が終り、まとめる段階にある人は急いで下さい。あまり古くなると論文としても受理されな

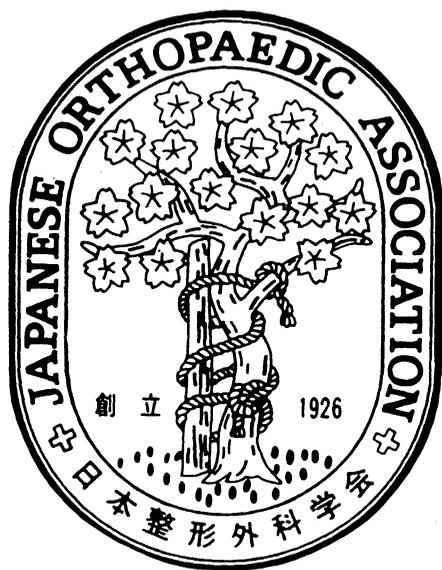
くなりません。

さて、私の赴任以来、あつという間に九年余り経ちました。御陰様で、和と伝統と研究を三柱として慶應整形丸は順調な航海を続けることが出来ました。収穫も多かったと思います。これはふるさと前号でもふれましたが、乗組員である教室員、特にスタッフの献身的努力に加えて、これを支えていただいた同窓の御支援に負うものであります。特に院長時代は、私が対外的活動にあけくれましたので、教室は助教授以下のスタッフにまかせっきりでした。にも拘らず、スタッフの先生方が、各班独自の行動をとることなく、教室全体のことを考え、一丸となつて滅私奉公して下さつたことに頭が下ります。更に自らを犠牲にしてレジデントの教育、研究の指導にあつただけでした。御陰でキラ星の如く輝く若い教室員も育つてまいりました。組織は人でありませう。

来春の学術集會を控えて、今教室は、教室員は燃えております。慶應らしい、慶應として恥ない学術集會となる様、更にながばります。よろしく御支援のほど御願ひ申し上げます。

(平成七年十月七日)

特集：日整会開催に向けて



**JOA 1996**

## 第69回日本整形外科学会学術集会

に向かつて

実行委員長 助教授 富士川 恭輔 (43)

平成八年四月に開催される第69回日本整形外科学会学術集会まで残すところ僅かに四カ月余りとなり、その準備に直接タッチしている教室員の多忙さと緊張感は頂点に達しております。私はこの緊張感をそのまま来年の四月まで持ち続けさせたいと思っております。

まずは、教室員が矢部教授を中心に一丸となり、同窓会の暖かいご支援を受けて学術集会の準備が順調に進んでいることをご報告申し上げます。

矢部裕教授が学会長の指名を受けられ、私どもに学術集会のテーマとあり方、運営方針などのお話がありました。早々準備委員会が結成され、井口講師を委員長に、まず会場の選考と寄付を中心とした財務計画が準備委員会で討議されました。井口講師は東京、横浜、千葉と毎日のように跳んで回り、情報を集めては教授に報告し、会場は泉田重雄前教授が第59回学術集会を開催された新高輪ホテル（東京）、幕張メッセ（千葉）、パシフィコ横浜（横浜）に絞られました。平成六年二月より準備委員

会が実行委員会に昇格し、私が実行委員長に任じられました。直ちに学術（富士川、藤村）、財務（井口）、国際（鈴木）、展示（堀内）、会場（小川）、広報（坂巻）、ソーシャル（竹田）、記録（松本）の各部門をつくり（一）内は責任者）、さらに教室内から矢部啓、戸山、高山、朝妻、教室外から花岡、池田（彬）、土方、水島、佐々木（孝）の諸先生方に委員にご就任頂き、実行委員会における討議にご参加頂いております。特に外部委員のアドバイスや提案は、どうしても視野が狭くなりがちな実行委員会における検討に大きな力を発揮しております。

実行委員会は毎月一回定例会議を矢部教授を中心に開催し、その間は適宜必要に応じて関連部門が集まり実行小委員会を開き、細かいことを検討、決定しております。この小委員会は通常一時間の予定で開催されますが、大抵は議論が白熱し深夜に及びます。

各部門の細かいことは、それぞれの部門の担当者の報告に委ねますが、学術集会会場は討議に討議を重ねた末、泉田重雄前教授が第59回日本整形外科学会学術集会を開催され好評を博した新高輪プリンスホテルに決定しました。第59回学術集会では、私も諸先輩の末席でお手伝いいたしましたので土地鑑も多少はあり、ホテルの長所を引き出し、短所を被う積もりであります。

今回の学術集会で特に強調したのは、シンポジウム、パネルディスカッションの演者は、すべて会長、座長指名により決定し、演者はその分野において長年研鑽を続けてきたオーソリティを、後者は自分自身の経験とデータでディスカッションが出来る若手研究者を選んだことです。今や国際的にも日本整形外科学会学術集会の中心となるシンポジウムやパネルディスカッションで一演題に五名も六名も名前を連ねる演者は今回は登場しません。一般応募演題も約一二〇名のプログラム委員に厳選して頂き、恐らく採用率は七〇%程度と例年になく厳しくなるでしょう。厳選された発表に対し、十分討議が行われるよう、座長をお願いする先生にも座長用の時間を差し上げ、セッションの最後に自分が担当した発表の講評をして頂く積もりです。座長の先生も前もって自分の担当する発表について十分勉強してこなくてはなりません。学術部門は例年にもまして充実すると考えております。

石川忠雄前塾長の記念講演は、現在の世相が福沢諭吉先生が活躍された時代と、形は違うとはいえ共通点が少なくないので楽しみです。

日本整形外科学会を発展させた先輩の先生方及びそれを陰から支えて下さったご夫人方にも私達が出来る範囲内でささやかではありますが礼を尽くしたいと思います。

また緊張感の張りつめる学術集會中、ホッと一息入れる時間を作るために、本学会の伝統的なスポーツイベントであるテニス、野球を復活させ、野球の決勝戦は東京ドームで行えるよう竹田講師が奔走中です。

慶應という私学だから出来る、慶應らしいスマートなそして参加して下さった先生方にご満足頂ける、さすがは慶應だといわれる学術集會を開催できるよう矢部教授を中心に実行委員会委員一同益々努力する積もりでありますので、同窓会員の先生方、教室員の皆様方の一層のご支援をお願いいたします。



## 第69回日本整形外科学会学術集会

を主催するにあたって

会長 矢部 裕 (36)

第六十九回日整会学術集会は平成八年四月十一日(木)十四日(日・午前)、品川の新高輪プリンスホテルで開催いたします。泉田教授が主催されてから丁度十年経ちます。場所も同じ所を選ばせていただきました。その後、同ホテルに新築されたパミール館は天井が高く、映写効果もよろしい様です。

平成五年四月、神戸で開催された第六十六回日整会総会(小野啓郎会長)で次々期会長に選出されてから、二年半経過いたしました。同窓のご支援を得、教室内では富士川助教授を実行委員会委員長として、教室をあげて準備にとり組んでまいりました。その経過と学術集会についての詳細は、富士川助教授、企画を担当した藤村助教授以下、各担当の先生方の報告にある通りです。

先ず、基本的なconceptとして、①慶應らしい学会、②伝統を重んじ、③Originalityを重視すること、が実行委員会で話し合われました。そしてこの一年間の整形外科学各領域の進歩を問うて、二十一世紀・新時代へ挑

戦して行く学術集会の企画であります。

まず慶應らしいということは、スマートである、中庸、実学、私学としての特徴を折り込む等話し合いましたが、来会される方に学問的にもgoodにても満足していただける学術集会の設定であります。

第二の伝統の重視。日整会には六十九年の伝統があり、会員一七、〇〇名余を擁するマンモス学会として今日の隆盛を築いた経緯がございます。関連する多くの専門学会を抱えながら、それらに分かれることなく、調和を保ちつつ整形外科としてまとまって発展してきた伝統があります。この英知に基づく伝統をいかに継承して学術集会に盛り込むか。ということであります。

Originalityとは発想から開発、応用にいたるまで、すべてが自らの創造であれば申し分ありません。例え外国で開発された方法の追試であっても、その上に自らが積み重ねたものがあり、それを自らのものとしている研究や診療行為であればよろしいと考えます。すぐれた獨創性に基づく研究は、派生する所が大きく、二十一世紀の飛躍につながります。日本の整形外科は欧米と肩を並べました。しかし、発想から獨創的な研究は少なく、これがないと欧米を抜きん出することは出来ません。かかる研究発表を特に重視したく考えます。

これらの基本構想に基づいて学術集会を企画して来たわけですが、果してうまく盛り込むことが出来ませうでしょうか。

慶應の整形外科学教室は、自分でいうのもおかしいですが、臨床の各専門領域、subspecialtyとしての診療班の充実が日本一と考えております。その各班で、シンポ、パネル、外国招待講演者を検討し、選定いたしました。その内容に関しては折紙付と考えます。また特別企画としてのジェネラリストのための集中講座「専門分野この一年の進歩」は、十一専門分野を選択いたしました。これらを統合することにより、各専門分野、各職域、各年代層、それぞれの会員の先生方に満足していただける様なきめの細かい配慮で、プログラムを編成してまいります。

一般応募演題の採否について、プログラム委員に採点していただくわけですが、originalityを重視した厳正な評価は、採用率が低くなると思われれます。このことは云うは易く、行うは難いことでもあります。会長にとって出来るだけ多くの方に参加してもらいたい。そして良い顔をしたい。それだけ参会費収入も多くなります。しかし一〇〇〇に近い演題の応募は、かなりしぼる必要がありますでしょう。しぼられて採用された演題は、独創性のあ

る研究であり、名譽なことでもあります。このことは日整会が単なるマンモス化でなく、質的向上を目指すために必要なことであり、やがて二十一世紀へ向けての発展に連がるものと考えています。

こんなわけで伝統とoriginalityを重視する学術集会のプログラムは、どうしてもシンポ、パネル、特別講演、招待講演、教育研修講演、特別企画等の比重が高くなります。それだけにこれらの企画の内容の充実が必要不可欠です。

特別企画 一、ジェネラリストのための集中講座「専門分野この一年の進歩」は、整形外科と関連の深い専門分野臨床十一部門を選択し、平成七年度に会長をされた各先生方に自ら主催された学会におけるシンポ、パネルや特に進歩の目立った学術発表等三、四の話題にしぼってこの一年の進歩を紹介していただく企画であります。

特別企画 二、「対立する整形外科治療」では、相対する治療法を行っている二名の先生に御登壇願って、ホットなディスカスが期待されます。

サテライトレクチャーは八演題です。夕食付で、会員の先生方にサービス致します。

公開講座は、平成八年三月三日に「都市生活と骨の健康」という題で読売ホールで開催されます。坂巻講師の

担当企画です。

記念講演は、石川忠雄前塾長による「福澤諭吉と日本の黎明」についてです。政治、社会、経済、宗教から医療にいたるまで、すべて行先不透明な現在、温故知新、今よりはるかに不透明であったろう明治維新にかえて考えてみる必要性があります。

親善スポーツ大会は伝統のある野球、テニスのみ復活させました。

レディスも華美にわたることなく計画致しております。あと残す所六ヶ月となりました。最後のつめに入っております。

慶應義塾の、そして整形外科教室の大きさ、伝統のすばらしさを感じております。同窓の皆様方からの物心両面にわたるご支援に感謝致しております。慶應の名に恥じないようあと半年がんばります。更にご支援ご指導をよろしくお願い申し上げます。

## 第69回日本整形外科学会学術集会

学術企画担当 藤 村 祥 一 (47)

平成五年四月、第66回日整会学術集会の総会において矢部裕教授が第69回日整会学術集会会長に選出され、三年後の学術集会の開催に向け準備が始まった。平成五年十月十八日、第一回準備委員会が開かれ、実行委員会の組織ならびに実行委員の役割分担、タイムスケジュール、収支の概略などについて検討し決められた。その後、三回の準備委員会を経て平成六年二月二十一日からは第一回実行委員会となり、本格的な準備が開始された。まず、学術集会の基本スタイルとして、矢部会長の意向に沿い、日本のオリジナリティーのある研究を重視し、慶應らしい学会とする"ことが決められた。次いで、会期を平成八年四月十一日、十二日、十三日、十四日(午前)、会場を新高輪プリンスホテルとすることが決められた。学術企画に関しては、その後毎月一回の実行委員会において丸一年をかけ、同窓ならびに教室員から寄せられたご意見も十分に参考にした上で決定し、日整会誌会告(第69巻5号、平成七年五月二十五日)に掲載した。

### A. 一般演題

B. ビデオ演題

C. シンポジウム

1. 頰椎症性脊髄症の病態と治療

2. 腰部椎間板ヘルニアの治療設計

3. 脊髄腫瘍の診断と治療

4. 変形性肘関節症の病態と治療

5. 膝関節重度複合靭帯損傷の治療

6. 50歳以下末期股関節症の治療 (THAを除く)

7. 肩腱板断裂

8. 外反母趾の病態と治療

9. 高齢化社会に向かつての整形外科の役割

D. パネルディスカッション

1. 脊柱側弯症に対する最近の手術療法

2. 三角線維軟骨複合体 (TFCC)

3. 膝蓋大腿関節症の病態と治療

4. 人工股関節再置換術における骨欠損の補填法と

その成績

5. 肩関節多方向不安定症

6. 陳旧性足関節外側靭帯損傷の手術療法

7. 悪性骨・軟部腫瘍に対する患肢温存手術の適応

8. スポーツにおける膝前十字靭帯損傷

9. 交通事故にかかわる医事紛争の処理  
10. 作業姿勢と腰痛

E. 特別企画

1. (1) 専門分野この一年の進歩

① 脊椎脊髄、② 肩関節、③ 手の外科、④ 股関節、

⑤ 膝関節、⑥ 足の外科、⑦ 骨折治療、⑧ リウマ

チ関節外科、⑨ 小児整形外科、⑩ 骨軟部腫瘍、

⑪ スポーツ医学

(2) 対立する整形外科治療

① 胸腰椎破裂骨折に対する手術的治療

② 大腿骨頸部内側骨折 (Garden Stage III)

③ 鎖骨骨幹部骨折

④ 上腕骨顆上骨折

⑤ 人工膝関節置換術

⑥ アキレス腱断裂

⑦ 60歳以上橈骨遠位端骨折の治療

2. (1) サテライトレクチャー

(2) 公開講座

F. 教育研修講演

1. Entrapment neuropathyの診断と治療

2. 胸椎部脊髄症の診断と治療

3. 脊椎悪性腫瘍に対する戦略と手術

4. 反復性肩関節前方脱臼・亜脱臼の手術的療法
  5. Posterior, postero-lateral instability of the knee
    - Diagnosis and management —
  6. Total shoulder replacement in rheumatoid arthritis
    - Complications and revisions —
  7. Charnley型人工股関節置換術20年の軌跡
    - その耐久性をめぐるたたかいと展望 —
  8. 整形外科手術と止血・血栓
  9. スポーツによる足関節外側靭帯損傷の保存的療法
  10. Fractures of the thoracolumbar spine : How to decide what operation is needed to correct the problem
  11. Crush syndromeについて
  12. 整形外科領域における薬療法の副作用
  13. 小児膝内障
  14. MRIを中心とした画像診断技術
  15. 骨粗鬆症の診断と治療
  16. 変形性股関節症の治療
  17. 腕神経叢麻痺の治療
  18. 胸郭出口症候群の診断と治療
  19. Seronegative polyarthritis
  20. スポーツにおける疲労骨折
    - G. 会長講演
    - H. 記念講演
    - I. 招待講演
    - J. 特別講演
    - K. 医療器械、書籍などの展示
- 以上の学術企画を予定しているが、応募は一般演題とビデオ演題のみとした。また一般演題はすべて口述とし、しかも座長の先生方によるセッションのまとめをお願いし、討議の活性化を計りたいと考えている。さらに応募演題では、従来より指摘されていた一次抄録と二次抄録の内容の違いを避けるため、例年と異なり抄録を一本化し、日整会誌（抄録号）掲載用抄録のみで採否を決定することにした。このことは抄録原稿の期日厳守にも役立つことと確信している。
- 日整会学術集会も半年後に迫ってきた。いよいよ、応募演題の採否の決定、プログラムの編成など学術企画の正念場を迎えることになるが、さすが慶應と云われるような学術集会が開催できるよう同窓ならびに教室員の

層のご支援をお願いする次第である。

## 「幻の世界都市博と日整会」

財務担当 井口 傑 (49)

一九九三年の日整会で矢部教授が一九九六年の日整会  
学術集会の会長に選出されて、はや二年半が過ぎようと  
しています。学会の準備はこれから佳境に入るところで  
すが、予算の立案、資金計画、寄附のお願い、機械展示  
の立案等々財務の仕事は既に胸突き八丁です。「ふるさ  
と」が発行される頃は、七転八倒の状態かも知れないと  
恐れています。

同窓生、教室員の皆様のご協力には、財務担当として  
感謝の念に堪えません。東大が横浜のパシフィコで開催  
すると決定した時にはがっかりしました。当初、横浜の  
パシフィコ、幕張メッセ、新高輪プリンスホテル、京王  
プラザホテルなどが会場として検討されました。東京の  
大学が開催するのに二年続けて東京以外はまずいだろう、  
京王プラザは小さすぎると言うことで新高輪プリンスに  
決まったわけです。会場費は最高で、機械展示の場所は  
狭いと財務担当には最悪の会場です。教授には内緒で、  
都市博が開かれる予定であった有明の国際会議センター、  
国際見本市会場を交渉しました。来年四月に完成の都庁



跡の会議センターとは異なり、今年十月の完成予定で、新橋からは新交通システムでつながり、おまけに世界都市博の開催中で皆さんに喜ばれるだろうと踏んだ訳です。

新高輪に比べて会場費は半分で、機械展示の面積はパシフィコの倍ですから、まずは財務担当が喜ぶわけです。

「都市生活における整形外科の役割」と言う趣意書までしたため、都市博の事務局で粘りました。結局は都市博の事業に優先して、確実に日整会に貸すと言う事務局の確約が得られず、「冒険はするな」の教授の一言で、煮え切らない事務局を恨みながら新高輪プリンスにしたわけです。バブルがはじけた三年前から一向に回復しない不景気の中、企業からの協力がなかなか集まらず、有明にしてくれば財務は助かったのにと嘆く日々でした。そして、青島都知事の誕生です。世界博が中止になる事を、二年前に誰が予想し得たでしょうか。景気は政府が言うほど回復せず、企業の協力や機械展示もまだなのですが、今頃になって会場探しに奔走している悪夢に比べれば、どんな苦勞もいとはしません。財務担当といたしましては、残る半年を以前にも増して皆様のご協力を得るために奔走するつもりですので、同窓生の皆様にはなお一層のご支援をお願い申し上げます。

## 第69回日本整形外科学会学術集会

準備委員会国際係 鈴 木 信 正

(48)

第69回日整会も余すところあと六ヶ月余と迫って参りました。準備委員の仕事もいよいよ佳境に入ったという所です。私は、国際係の大役をおおせつかり、外人様について全般をお手伝えさせて頂いております。来る学会に出席なさる外人様は三群に分けられます。一つは会長より依頼した招待講演者で、最も大切な、失礼のあつてはならない方々です。当初は、各臨床班より一人ずつに加え、教授招待として二名の計八名の予定となっておりましたが、SICOTの関係を配慮にいれ、最終的には九名に決定されました。

教授招待は、これまで当科とは極めて深いお付き合いを頂いております英国のCrock教授、教室の浦部、寺田の両君と、現在、堀内君がお世話になっているスウェーデンのLund大学からDanielsen助教授、そして、一九九六年のSICOT会長であるオランダのVerari教授のご三方でございます。Crock教授には脊椎の基礎のお話を、Verari教授は、側弯か外傷の講演演題候補の中から、より多くの方に聞いて頂けると考えられるこ

とから、大腿骨頸部骨折の長期成績について御講演頂くこととなりました。

各臨床班では、脊椎はカリフォルニア大学のBanson教授、手はセントルイス大学のMaackinnon教授、膝はスイスよりJakob教授、股関節はフランスよりCourbiat教授、肩はデンマークよりSoljere教授、足はテキサスよりBaxter教授の諸先生方に決定されました。

第二は、自国の整形外科学会から推薦されたTravelling Fellowの方々です。A A O Sから四名が推薦されており、この方々は希望があれば一般演題として口演して頂く予定です。また、東南アジア各国からもTravelling Fellowを招待する予定となっております。東南アジアではまだ整形外科学会が組織されていない国もあり、人選にはやや困難を伴っております。

最後のグループは、外国から一般演題に応募した方々です。過去三年間に本会に参加した外国人とW P O Aのcouncilの方々に日整会の第一次お知らせをお送りし、御関係する方に演題応募の御案内をお願いした所、十七ヶ国、四十七名の方々から抄録用紙の希望が寄せられました。この内何題が期限までに寄せられるかわかりませんが、本学会が国際的にも認められていることを示していると云えましょう。これらの応募演題は、国内から

の一般演題と同様にプログラム委員会の判定を経て、採否が決定されますし、参加者にも特別の配慮をする予定はございません。

外国からの多数の参加者が見込まれるとはいえ、本学会はあくまで国内学会でありますし、全体から見たら外国からの参加者の割合は小さなものです。そのため、経費の点から同時通訳は一会場のみとしますが、外国の方々がどこかでかならず質疑に加われるよう配慮する予定です。

会長招待の形を取る方だけでも少なくとも十九名にのぼり、これからの手配には頭の痛い所でございます。英語のやりとりも、面と向かってならば身振り手振り、辞書片手になんとかなるのですが、正式な手紙となると私の語学力ではどうにもならず、手紙一通に一日がかりという有様です。でたとこ勝負の癖が抜けきらず、お客様がこちらに到着してしまえばなんとかなるだろうと心待ちの状況でございます。

## 第69回日本整形外科学会学術集会

坂 巻 豊 教 (50)

私に与えられた分野は市民公開講座、記念品、広報、の三つである。

### ① 市民公開講座

学会をより一般にも開くという目的で数年前より行われている企画で、これまでは学術集会最終日または翌日に同じ会場で行われており参加者も少なく「公開」というイメージのものではなかった。内容もいかにも医師が考えたようなものが多かった。昨年、東大が開催したものはOrthopaedic Worldと題した企画の中で行われ、学会場とは異なる場所と日時であり「市民公開」に近づいたものであった。朝日新聞にも大きく掲載され我々も少々驚いた内容であった。しかし少々言わせてもらえば、講演者は整形外科医が多く、通常のパネルディスカッションを一般向けの内容としたものを感じられた。

矢部教授と話し合いを長時間にわたって行い、東京で行うからまず「都市生活」というタイトルを考え、折りしも話題の都市博の計画がすすんでおり、これに照準を合わせる予定で東京都にも後援してもらおう予定であった

がご存知のようにこの計画は青島知事の就任により消滅した。整形外科であるから「骨」をとりあげ、また骨・関節の日を判定したこともあり、結局、「都市生活と骨の健康」というタイトルに決定した。聴衆は一般都民であることから、都市生活で骨の健康を保つにはどういう点に注意を払っていく必要があるか、を企画の中心とした。パネルディスカッション方式とするが、この講演をさせていただくかたの選任にもかなりの時間を費した。現在決定した事項、内容について紹介したい。

(1) 日 時：平成八年三月三日(日) 一三：〇〇〜一五：〇〇

(2) 場 所：有楽町よみうりホール(有楽町そごう八階)

(3) 題 名：「都市生活と骨の健康」

(4) 司 会：村田幸子氏(NHK解説委員)

(5) 演 者

a. 整形外科医の立場から、

山内裕雄先生(順天堂大整形教授)

林 泰文先生(都衛生局健康推進部参事)

b. 内科医、学校教師の立場から、

山崎 元先生(慶大スポーツ医学研究センター教授、慶應義塾高等学校校長)

c. 婦人科医の立場から、

大田博明先生（慶大産婦人科助教授）

d. 都市建築家の立場から、

榎 文彦先生（榎建築設計事務所）

e. 栄養学の立場から、

江澤郁子先生（日本女子大学家政学部食物学学科教授）

f. 一般市民を代表して

増田明美氏

なおこの企画には読売新聞社の支援を得ており、講演内容については読売新聞に掲載されることが内定している（掲載日は未定）。

この市民公開講座についてのお知らせ、聴講申し込みについては同窓の先生方には直接ご案内申し上げますが、読売新聞誌上、NHK総合テレビにおいてもお知らせします。また関連病院、開業されておられる先生方のもとにポスター、参加申し込み用紙をお送りする予定ですのでどうぞよろしくお願いいたします。すでに司会者との打ち合せも行っており、内容についてはご満足いただけるとなると確信しております。よろしくご支援のほどおねがい申し上げます。

## ② 記念品

参加者に配布するバッグ（抄録号などを入れるための

もの）については試作を重ね、9月上旬に決定しました。現在正式に発注しており、日整会学術集會にふさわしい品物であると思っております。

シンポジウム、パネルディスカッション、特別講演、教育研修講演などの演者に対する感謝状、座長への記念品などを選定中です。

## ③ 広報

国内外諸学会への広報、SICOT事務局との連絡、海外主要雑誌（J. Bone Joint Surg., Clin. Orthopaedicsなど）への掲載依頼はすでに三月迄に終了しております。



## 日整会準備委員会会場係より

小川 清久 (50)

日整会の会場係を仰せ付かる。日頃仰せ付かっている医局の雑務係の延長かな? いやいや待てよ、いつもの手を黒く汚す役より少しは高級かもしれん。ホテルのパーティー会場のボーイさんクラスかな? こりや大変だ! お客様の数は? 卓につく人数は? 立食かな? 料理は洋食、和食、はたまた中華? 食器はナプキンに、フォーク……? 箸かもな? レンゲも必要なのかな? デザートは何だろう? まさか手摺みで食べないだろうな? ……などと、止め処も無く疑問が浮かびます。でもこんな事、学歴も無く、頭も無いボーイ風情の考えることじゃないんだろ。うな。黒服を着たあの人達の言うままに動きゃいいんだろ。

あ、笛が鳴っている。運動会かしら? 何やら分からぬ間に、名前を呼ばれ、小さな胸に少しの期待と大きな不安を抱えて、いざいざスタート線上に並びます。少々不調になる傾向のある心臓も、訳も分からぬのに緊張してドクドクと耳にうるさいばかりです。でも、でも、何の競技なのかな? スタートの号砲も鳴らないし、走るのか

な? それとも四つん這いで這うのかな? あれ、誰か走っているようだけど、多分フライングなんだろう。何時しか廻りは暗くなったけど……。ま、いいか。

どんなパーティーか分からないけど、ナプキンにアイロンをかけなきゃ、又怒られるし……。せめて折り目は綺麗に揃えておいても悪くはないし……。でも、黒服を着たマネージャーさん達に急に、赤いナプキンにしろと言われたら、どうしよう。

ところで、運動会のスタートライン上で寝ているヤツと、今ナプキンを畳んでいるヤツと、これを冷やかな眼ざしで見ても、今文章を書いているヤツは、やけに顔が似ているな。

皆々様、パーティー会場でウロウロしている気の利かない中年のボーイが居ても、叱らないでやって下さいね。



## 商業展示について

堀 内 行 雄 (52)

いよいよ第69回日本整形外科学術集会総会が来年の四月にせまっております。今回の会場が新高輪プリンスホテルに決まりました時に、ホテル内での商業展示は場所がとれないので無理だということで、他の場所で行うか中止にするかを学会実行委員会で真剣に検討したことを憶えています。十年前に泉田前教授が本学術集会を開催されたときは、商業展示に確か品川プリンスホテルを使用したと思いますが、御存じのように品川プリンスホテルは新装してオープンしてしまい、当時のような使用方法は不可能な状態です。

展示の一区画を小間と呼びますが、小間数については、日整会のような大きな学会では、約五〇〇小間程度が必要になります。飛天の間を展示に使用するとゆつたりと十分な展示が可能にはなりますが、使用料が高くなり高額を展示する側に要求しなければならなくなります。当初は、飛天の間の横にあるさくらの間のみで展示を行うようにとのことでしたが、このみでは二〇〇〜二六〇程度の小間数しかとれず、大手企業に小さな小

間でがまんしてもらう以外に方法がないと考えていました。

今年展示した業者にアンケートを送り、大手企業の係を呼んで話を聞いた結果、大手企業は、日整会総会のような大きな学会では、小さな小間では、彼らの目的が果せないで困るというのがほとんどの意見でした。矢部教授も商業展示の場所の狭いことに気がかけて下さり、新高輪プリンスホテルのすみの二階と三階の四部屋（飛鳥、天平、平安、白鳳）を商業展示に使用させていただけることになりました。これでさくらの間とあわせると五〇〇弱の小間数がとれることになりました。

しかし、新高輪プリンスホテルのその四つの部屋は、角にあるため小さな企業では人を呼べないのは目にみえるような気がしますので、主に大手の企業に割安で使用してもらって自らの力で人を集めてもらうように話をしています。また、さくらの間も、通路側や人の集まりやすく目につきやすい場所は、値段を高くしたりすることも検討しています。

ワークショップやハンズオンセッションも希望にそって何とか人が集まりやすい型で行っていきたくと考えています。

ランチオンセミナーも、午前午後の演題の邪魔にならないような型で予定したいと考えています。

また、サテライトレクチャーは、井口講師の御努力で製薬企業六社（二社×三日）が決まり、その他「くの夕べ」ということで飛天の間を使用したサテライトレクチャーと同じようなものを二社に行ってもらう予定をしています。

まだまだ調整しなければならぬことがたくさんありますが、商業展示のことで何か気がつかれたことがございましたら、是非とも先輩方のアドバイスをいただき、商業展示におきましても実り多い、慶應らしい学会の一つにしたいと考えています。



## 学会準備状況

竹田

毅

(47)

### 【スポーツ】

首都圏の場合会場の確保の問題もあって、前回の学会（東大主催）に引き続き今回もスポーツイベントは、その規模を縮小せざるを得ません。残念ですがラグビー、ジョギング、バレーボール等は開催を見送ることとなりました。ただし野球とテニスは古い伝統があり、開催の要望も非常に強いことから、復活開催することと致しました。

野球、テニスとも学会期間中の早朝に執り行います。

野球については、すでに全国の各ブロックで予選が始まっておりませんが、決勝大会は神宮外苑の軟式野球場で開催致します。ただし決勝戦だけは東京ドームで行う予定にしております。主催校である我が慶大整形は予選を免除されておりますが、誠に遺憾なことながら、現在のところチーム編成のメドが立っています。

テニスの会場は品川プリンスホテルのテニス場を予定しております。開催方式は例年通り個人戦が主体となりますので、奮ってご参加下さい。参加申し込みの受け

付けは年明け早々に始める予定です。

【ソーシャル】

レディースプログラムとして、「歌舞伎」および「キヤッツ」の観劇に、庭園散策等を加えたコースを用意することといたしました。このほか有志の主催による「親善囲碁大会」が学会終了後の四月十四日（日）の午後、日本棋院で行われることが内定しておりますが、学会主催校としてこの会を後援することとしております。詳しくは学会開催時に会場の掲示板でご案内致します。

## 第69回日整会総会を控えて

花岡英彌 (37)

第69回日整会総会を来春に控え、矢部教授を始め、教室内の学会実行委員会のメンバーを中心に学会準備が着々と進められており、大変心強く思っております。

泉田教授が主催されて以来、十年目に同じ新高輪プリンスで開催の予定で、当時の事が色々と思い出されます。泉田教授の時は、臨床と基礎とが別れて開催されることになった第一回目でした。そのためか、スケジュール的には、若干ゆとりがあったようで、第一日目第一会場前中は、教育講演（現在の記念講演と特別講演に相当）が四つありました。「生命科学と医学」（渡辺格教授）に続いて当時モラトリウム人間で有名になった小此木啓吾先生の「現代人の心理構造」の講演があり、本部のあった控え室のモニターテレビを通して聞いた事を思い出します。

当時と較べて、年令、演題数も増え、同時に参加者も増えているため、準備も大変のようです。経費も倍位かかるかと思われませんが、教室内、同窓会、関係企業、業者などの協力により、おおよそ、目標の資金も集る見通



しとの事で、安心しております。これも、矢部教授の政治力、人徳によるものと思っております。

私は学会準備委員会のメンバーの一人でありましたため、大学を辞め一民間病院へ移りましたにも拘らず、その後も引き続き実行委員会のメンバーとして残して戴き、矢部教授の御好意に大変感謝致しております。月一回の委員会には欠かさず出席するのを楽しみしておりますが、実務的なことは何もできず、申し訳なく思っております。

一口に「慶應らしい学会を」と言いますが、難しいのですが、記念講演や教室のスタッフがシンポジストやパネリストとして活躍する学会発表、あるいは会長招宴などに、慶應色がでて、出席者が慶應らしいスマートな学会であったとの好印象を抱けば、学会は成功と言えるでしょう。

学会まであと数カ月残すのみとなりました。微力ですが、私もできる限り協力致して参りたいと思います。

学会終了まで、同窓の皆様方の今一層の御協力をお願い致します次第です。

## 慶應らしい日整会総会を

菅野卓郎 (27)

一昨年の「ふるさと」誌上で、同年四月矢部教授が第六十九回日整会総会々々長予定者に決定したことを喜び、慶應として恥かしくないよう立派に学会を成功させたいという希望を申し上げました。まだまだ先のことと思っておりますがもう目の前に迫って参りました。現在すでに教授を中心とする教室のスタッフの方々がそれぞれの役割を分担して準備を着々進めておられることを伺い、まことに心強く、嬉しく思っております。

さて「ふるさと」編集係から「第六十九回日整会に望むこと」の原稿依頼を受けましたので少しお願いを述べたいと思います。とはいえ学会の企画をどのようにか実際の運営をどうすればよいなどの意見はもちろん私からは何も申し上げることはありません。

私が今回の学会で望みたいことは、慶應整形外科の真心の通ずるようなできるだけ「手づくりの学会」を開催して欲しいということでありませう。

それについて私は個人的に私がフレッシュマンだった昭和二十五年、故岩原教授が第二十三回日整会総会を主

宰されたときのことを思い出します。その頃の状況は今では想像もできませんが、慶應北里講堂においてももちろん一会場でも多分二日間だったと思います。当時の整形外科医の数は我々のごときフレッシュマンを除くと全国で千人に満たなかったと記憶していますが、その所在地を日本地図の上に我々の手で、マークして展示いたしました。学会の規模も今の地方会程度でした。受付、スライド、図表（すべてがスライドではなく手書きの図や表を掲示することが多かった）、時計、進行などの係はすべて教室員が行い、会場の表示や案内まで我々がつとめるというまったくの手づくりの学会であったことが印象的でした。参加した先生方も我々教室員一人一人に「苦勞さん、ご苦勞さん」と声をかけて和氣藹々としたものでした。したがって当時はその年々によって各大学の特色がはっきり出て和やかな雰囲気で開催されるというものでした。ときには大変質素な学会だと思つておりました。もちろん今日ではその規模は比べものにならないくらい大きく、したがって学会屋さんと呼ばれる専門の業者にお願ひしなければどうにもならない時代になっております。しかし業者さんすべてに任せ切りですむものならばどこが主宰しても同じで、費用を沢山出せる大学が豪

華な学会をするということになりかねません。それでは客を迎えるホストとしての精神に欠けはしないかと危惧するものです。そこで今回は今までの学会の習わしにとられることなく教室の方々には思う存分の意見を出していただきたいと思ひます。また実際当日には、大変でしようが後にひかえて指揮をするというだけでなく、できるだけ直接会場に顔をだしていただければ自然に我々の氣持が参加者に通ずるものと思ひます。矢部教授の身体は一つですし教室員の数にも限りがあります。もし必要なら現教室員以外の人々にもお願ひしてよいでしょう。

さらにこの学会のために、「進んで雑用を引き受けていただくたい」という希望を申し上げます。学会を主催するということはもちろん名譽あることに違ひありませんが、実際には会をお世話するのですからサービスの心がすべてであるといえます。慶應整形外科は学問をする教室であり、そこに集まった諸兄はすべて優秀な頭脳と能力の持ち主ばかりであります。しかし本来の臨床や研究の業務からはど遠い学会開催という現場において自分達になじまない仕事も多々あると思ひます。「つまらない雑用などは業者やアルバイトに任せて置けばよいではないか」といいたくなることもしばしばあるかもしれせん。

しかしそれでは本当に慶應の血の通った学会開催はできないと思います。研究の足しにならなくても、またそれを誰にも認めて貰えなくても、雑用をやることを通して慶應整形外科の一教室員ないし同窓会員である喜びをもっていたければ嬉しいことです。

矢部教授には教室を主宰するという本来の仕事のほかに院長として苦勞の多い毎日でありましょう。その上で学会長の大使ですから身体がいくつあっても足りないことかと思ひます。教室のスタッフの方々も大変ですが、教授の負担が少なくなるようお願いいたします。

来たるべき第六十九回日整会総会を慶應として恥かしくない学会に、また参加された全会員に我々慶應の気風を少しでも感じてもらえるような学会にすることができればと念願する次第です。

## 日整会に寄せて

泉田重雄 (23)

来年四月には教室矢部教授主催で日本整形外科学会が開催される。所も十年前に吾々が同じ学会を催した新高輪プリンスホテルである。誠に同慶の至りであり、歴史に残る立派で意義深い学会であつて欲しいと念ずる処であり、又楽しみである。

処で最近整形外科はどうあるべきか、とか整形外科医は何をなすべきか、と云つた議論を耳にすることがすくなくない。何も整形外科に限つたことでなく医学会全体、否全社会的に云われることであろうが、目先の忙しさに追われて、深い思惟も、反省もなく、只一途に働きつづけて来た人も多いと思われるので、学会々員一人一人がこの際、整形外科、整形外科医のあるべき姿を考えてみては如何であろうか、此処では来年の学会開催に因んで二、三の提言を行つてみたい。

理事長制の導入以来、学会の社会的活動がより活発化し、それ相応の成果も挙げていることと考えられる。しかし學術集会に関しては未だ余り変化がない様である。

今や日整会も会員数一万七千人を越える。春の学会参

加者も四千数百人を数える。岩原先生が会長をされた昭和二十五年には会員数一千百人程、学会場も一会場、現北里講堂のみで足りた、而も会員の半ばは外科の偉い先生方であった。又昔、学問の先端と独創のみの舞台を考えられていた學術集會も、現在は啓蒙と普及の場と云えよう。數の巨大化が質の変化を招いたものである。

マンモス学会を担当して先ず大切なことは会場の確保と宿泊施設である。会場の確保には一年以上前から手を打つ必要があり、適当なものが少ない。大ホテルを使つてもよいが費用が大変である。宿泊施設に至つては、地方における大学の開催を不能にする場合がすくなくない。そこで提案したいことは日本中に医学会學術集會のための施設を數ヶ所建設したら如何であろうかと云うことである。世は不景氣であり、容易なこととは思われないうが、三十万もいる医人が協力し仮すに相應の年月を以てすれば建設は不可能ではあるまい。現在米國で整形外科学會の開催は四ヶ所程の十分な設備のある都市に限られてゐる。日本でもこの勢で会員が増加すれば近いうちにそうなるであろう。それならばむしろ先手を打つて、全医学会の問題としてこの種の計画の検討立案を始めるべきであらう。

提案の二は学会雜誌である。雜誌の形態が大きな変化

を遂げるのではないかと云うことはさて置いても学会雜誌が殖えすぎて始末に負えない、扱も粗略になり勝ちである。学問の進歩につれて学会は愈々増加する、旧いものは左程には減らない。又学会誌の発行は学会の資格の様に思われるし、學術會議への迷惑等もあつて、雜誌も殖える。又学会員は認定医等の資格の取得、維持となる学会発表論文の増加する必要があるから情報は一層増加すると云つたわけで雜誌が氾濫している。これは決して悪いことではないが、収納に限りがあるし大震災でもあれば大変である。又年二回程度発行の学会誌等、多くの医学図書館でよい対応をうけていないのではないかと心配である。勿論、担当者に聞けば「出来る限り蒐集して閲覧出来る様にしてあります」と云う返事が戻つて来る。然し実態は様々であろうと思われる。問題は多品種少量生産による整理の困難さにもあり相である。吾との方で統合整理したら如何でしょう。複数の学会が雜誌発行に關して合同して月刊雜誌にすることである。各号部数が不揃いであるがそれはそのままよい。会員は自分の所属する学会にのみ会費を拂いその所属の会誌のみを受得る。こうして、○整形外科・P.B.P整形外科学會誌等がそれぞれ毎月発行する様にしたならば図書館での整理は便利となると思われる。折角の研究、勉強の成果と散佚させ

ないために役立つと思われる。

第三には学会の費用である。従来も学会参加費・会場費として若干の費を出席者から徴収して学会運営の用に充てたわけで、その会計報告も行なわれていたが、もとよりそれで足るわけもない。私はもっと高額の学会参加費を参加者から徴収してよいと考える。会長は高額の参加費徴収を自分の所では始めたくないので仲々手がつかず、始める人はいない。

日本の学会参加費は諸開国に比較して大分安い様に思われる。受益者負担を考えるべきだ。

以上学会関連の二、三の事柄について私見の一端を述べた。今すぐ手のつけられないこともあるが、出来ることから手をつけ、検討してみても如何であろうか。



特集：新名先生のご逝去を悼んで



略 歴

専門  
軟骨の生化学、膝関節外科

新名止由（しんめい まさゆき）  
防衛医科大学校 整形外科教授

逝去 平成7年6月1日、享年54才  
生まれ 昭和16年1月18日、金沢市

学歴

昭和34年 慶應義塾大学医学部入学  
昭和40年 同 卒業  
昭和41年 同大学院入学  
昭和43-45年 東京医科歯科大学硬研生化学へ出張  
昭和45年 慶應義塾大学医学部大学院卒業

職歴

昭和45年4月 慶應義塾大学医学部副手（整形外科学講座）  
昭和45年7月 川崎市立川崎病院整形外科医員  
昭和46年7月 国家公務員共済組合立川病院整形外科医員  
昭和47年7月 国立塩原温泉病院整形外科医長  
昭和48年2月 国立療養所村山病院整形外科医員  
昭和49-50年 シドニー大学整形外科（Taylor教授）へ留学  
昭和52年 防衛医科大学校講師  
昭和55年 同助教授  
平成4年 同教授

役職

日本整形外科学会評議員  
日本リウマチ学会評議員  
骨粗鬆症財団理事  
日本結合組織学会理事  
日本軟骨代謝学会理事  
東日本リウマチの外科評議員  
日本リウマチ関節外科学会評議員  
関東整形災害外科学会幹事  
日本整形外科スポート医学会幹事  
日本整形外科学会基礎委員会委員長  
日本整形外科学会骨系統疾患委員会委員  
Osteoarthritis Research Society (Advisory Comitee)  
WHO Multinational Collaborative Study on Predictors of Osteoarthritis (委員)  
European Journal of Experimental Musculoskeletal Research (Editorial Bord)

学位

昭和47年 「慢性関節リウマチにおける酸性ムコ多糖体の生化学的研究」について

学会長

平成3年 第3回骨系統疾患研究会会長  
平成6年 第23回東日本リウマチの外科研究会会長  
平成7年 第8回日本軟骨代謝学会会長

「学問一路」

## 故新名正由教授追悼の辞

矢部 裕 (36)

防衛医科大学校整形外科故新名正由教授には平成七年六月一日、胃癌のため御逝去されました。享年五十四歳。君を敬愛してきた同門の友人の一人として、ここに心から哀悼の意を捧げるとともに御冥福をお祈り申し上げます。

私が故新名正由教授を最初に見舞ったのは本年一月のことでありました。術後であり、彼はさすがにやつれていましたが、いつもながらの精悍な顔つきで自らの病のことを語ってくれました。ヴィルヒョウの腫脹に気づき検査の結果は胃癌であったこと、手術により胃の病変部はすべて取り除かれたこと、リンパ節への転移については薬剤の注射で根治せしめて行く予定であること等でした。医師であればだれでも気づくその不合理性にも拘らず、彼は死を全く意識していない様でした。彼が日本の代表をしている日米加欧の国際整形外科基礎学会、そして自らが主催するこの春の第八回日本軟骨代謝学会のことを熱っぽく話してくれました。以後、主に入院生活の

まま、大学関係、整形外科学会の仕事をこなしましたが、症状の進行は誰の目にも明らかでありました。第八回日本軟骨代謝学会に新名会長自ら出席できるかどうか気になりましたが、学術集会はもとより、会長招宴においても自らそのホスト役を見事に果たしました。国際学会を思わしめるまことに高度で、内容のある学会でありました。しかし彼の病を知る人には凄絶でありました。それから三ヶ月もたずに彼は罷りました。まさに「学問一路」最後の花道を見事に歩み切った名優の舞台をみただが致しました。彼の学問に対する情熱と高潔な学者の真実に接した感動でありました。

故新名正由教授は、昭和四十年に本学医学部を卒業し、インターンの後、翌四十一年慶大整形外科大学院へ入学致しました。故池田亀夫教授指導の第一期大学院生といえます。池田教授は教室に生化学研究班を作るべく、大学院生を中心として医局での早朝勉強会を始めました。そこには常に若き青年医師新名正由君がありました。数年先輩の私は早朝勉強会のことを忘れて医局のドアを開け、池田教授と目が合い気まずい思いのまま白衣に着替え、そうそうに外来へ赴いた記憶がございます。そして昭和四十三年から二年間東京医科歯科大学硬組織研究所生化学永井裕教授のもとへ赴き、生化学研究者としての

歩みが現実化したわけです。当時大学紛争のさなか、学位テーマを返上した教室員も多かった中で、彼は「慢性関節リウマチにおける酸性ムコ多糖体の生化学的研究」を発表し、学会で高い評価を受けるとともに、これが学位論文となりました。昭和四十九年から五十年にかけてシドニー大学テイラー教授の下へ留学し、彼のムコ多糖の生化学はますますみがかかりました。このころ、現名古屋大学整形外科岩田久教授等とともに骨・関節の基礎を語る会を作り第六回には自ら会を主催致しました。以後年々会員がふえ、日整会基礎学術集会へと発展していったことは記憶に新しい所であります。

昭和五十二年には防衛医科大学校整形外科講師、同五十五年には助教授となり、下村教授の下で教室をまとめつつ更に研究を深め、国際学会にても幾多の優れた業績を発表して、日本にナショナルデیفュンスメデイカルカレッジありとその名を高めました。特に「変形性関節症における軟骨破壊の病態診断を可能とした関節マーカー、コンドロカルの研究」は有名であり、WHOの共同研究として「変形性膝関節症における生化学的マーカー」を担当致しました。また多くの後輩の外国への留学への道をつけてくれました。

日整会では、評議員、認定医口頭試験委員、骨系統疾

患委員会委員、基礎委員会委員を務めるとともに、平成四年からは基礎委員会委員長を務め、特に日米加欧の国際基礎学会における日本代表の一人として盡力されました。

彼は私には家庭のことをあまり話しませんでした。家の中は奥様がしっかりと守っていたわけで、それだけに学問に専念できた彼は幸せものでした。テニスはなかなかの腕前と聞いております。ゴルフは二、三度一緒に回りました。当たれば三百ヤード近く飛ばす腕前を持ちながら、スコアーは私と同じ位でまともりませんでした。家庭とテニスと彼のオアシスであったと考えます。

平成四年教授となりました。彼の真摯な人柄と学問を慕って、次代を背負うべき若き有能な同門が彼の下にはせ参じました。これらの人たちと力を合わせ、更に飛躍を期して新名整形外科教室作りを始めて三年、ようやくその基盤が固まった所といえます。これから大輪の花を咲かせ、結実へと向かう時、五十四歳の若さで何故君は幽明境を異にしたのか。君を知り、君を敬愛する世界中のすべての人が残念に思っています。君は、病床で三年間定期検査は受けていない、忙しくて自らの体をおもんばかりにひまがなかったと言った。はがねの様な体でまさか自分がこんな病に侵されるとは夢にも考えて

いなかっただともいった。

君は学者としては百点だが、社会的には百点にならないあまさがあり、それが君の言うお愛敬で、皆から愛される由縁でもありました。それが命とりになるなんて。

今更ぐちを言っても始まるまい。先生の学問は、先生の教えは、先生を敬愛し、先生の教えを受けた人達すべてに継承され、やがて大輪の花を咲かせることでしょう。新名先生、ちょっと若かったが安らかに天国でお眠りください。ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌。



## 新名正由君を悼んで

水島 斌雄 (44)

新名正由・防衛大学整形外科教授が今年の六月一日にお亡くなりになりました。まだ五十四才の誕生日を迎えただばかり、整形外科の研究者として内外で名声が高いとはいっても、教授に就任してから僅かに三年、これから一層の飛躍が期待されていました。三十五年來の友人として、残念だとか、悲しいだとか、というような言葉ではとても言い表せません。訃報を知った瞬間に頭の中が真っ白になり、鳥肌が立つ思いのなかで、過ぎ去った数々の思い出が頭の中によみがえりました。

新名（シンメイ！ゴメン、呼び捨てで書かせてください）と私とは、昭和三十四年慶應義塾大学に入学、整形外科教室でも同期の入室です。予科の一年の時は特別仲が良かったわけではなく、親しい友人となったのは予科二年生の春の事でした。時は昭和三十五年、日米安保条約批准をめぐる、日本中が真っ二つに割れて騒然とし、革命前夜のような日々が続いていました。友人となったきっかけは、正義感みなぎる革新の新名が、反動右翼の私を安保粉砕、国会議事堂包囲のデモに誘った事

から始まりました。共に日本の将来を思いながら、全く逆の考えを持った新名と私は大激論と大喧嘩の結果、不思議に何処か理解しあえる所をお互いに発見し、それ以来親しい友人となりました。もっとも、その後も会えばしょっちゅう喧嘩ばかりで、大学時代の同級生や整形外科の教室の方々には理解しにくい友人関係と思われていたようです。

大学時代の記憶をたどると、映画や銀ブラのダブルデート、田園調布や神宮でのテニス、志賀高原や八方尾根のスキー、どれもが鮮やかな青春の思い出がいっぱいです。勉強でもスポーツでも人間関係でも、常に最大の努力を惜しまない努力家の新名とその正反対の私とは、まるで水と油の様に溶け合う事がないように見えて、実はお互いに相手を認め合う不思議な友人関係を培っていました。

世の中恐いものなしに見える新名が、奥様と初めてデートした前日、何処に行ったらいいか私に相談をしてきた時のこと。デートが大成功し、理想の女性とついに巡り会えた喜びで、新名の十八番の「人を恋ふるの歌」を歌ったこと。調子っぱずれ、かつ感情豊かに「妻をめとらば才たけて、みめ麗しく情けある………」と歌った情景。パレスホテルでの結婚披露宴で、嬉しそうな新名と

輝くばかりに美しい奥様の幸せな姿。まるで昨日のことに様に、鮮やかに臉に浮かんできます。

整形外科に入室してからの思い出では、生化学の研究室のことが特に印象的です。ご存じの通り、生化学実験の化学反応は一般に時間がかかり、数時間から数日を要するものが多いので、実験には当然計画性が必要です。

私が夕方に実験を開始し、反応が終了するまでの時間を六本木や横浜で効率よく過ごし、明け方に研究室に戻ると、新名が実験の終了を待ちながら、黙々と試験官を洗っていたり、一心に文献を読んでいた事も度々でした。恩師の故池田亀夫教授のお力添えで、東京医科歯科大学・硬組織研究所の永井裕教授のもとに国内留学が決まった時の、新名の嬉しそうな顔も忘れられません。教室の難しい時期に自分の希望が叶えられるのだから、池田教授のためなら今後どんなことでも言うことを聞くと言いつつ切った新名の姿に「男」の正義と誠実な心を見た思いがしました。永井教授の指導のもとでの研究はよい結果が得られ、生化学者・新名が文字通り誕生しました。その後の防衛大学における新名の活躍については、皆様がよくご存じのとおりです。グローバルな生化学者・新名の「生みの親」の故池田教授、「育ての親」の永井教授の關係がその後必ずしも最良とは言えなかったことは、新名

にとつてきつと心残りだったと思います。今年の二月十五日、女子医大病院に入院中の新名を、お見舞いに行きました。新名は思いの他元気でしたが、手術の結果は予後不良と聞いていたため、胸がいっぱいで言いたかった事の半分も言えないままに、病院を後にしたことが、今でもとても悔やまれてなりません。それが新名との別れとなりました。

早すぎる死去でした。まだこれからの飛躍が約束されてきました。何と言ってよいか言葉が見つかりません。心からご冥福をお祈りいたします。



## 新名正由先生追悼文

三 笠 元 彦 (44)

同級生の新名正由先生がさる六月一日に亡くなられました。もし、生きていれば、この追悼文を書いたであろう親友の末沢慶紀先生も昨年三月チューリッヒで客死しており、我々11回生は短い間に二人の仲間を續で失ったこととなります。二月の中頃に柴崎先生と水島先生と私で東京女子医大病院にお見舞いに行った時はまだ元気で今は死ねないとがんばっておられたのですが、誠に残念です。

新名先生の人生を一言でいえば、華のある人生であったと思います。ご存じの通り、俳優でも通用したと思われるような、端正な顔立ちの上に、スポーツもスキー、テニスも一流で、うらやましい限りでした。大学院にすすまれ、大学紛争のさなかでも、生化学の研究をつづけ、医局の生化学班の基礎をつくられました。昭和四十九年から五十年にかけては、オーストラリアに留学され、着実に学者としての道を歩まれて来られました。四十年代の後半、我々が学会でまだよちよち歩きしている時に、岩田久先生（現在、名古屋大学医学部整形外科教授）と五十

嵐三都雄先生（現在、東京都老人医療センター副院長）

の三人で骨、関節の基礎を語る会の発起人、世話人をさ  
れていました。この会が整形外科基礎学会に発展して  
いったことはご存知の通りです。昭和五十五年には乞わ  
れて防衛医科大学整形外科助教授に赴任され、いろいろ  
と苦勞されたようですが、平成四年一月に教授になられ  
ました。申し分のない、華のある医者としての経歴だっ  
たと思います。戦争中は散華の時代であったといわれま  
すが、新名先生の死はまさに華が散る、散華であったと  
思われます。過日、先生の甥御さんが私どもの病院に入  
院された時、「伯父は癌とわかっていながら、働いていた  
ような気がします」と言っておられました。ますます  
その感を深くしました。

教授として日本の整形外科学会、世界の整形外科学会  
になすべき多くのことを残して亡くなられたことは痛恨  
の極みであったことと思われまます。

先日、今年の年賀状を整理していましたら、彼からい  
ただいた年賀状には、「健康管理に気を付けて下さい」と  
書いてありました。どのような思いでこの最後の年賀状  
を書かれたかと思うと、我々はこの言葉を遺言として、  
新名先生のなしえなかったことの何分の一かでもやり遂  
げることがせめてもの手向けだと思えます。ご冥福をお

祈り申し上げます。

台掌



## 故新名正由教授追悼文

山 岸 正 明 (49)

平成六年十二月二十一日は我々防衛医科大学校整形外科のスタッフにとって忘れられない日となりました。その年の予定手術はすべて終了して医局で教室員と雑談をしていたところ、小生と根本、山田尚講師が教室に呼ばれて明日から東京女子医大に入院して手術をしてみらうのでしばらく教室のことを宜しく頼むといつもと変わらない冷静な口調で言われたのが今でもはっきりと耳の奥に残っています。教授になられる数年前から種々の多大なストレスがあり、時々胃の痛みを訴えたり風邪をひいて体調を崩されることが若干多くなったことはありましたが、普段は至って元気で教室の中で一番年長の教授が一番元気だと言われるほど精力的に活動されました。前の週には教室の忘年会で騒ぎ、軟骨の次に好きなテニスも元気にプレーされていたこのことです。教授の入院は教室員にとってまさに青天の霹靂のことでした。胃の悪性腫瘍は既に肝臓や頸部リンパ節に転移していたのです。

新名先生は昭和五十二年に防衛医大に講師として赴任

され、当時の下村 裕教授のもとで軟骨に関する生化学的研究を始めとする基礎的研究はもとより、臨床全般において大阪大学から来ていた若い教室員を引っ張り指導されました。小生も昭和五十四年から防衛医大に赴任し脊椎外科を担当することになりましたが、臨床だけのつもりでいた小生に椎間板の細胞培養をやるうと持ちかけられ、当時世界でまだ成功していなかった椎間板細胞の培養を一緒に検討し、透析、電気泳動、RIなどプロテオグリカン（それまで聞いたこともなかった）の分析の方法をそれこそ手取り足取りで指導して下さいました。一年足らずでその結果を結合組織学会や国際リウマチ学会などそれまで全く経験したことのない学会で発表させて頂いた時のことは忘れられない思い出となっています。新名先生は常日頃から整形外科が外科、内科と同列に並ぶようなメジャーな学問にならなくてはだめだとよく我々を叱咤激励していました。このような整形外科に対する夢と情熱を持っていらしたからこそ、限られた数少ない教室員で関節軟骨代謝と椎間板代謝を二大テーマとして研究活動が国際的なものに発展していくことができたと考えられます。

基礎的研究の偉大さは内外によく知られていますが、整形外科医としての日常の臨床診療についてはあまり知

られていないと思います。先生は症例を非常に大事にされ、患者の診察を重視されて我々が見落とした臨床所見を指摘されることも度々ありました。治療においても関節外科が専門でしたが、必ずしも経験豊富でない脊椎外科や外傷についても人一倍文献を検討されて適切な治療方針を指導して頂きました。

この度の病氣療養中の今年三月三、四、五日に新名先生が主催されました日本軟骨代謝学会は、先生がその発足に努力され育まれた研究会が発展して学会となって初めてのものであります。学会長として先生は「鳥のように国境のない学際的な研究活動の場」をスローガンに諸外国から大勢の研究者を招待され、国際性豊かな先生に相応しい素晴らしい学会となりました。学会での先生の対応ぶりはお病気が殆ど回復したかに思えるほどでした。

しかし病魔は徐々に確実に先生の身体を蝕んでいました。薬石効なく平成七年六月一日午前四時、五ヶ月余の闘病生活を送った東京女子医大で永久の眠りに就かれました。

永年のご苦労がやっと実を結び教授に就任されて三年が経ち、新名整形外科の基盤が出来てこれからというときに、スキー部の部長として学生よりも強い滑りをする

ほどの、またテニス、水泳で鍛えた身体と世界の学会をリードする精神力の持ち主の先生の逝去は余りにも突然で無念なことであります。

防衛医科大学校整形外科教室員一同、新名先生の整形外科学に対する熱い情熱と真理を追求する強い意志を受け継ぐよう精一杯努力することを誓って、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新名先生どうぞ安らかに眠りください。



## 故新名正由教授追悼文

根 本 孝 一 (55)

近い関連病院であり、私が宇都宮を去って所沢に赴くのが、両親は少し寂しそうでありましたが。

防衛医大に赴任して以来、多くのことを学びました。

新名正由先生と初めてお話をしたのは、先生が防衛医科大学校整形外科教授に就任されてからのことでした。それまで、先生が「骨関節の基礎を語る会」の創設者であり、軟骨代謝の第一人者であることは存じ上げておりましたが、一緒に仕事をしたこともなく、親しく話し合う機会もありませんでした。ただ、私がAOA traveling fellowとしてAnaheimのAAOSに参加した時、器械展示の会場で近づいて来る先生のお姿をお見かけし、声をかけようとする間もなく、先生は足早に立ち去られたことがあります。これが、私が先生を身近に見た最初でありました。私にとって、この出会いは印象的であり、先生は颯爽と現れ颯爽と去られて行かれました。

先生が教授に就任された時、私は国立栃木病院整形外科医長でありましたが、「一緒に防衛医大で仕事をしないか」という電話を頂き、一も二もなく行くことに致しました。私は、国立栃木病院には二年間のカナダ留学を挟んで足掛け十年勤務し、そろそろマンネリになりかけてきた時でした。もっとも、国立栃木病院は実家から最も

その一部を申し述べますと、まず、先生の方針である「基礎と臨床の調和」ということであります。私は、これまで基礎医学にはほとんど無縁の医者生活を送って来ましたが、改めて臨床医にとって基礎医学の知識は重要であり、疾患の把握ひいては治療成績にも重大な影響を及ぼすことを認識いたしました。先生はこのことを、カンファレンスを始め色々な機会に教育されました。研究テーマも臨床医の観点から出された基礎のテーマを重視されました。

次に、先生の仕事さらには人生に対するアプローチの仕方であります。決して逃げないということであり、臨床の現場では勿論のことですが、今回の先生の闘病生活を見てはつきりと理解いたしました。私達が先生の御病気について知らされたのは昨年十二月末のことでありました。一月に手術を受けられ一旦は退院されましたが、先生の病状が思わしくないのは誰の目にも明らかでした。その中で、先生は努めて明るく振る舞われ、教室の全ての事項について心配され、また決済されました。御入院中の懸案事項については、山岸助教教授と山田講師それに

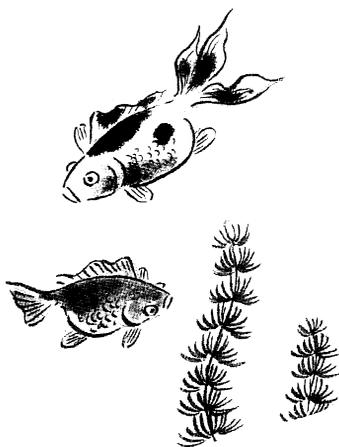
私の三人で定期的に病室を訪問または電話で先生にご相談し処理いたしました。(この間、慶應義塾大学整形外科教室の矢部教授、富士川助教授、戸山医局長には言い表せないほどのご援助を頂きました。また防衛医大岡宮校長にも色々のご心配いただきました。その細部についてはここでは割愛いたします。今年三月に先生が会長として開催された日本軟骨代謝学会は大成功でした。外国からの研究者も多数参加いたしました。治療を受けながらの先生の采配振りは、端で見ても痛々しいものでありましたが、先生は完璧にその責任を果たされました。

次には、先生の国際性であります。先生が若い頃オーストラリアに留学されたことは知っておりましたが、とにかく外国からの来客や手紙の多さには驚きました。外国からの客が来る度に特別講演が開催され、討論をいたしました。このことは研修医にとっても有意義なことであり、良い刺激になったことと思います。常に明るくやさしいお人柄から誰にでも好感を持たれる先生でありましたが、外国にも進んで知己を求められる態度には教えられました。

その他にも多くのことを学びました。私が先生と一緒に仕事をしたのはわずか三年間であります。もっともっと長く一緒に仕事をし、多くのことを教えて頂きました。

かったのです。

また御恩返しもしたかったです。今ははかない夢となりました。しかし、この三年間を私は決して忘れないでしょう。先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。



## 新名先生と日本軟骨代謝学会

山田 治基 (58)

平成七年三月三、四日の両日、東京新霞が関ビルで第八回日本軟骨代謝学会が新名教授の会長のもとに開催されました。この学会が開催される約一カ月半前、新名教授は東京女子医大消化器病センターで胃癌の手術を受けておられ、このことは主要な出席者のほとんどが知っていました。教授に親しい方々は病気の快癒を願っていましたが、その一方でこの学会が教授とのお別れになるかもしれないという気持ちをもっている方も多く、会場には言葉に言い表せない雰囲気があったよかったです。とくに外国からの出席者には、教授自ら病状をお話していた関係もあり、なおさらのことでありました。学会は教授がかねてから提唱していた軟骨代謝に関する国際的な情報の受信、発信という機能を十二分に發揮し、成功裡に終わりましたが、直前まで病院に入院していた教授の学会にかける情熱はまさにすさまじいものがありました。この新名教授がまさに生命をかけて取り組んだ日本軟骨代謝学会について、その成り立ち、経緯などについて記しておくことは私の役目と考えましたので、報告させ

ていただきます。日本軟骨代謝学会は、日本軟骨代謝研究会をその前身として平成六年に学会組織に改組された団体です。日本軟骨代謝研究会は新名教授が中心となつて、昭和六十三年に発足したなかば私的な研究会でした。中心は新名教授でしたが、当時の防衛医大整形外科の教室事情から、事務局は北里大学の山本真教授の所へ設置されました。教授の考えで、この研究会は当初から整形外科の臨床医と生化学等の基礎系の研究者が協力してその運営にあたり、まさに基礎と臨床の接点における討論をおこなうことを目的としていました。研究会は山本（当時北里大整形、現在九州労災）、岩田（名大整形）、藤井（慈恵大整形）、木全（愛知医大分子医科研）、加藤（当時阪大歯、現在広島大歯）の各先生と新名教授の六名の世話人ではじめられ、当初は臨床二十一施設、基礎七施設の参加によって構成されていました。回を重ねるごとに参加希望者も増え、途中からはほぼオープン形で開催されるようになりましたが、平成六年に研究会から学会組織に移行し、事務局を防衛医大整形におくことになったわけです。私も中川智之先生に指導していただいたOAの研究を第一回の研究会で発表させてもらって以来、何回か出席させていただいております。平成四年に防衛医大に赴任した後は、学会移行にあたっての事

務を命ぜられ、初めてのことばかりでとまどいながらも、会則作りや会員募集などのお手伝いをさせていただきました。教授は日本の軟骨代謝における若手研究者を鼓舞する目的で、学会賞の設立にもたいへん力を注ぎました。学会賞の資金は山本真先生が個人的に拠出されました。この学会賞も平成七年の新名教授が主催した第八回総会で最初の受賞者を決定しましたが、その発足に関しても教授の並々ならぬ意志がありました。実はこの学会賞の話が持ち上がったのは平成六年八月ごろであり、それから賞の規約作り、理事への根回し、広報、募集などを行わねばならず、とても教授の主催する第八回総会には間に合わせることは無理と思えました。ところが、教授は規約などは完全でなくてもよいから、とにかくはじめる事だとおっしゃり、関係者の意見をまとめ上げ、総会に間に合わせました。賞の話が出たころには、教授はご自身の病に氣づいておられなかったはずですが、やはり虫の知らせというべきか、時間のないことを悟っていらっしやったのかも知れません。表彰式で二人の若い受賞者に賞のメダルを授与される際の教授のうれしそうな顔が今でも目にうかびます。



以上の様に日本軟骨代謝研究会、同学会とともに歩んでこられた新名教授でしたが、本学会のさらなる発展を見ることなしに逝ってしまったのは誠に残念というほかはありません。学会事務局は教授の無二の親友であった名大の岩田先生が快く引き受けて下さり、ここに防衛医大の事務局としての役割も終わりました。将来、日本軟骨代謝学会がさらに発展し、この学会の発足に慶應出身の新名教授が関与していたということが誇りに感じられるような、りっぱな学会となっていくことを心より祈っています。



## 私の履歴書

野間 千賀子 (特)

昭和十九年春、私が東京女子医専の四年生の時、始めて岩原先生が院外講師として整形外科の講義を担当され、例の岩原節を聴かせて頂きました。その年の秋、丁度戦時中のことで、多くの医師を必要とした関係上、半年早く卒業して免許証を頂きました。この時岩原先生のお勧めもあり、また女だけの学校の雰囲気とうんざりしていたこともあって、慶應整形外科に入局しました。私は三田の府立第六高等女学校の出身ですから、慶応とはお隣同士の誼みで、余り抵抗もなく入局した次第です。前田和三郎先生が医療団を編成してビルマへご出発の歡送会を兼ねて、二十三回生と一緒に歡迎会をして頂きました。

医局は殆どの先生方が軍医として出征され、残っておられたのは数人でした。戦局がますます厳しくなつて、二十年三月の下町の空襲の翌日には大内先生が被服廠から逃げて来たこと、真っ黒に煤けたお顔で医局に飛び込んで来られたことを覚えています。

五月末の艦載機の爆撃で東京が焼け野が原になった後、私が住んでいた鶴見の家が建物疎開で取り壊されること

になり、仕方なしに当時父の勤務地であった旧満州の新京市に移ることになりました。終戦も真近い六月半ばのことでした。

新京では新京特別市立病院に勤務することになりました。ここは九大関係の病院で病院長は「小野寺の圧痛忠」で有名な小野寺先生、整形外科医長は神中先生門下の市村平八郎先生で九大整形外科の空気を少し嗅がせて頂きました。患者の殆どは骨・関節結核でした。

僅か一カ月で終戦、内地での頑張りでは通用しない外地で終戦を迎えて複雑な気持ちでした。冬の間はソ連兵が駐留し、一年間は蒋介石の中央軍が進駐し、その後八路军と交替しました。歴史の変遷を現地で見えたことになりました。混乱が少し収まって病院が機能し始めましたので留用され、二十二年秋内地に引き上げて、医局に復帰しました。

帰って来たとき診療室と医局は別館中央病棟の一階にありました。看護婦さん相手にガーゼにギプス粉をまぶして手製のギプス包帯を作ったり、ギプスを巻くには裏庭で、コルセットは樹の枝にグリソンを懸けて巻きました。ささやかな宴会の時など木城先生が無水アルコールで手製のウイスキーを作ったり、上牧先生が庭でけむそうに魚を焼いておられたのもこの頃です。

その内にお偉い先生方が次々と復員してこられ医局が手狭になって来た頃、医局が四階の食堂跡に移り次第に診療体制が整って参りました。二十四年には岩原先生の「脊髄損傷」の宿題報告があり、その翌年には整形外科学会の当番校となって皆張り切って仕事をしました。

学会が終わった週に山口先生、金井先生、野間の三組が結婚式を挙げました。その頃は皆若かった！皆頭髪は房々とし、お腹も程良く引っ込んでいました。そして私は女の特権を最大限に生かして（これは泉田先生のお言葉です）走り回っていました。楽しかったですね。

三十年には野間の勤務の關係で塩原温泉、三十三年から富山の高岡市に行き、暫くして育児の手が省けるようになったので富山市の高志学園（園長・小林先生）に勤務させて頂き、障害児に接することが出来たことはとても貴重な経験でした。三十八年帰京し、川崎市立病院（院長・金井先生）に宇井先生、伊勢亀先生、内西先生と一緒に勤務することになりました。ここで皆さんにしごかれて、整形外科医としての心得が多少身につくようになったと思います。

四十三年、余り自信はなかったのですが、思い切って大井町の自宅で開業しました。初めは病室を持って結構手術しましたが、三度の給食が大変なのと、不用心

なこともあって中止。今はレーザー、鍼灸、マッサージと専ら専門内科に徹していますので、病院らしからぬ病院ということで野間先生の大きな笑い声が聞こえて参ります。

私の戦後五十年のお話はこれでおしまい。

最後になりましたが、我儂な未熟者を温かくご支援下さった教室の皆様から厚くお礼申し上げます。そして教室が益々発展されますようお祈りいたします。



## よき先生にめぐまれて

山口義臣 (24)

神中整形外科のぶ厚い本を持ち歩いたおかげで、岩原先生は君達によく勉強したから、試験はせんでもよいと云われ、この口車に乗せられて気をよくした私は田中、金井の両君と共に入局したが、意に反して悶悶の日々を送ることになった。自信たっぷりの先生だからさぞ高邁なる学問の話が聞かれると思ったら、何と朝から晩までワイ談ばかり、はじめは面白半分聞いていたが、先輩の西先生、大内先生も毎日これに調子を合せ一向に終る様子がない。思い余って少し学問的な質問をしたら、君、大学は自分で勉強するところであつたらしくはないと一喝され、しゅんとなつてしまった。こんな医局で勉強してもはじまらないと、学位なんていらぬとすつと恐る恐る申上げたら、名医になるには学位をとらんことにはどうにもならぬと怒鳴られ、仕方がないのでうやうやしくテーマをいただいた。その内に君は学者になれと云われ、私は又逆らつた。私は学者になる気は全くありませんと答えると先生はしばらくして、では何になりたいのかと云われ、趣味としての研究ならいたしますと答え

た。先生は君は趣味でも何でもかまわんから好きなことをやりたまえという異例の御返事をいただいた。後年人間工学の分野に首をつっこんで楽しい時代をすごされたのも、この寛大な岩原先生のおかげと深く感謝しています。先生は腰は切らねば治らんという信念の持ち主でしたから、今日のように保存療法が無効な場合に手術をするというお考えではなかつた。



当時私も切ることに専心し、後方アプローチによる椎体固定術の第一例を報告したら、君は何て危険な手術をと絶句されたのを今でもはっきり覚えています。でももういたしませんと答えたら、何も止めないでいいと云われた。その内に同じ様な手術をするは何だか職人みたいだという気がした時に、スエーデンのカロリンスカ研究所におられた人間工学のパイオニアであるオーカーブrom博士や、当時その分野の頂点にあったスイス連邦工科大学のグランジエン教授の知遇を得て、両先生に坐る姿勢のバイオメカニクスの研究でおほめにあずかったのは懐かしい思い出です。ホテルオークラの別館に小さいクリニックを開いた現在では、子供の頃から親しんだ植物とおつき合いが復活し洋ランを通じて国内や海外の友人とも植物談義に花を咲かせているのが現在の私なのです。

## バレエと整形外科医

小川 正 三 (29)

— 前回のふるさとに「バレエダンサーのあしについて思うこと」という一文を寄稿した。その後も日本のバレエ医学の確立をめざして努力している。よくお前は何故そんなバレエに打込むようになったのか、ときかれる。一言でいえばバレエの好きな整形外科医だからということになる。ゴルフでもテニスでも陸上、水泳、その他万般のスポーツ、囲碁、麻雀、石集め、などなど、趣味というものは他人にとってはどうみられようとも、好きな本人はそれに夢中になる。人は人なのである。

バレエの好きな人は多い。しかしバレエ医学となると整形外科医の分野である。故にバレエの好きな整形外科医は趣味と実益を一致させることが出来る。日本の整形外科医は学会員だけでも一万余千名という。またバレエダンサーも急激に増加し、予備軍を入れると一万余名ではきかない。然るにこれらの人々のニーズに応えられるドクターはまことに少い。

では外国では、というと世界的に名の知られたドクターも何人もおり、大きなバレエ団では専属、またはコン

サルタント的なバレエドクターが必ずといってよい程いる。バレエに関する医学論文も決して少くない。さて日本では、というと甚だ心細いのが現状である。

一九九三年秋にダンサーズ・ヘルスケア・ブックという本を出した。既に一万部になるうとして、「これこそ私達が待望していた本です。」と多くのダンサーに感謝されている。一九九四年には永寿病院でバレエ外来を始めた。年間外来患者は五〇〇名を越え、(内新患一八〇名)、年間手術件数も三〇名、日本各地だけでなく海外で勉強中のダンサーの来院も少くない。私が活動出来る間はまだよい。もう定年も過ぎ、あと何年働けるかと思うと、私が開拓したこの分野の後継者が欲しい。臨床だけならそれ程むつかしいことはない。殆どの特有な障害は論文にして纏めておいた。あとは整形外科的な知識で処することが可能と思う。しかし予防的な練習上の注意事項、障害をうけたあとのリハビリなどといった広範な指導となると、どうしてもバレエの知識とバレエに対する情熱がなければ、患者はついてこない。

さて、バレエという未だに女性的な芸術と考えている人が多い。女性が綺麗なチュチュを着て、あしを高くあげて踊る位しか頭に思い浮ばない人も多い。白鳥の湖だけがバレエではない。今のバレエは男性の役割が大き

くなり、内容も多岐にわたり、床運動と音楽の混じりあったものを考えていただければ大過ない。本来バレエは音楽と、踊りと、パントマイムだったのである。従って音楽に興味のない人は無縁であろう。踊り手としては全幕主役で踊り通すプリマバレリーナ、各場面で単独で踊れるソリスト、またそれらを支える群舞(コールドバレエという)がある。更に舞台装置、衣裳、照明など総合芸術である。

われわれに直接関係がある踊りについていえば、それを演ずるのは肉体である。ダンサーは肉体の鍛錬に平均一日六時間位をあてている。練習を一日休めば自分にわかり、二日休めば教師にわかり、三日休めば観客にわかり、とまでいわれ練習にあけくれる。これだけ努力すれば私ももっと立派な医者になれたのに、と反省させられるものである。決して生やさしいものではない。

バレエを好きになるためには、先ず良いバレエを観ることである。私の拙文を読んで、もしバレエをみてみようと思われる方があったら、紹介の労をとるのに吝かでない。女性の入局者も増えたようだし、男性の医局員の中でも興味をもたれる方があれば大歓迎である。私は日本にバレエ医学の種をまいたが、花を咲かせ、実を結ばせて下さる後輩の出現を切望している。

## 投稿に悩みあり

鷲谷澄夫 (30)

「ふるさと」から寄稿を求められ、何を書いたものか  
と悪い感った。

入局の動機、在局中のこと、勤務医時代のことそして、  
開業の現在について順を追って書けば何とかかなりそうだ  
と思うものの、常識的で面白くない。書いている当人が  
面白くないものを、読む人が退屈するのは当たり前であ  
る。

一体に「ふるさと」というこの種の同窓誌は、退屈な  
存在であることをまぬがれない。

何故か？

皆が同じ様なことを書くからである。

恩師。オーベン。同僚。出来事。苦労話。失敗談。

皆思い当たるので、幾分の興味はあるが、意外性がな  
いので退屈な読み物であることが多い。

一片の清涼剤というわけにはいかない。

結果、自ら苦吟呻吟して仲々ペンが進まなくなるので  
ある。

それが、このことについて一筆頼みます、と言われる

と、これは楽である。

先頃、池田亀夫先生の思い出を、と言われたときは、  
結構秀逸な文章が集まったように思う。

この度は、特にそんな設定でない様子なので、原稿の  
集りも遅々たるものではないかと、危惧している。

\* \* \*

フレッシュマンストーリー

室岡賢は、まだ迷っていた。

整形外科学を生涯の道として選んだことに誤りがな  
かったか？

何しろ二百人近い卒業生の中から、四名の同調者より  
いない整形外科は、果して将来に涉って存在意義をもつ  
のであろうか。

医局は古参医が跋扈して面白いところではない。病室  
では、意地の悪い看護主任にいびり回される。

いきどころがなくて、ただうろうろと、一月が過ぎた。  
賢には持病がある。腸が弱いのである。

教授回診の日は決って疝痛発作に襲われ、トイレに駆  
け込む。教授回診は週に二度あるので、その意味で忙し  
いことおびたしい。

回診の群れの末尾で、浮かない顔をしているのを教授  
に見えされ、二言、三言質問されるや、答が出る前に便

が出る。

「この股関節ギブスは良肢位に巻けておらん」

昨日足持ちをした本人として、室岡賢が何かを言わなければならぬ。

「……外転が強いでしょうか」

「オーベンは居らんか。君では話にならん」

教授は、賢を虫けらのように黙殺した。

途端なじみの疝痛が下腹部を襲う。

賢はナース・ステーションを駆け抜けながら、ポケットにちり紙のないのに気づいた。

ナース・ステーションに留守番のナースが一人居た。

ナースにしては化粧の濃い美人である。化粧が濃いので美人なのか、美人だから化粧に励むのか。勿論そんなことはどうでもいい、「ちり紙ありませんか、漏らしそうです」悲鳴を上げながら、答も待たずナース・ステーションの隣のトイレに突進した。

何かナースが叫んだようであったけど、聞き取る余裕はなかった。

便器にまたがると、水様便が発射音を上げて噴射。

案の定、トイレには紙がない（今と時代が違う）。

噴射が小休止したとき、ドアの下でちり紙が動いているのに気が付いた。

「ありがとう！」

賢は紙を手にする。紙に字が書いてある。

『好きよ』と。

トイレが終わって、ナース・ステーションの前を通るとき、賢は当のナースに視線を向けた。

ナースは素知らぬ顔であった。

賢は悩んだ。いつかちり紙の文字を確かめなくてはならない。そのことが、整形外科学よりも重要なテーマである、賢は認識した。

室岡賢は入局を迷うことなど、再びとなかった。ちり紙の文字が賢の心を捕まえていたからである。

青春がいいなァ！

\* \* \*

書き手は一寸楽しかったけど、読む人は矢張り退屈だろう。



金 成 俊 男 (28)

昭和四十一年五月開業した時は、丁度北多摩郡国立町から国立市になった時であった。字も谷保(やぼ)から富士見台に変わり、秋、冬は二階の屋上から南西の方角に富士がはっきり見えた。周辺は殆ど麦畑で春はひばりが賑かだった。現在は畑地が殆どなく、マンションだらけになった。

当時は新設の団地のベビーブームで、又転入者が多いので子供の患者が多かった。斜頸、股脱後療法、股関節拘縮までマッサージを行ったので一日四十人も施療した。現在は子供の患者がめっきり減った。先日数年振りで腫瘤のある斜頸を見たが、股脱、内反足はここ十年位診ていない。開業以来約三十年であるが肘内障が一人も来なかつた月が、昨年是一回、今年は既に二回ある。その代り御多分に洩れず老人医療が大多数になった。

来年で開業三十年になり、年令も古稀になる。内面的にはどこが変わったのか分らないが、世間的には充分老人である。四年前、脊柱管狭窄症の手術を受けたが、右下肢麻痺が残り、歩行障害があり他出は殆ど出来ない。

頑張つて恢復して見せるという意欲も湧かないので恐らくこのままであろう。戦前、戦中、戦後のスポーツ障

の成れの果てであろう。仕事もそろそろ終りにしたいが、まだ決心がつかない。

医局主催の会合も全部欠席であるが、若い人達の活躍を念願している。



高木俊男 (特)

平成五年五月、右肺癌で下葉切除術を施行してより、二年経過しました。今の処は再発もなく、何んとか無事に過して居ります。

診療は木曜日、日曜日、祝、祭日を休診日とし、土曜日は半日診療としています。

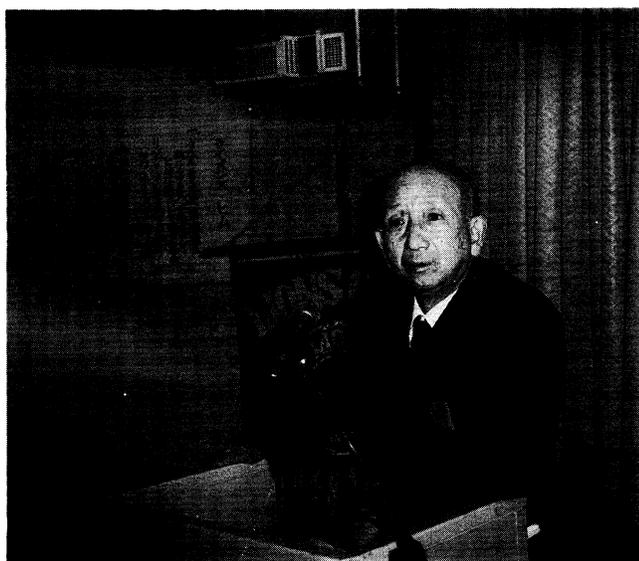
土曜日の午後は比較的、研修会等に出る様にとめていますが、木曜日はゴルフに出かける事が多々あります。それが私の唯一の健康法と申しましょうか!! 又楽しみになって居ります。

日曜日は成るべく、休息日とする様にしてはいますが、弟が近くにいますので、時々私達夫婦、弟の夫婦と一緒に家庭マージャンを楽しむ事があります。

息子の孫が三人、娘の孫が二人、皆んな男子です。一人位女の子が欲しいと思いますが、何か若い頃、悪い事でもした報いでしょうか!! あきらめました。孫とのコソタクトはファミコンです。案外やってみると面白いものですし、結構、頭も使いますし、ボケ防止になるかもしれない。

来年は古稀になります。知人、友達がだんだんと亡くなられ、淋しくなりました。

息子も証券会社に勤務して、後を継ぐものもいません。古くなった病院を外面だけでもリハウスしましたが、いつまで働けるか、諸先輩をみていると、未だ未だと云う気もします。皆さん頑張りましょう!



## 戦後五十年を迎えて

奥村守彦 (特)

今年は戦後五十年という一つの節目を迎えた。私は戦後まもなく医局に入局。当時の練馬の自宅から信濃町に通った。その頃の通勤電車の混雑はひどかった。食糧難の時代で、持参の弁当箱が信濃町に着く頃は凹んで、いびつになっていった。まさに酷電であった。いびつになった弁当箱から今ではとても食べられないような、まずい御飯をほじくるようにして食べた。その頃の教授を囲む毎日の昼食会が忘れられない。入局数年後、教授室に呼ばれた。「そろそろ、日本鋼管の病院か、専売病院に行つてほしい。君は小さくて体力も弱そうだから、通勤のひどさ考えると自宅から近い方の専売病院がいいでしょう」と云われた。「専売で結構ですが、病院の給料はどの位でしょうか」とおたずねした。教授は「給料はいくらくれるか知らない」と云われた。その頃私は結婚していて、二人で生活するのに少くとも一万円以上ないと生活に困るので、重ねて給料のことをおたずねした。教授は稍々ふきげんそうなお顔で「いくらか知らんが五千円は貰えるだろう」「先生、五千円では食べていけません。困

ります」「君は一体何を考えているのか。僕が君の一生の学問の面倒をみてやると云っているんだ。その上に五千円も貰えるんだ。何の不足があるのか。君のような弟子は始めてだ」と顔を赤くしてひどく叱られた。この教授こそ故岩原寅猪先生であった。先生は助教教授時代、朝早くから夜半まで終戦頃のことだから軍服の下袴（ズボン）をはいて一生懸命勉強していられた。それこそ食うや食わずでも、じつとがまんして勉強していられたにちがいない。ふと、そんな教授の姿を思い出して、それ以上、さからうことは出来なかつた。専売病院に実際行ってみると二万五千円という給料であった。私自身は、やれやれと一息ついたという次第であった。戦後五十年を迎えての医局にまつわる私の、おそまつな思い出である。故岩原教授と同期生の父を持たれた山内健嗣先生が一年前亡くなられた。芒洋としたお顔つきの中に、しっかりした学問への情熱を感じられる先生であった。私も役員をつとめた東京臨床整形外科医会の創立時に、ずい分努力されたと聞いた。港区の慶応整形外科医会にも、お住いが文京区にもかかわらず、よく出席され臨床に役立つお話をされた真摯なお姿が忘れられない。鹿児島での日本臨床整形外科学会で御一緒し屋久島で奥様と共に散策したのが最後の思い出となってしまった。私が山内健

嗣学兄が亡くなられたのを知ったのは数ヶ月後のことであつた。どこからも知らせはなかつた。率直に云つて、日整会の評議員の選挙のある時などは、何回も、しきりに電話や手紙の連絡があるのにこんな時には何の連絡もない、と同窓会を恨んでみたり、小さな同窓仲間の連絡網の不備を感じたりした。がこれも所詮、毎年同窓会にすつかり、ごぶさたしている私への罰のせいかと自省しきりであつた。

戦後五十年、今年は阪神大震災という思わぬ大災害に見舞われたが、平和のおかげで、今年の夏も七十七回目を迎えた全国高等学校野球大会が始まつた。私は少なくともここ二十年間、毎年夏の甲子園に観戦に出かけている。物好きと笑われたり、いかげんに年を考えて、あんな暑いところに行くのはやめさいと家族から云われたりしているが、甲子園連続観戦出場記録を私は続けたいと思つている。私にこのようなことをさせているのは、私の「ふるさと」北海道に、そのものがある。私は旭川中学にいた。野球部にスタルヒンがいた。このスタルヒンを擁して北海道代表となつて甲子園に行きたいと願つていた。

今年こそは、この悲願達成なるかと思つていた時、スタルヒンに職業野球（今のプロ野球）から声がかかり、

スカウトされて甲子園行は絶望となつたのである。このような夢が尾を引いて、未だに甲子園に夏になると足を運ばせているのである。いわゆる「むちうち症」になつて、井口先生にお世話になつた時も、アキレス腱断裂で、堀内先生にお世話になつた、その年の夏も、なりふりかまわず甲子園に出かけてしまつた。こんなことでも「異色医人」と任じている私である。こんな私とは違つて、港区には東京臨床整形外科医会や港区医師会の外科・整形医会で活躍していられる高橋昭先生や日整会でも仕事をしていたられる那須耀夫先生その他、港区慶応整形医会に多くの優秀な同窓生が活躍、夫々に立派な実績を重ねている。日整会と云えば平成八年四月に開催される第六十九回日整会学術集会の会長を矢部裕教授が、おつとめになる。御同慶にたえない。私も貧者の一燈として寄附させて戴いた。先年、日本臨床整形外科医会が二十周年を迎え、記念事業を東京臨床整形外科医会が当事者となつて引きうけて、記念誌その他いろいろのことを準備、おかげで無事成功裡に終つたのであるが、当時のTOCAの会長がまもなく急逝された。会長としていろいろ心労が重なつてこのことかとも思われ私共お手伝ひした役員は大変心を痛めたことがある。どうぞ矢部教授をはじめ、その準備にあたられている先生、職員のみな様お体

には充分気をつけられ、矢部会長の日整会学術集会が大成功裡に無事終了されることを心から願うものである。

### 思い出すままに

王 鐘 毓 (33)



戦争終結後の「玉音放送」を聴いた時私は学部二年生でした。その瞬間涙が流れ出した。あの時のいろいろな思い出が次々と網膜に浮かんでくる。

昭和十六年二月二十五日八十余名の留日学生と一緒に神戸港に上陸し、伊勢神宮の参拝等をすませ、東京小石川留日学生寮にたどりついたのは二月二十八日の夕刻だった。玄関で待ちかまえている東京商大の張先輩が慌てて私に「王君！大変だ。明日は君の入学試験だ！」。驚いた私は飯田橋の文具屋から三角定規、鉛筆、消しゴムを買いそろえ早寝した。翌朝飯田橋発札の辻行の都電にのって三田の山をのぼった。試験科目は英語、数学、理科で、口頭試問はない。三月七日合格通知を受け取ったが、慶應の先輩の話によると私は合格者の一番ビリだったという。

予科留学生係の古田さんから紹介された下宿麻見さん宅へ引っ越したのは三月十五日だった。大岡山の古道具屋から机椅子火鉢を買って、これで学生生活の必需品は全部揃った。

三田の大講堂で入学式にいった後、学生帽を買いカーキ色の学生服を染め換えたことを今でも鮮明に憶えている。

入学後第二十六回C組に編入し白石幸治郎君ははじめ大勢の皆様にお世話になった。平和な学生生活も束の間、昭和十六年十二月八日小泉塾長から真珠湾の報を知らされて以降、学園の雰囲気は一変した。軍事訓練の時間が増え、赤屋根食堂の献立も乏しくなり、トースト一枚買うのに一時間も並ばなければならぬ。日吉本町あたりの食堂では、そばうどんの代用としてソーメンを売っていた。

戦局はますます厳しくなると、学校当局は予科の卒業をくりあげることにした。三年一学期の試験成績によって十月はじめ四谷に行かなければならない。ところが私の成績はかんばしくなく、物理の金澤教授の好意でどうやら教授会の審議をパスして四谷に行くことになった。

四谷にきて名高い教授に接してからは戦争の憂いあまり感じなくなった。加藤元一教授の名講義は印象が深く、長身の茂木蔵之助教授は淡々と外科総論を講義してくれた。当時は医学出版物が少なく、岡島敬治の解剖学、加藤元一の生理学および茂木蔵之助の外科学は有名で、質屋まで高く評価してくれた。

戦争は日増しに激しくなり、C組から藤田憲三君等数人が召集された。ある日登山部主催の壮行会通知を受取り、場所は銀座三丁目、送別される方は海軍に入隊する石川七郎先輩だった。寂しい送別会でした。結局われわれの登山部は一度も山に登らなかつた。

昭和十九年八月いわゆる学徒疎開が始まり、第二十七回以下の学生は山形に疎開することになった。これであつたことになった。疎開学生の引率者は谷口虎年教授だったが、私は教授の再試験をうけなければならぬ。ある日、教授に呼ばれて「明後日は上野駅で君の発生字の再試験を施行する。宿題三題を教えるが、その中から出題する」。私は約束した時間より早く上野駅の改札口で待機した。学生達と一緒にいらつしゃつた先生の開口一番は「時間がない！歩きながら始めよう！」。上野のホームで一問一答で細胞分裂から試験をうけている最中、学生の小隊長がむこうから走ってきた。兵隊式の敬礼をしながら「全員揃いました。まもなく発車です。以上！」と報告した。谷口教授はうなずきながら私に向かって「これで試験は終わり。のちほど教務課に連絡する」。先生のやさしい面影はいつまでも私の記憶にのこっている。

昭和二十年三月九日の深夜より十日未明にかけての空襲、

いわゆる東京大空襲の時、私は杉並区高円寺の下宿にいた。翌日自転車で六本木の大使館経由で四谷にやって来たが、正面に入ると外来の建物は跡形もなく、一面に灰となって煙っている。その一角に安藤画一教授が呆然と立っている。自分の研究資料も灰になったと――。この空襲で林謙教授の持ち物も被害をうけた。その中に私達の成績表もあり、おかげで大脳生理学の試験は全員合格した。再試験するはずだった私は助かった。

八月十五日以降、私は学校をとびだして文化事業に走り出した。中国語の雑誌を出版する夢をいだいて。だが廃墟の東京でこれを実現する為には、自分で中国語を印刷できる工場を設立しなければならない。素人には設備から職人さがしまで大変だった。

なんとか工場を設立し、いよいよ編集に入った。誌名を総合雑誌華光と決め、B五判三十二頁の小冊子とした。小さいけれどもこれは当時としては普通のポリウムだった。問題は内容である。創刊号には蒋介石の中国之命運と毛沢東の新民主主義論が並んでいる。当時としては貴重な文献でしょう。

発行者として私の主張は、読者に正確な情報を提供することにあった。正しいものは一つしかない。読者が評価すればよい。その時中国国内では、国・共内紛の真っ

最中だったのである。

連合国占領下の出版物は連合国司令部の検閲を必要とする。司令部から戻されたゲラ刷りはどこどころ真っ黒に削除されていた。アメリカ人もよく中国語を読めるなど苦笑したものだ。削除された文章は組み直さなければならぬ。当然印刷も遅れる。創刊号を出せたのは終戦八ヶ月余後の昭和二十一年五月一日だった。戦後の貧困社会情勢からみればよくやったなと自慢している。二十歳台の若さだからできたのだと思う。

中国語以外に和文出版物も出版した。本邦初の和訳毛沢東著新民主主義論の発行をしたのは私だった。これは当たった。当時の出版物は、日販を通じて全国に配本していたのだが、華光誌の返本は多いのに、新民主主義はよく注文がきた。

その時、内山書店の内山嘉吉氏を介して中国文学研究会のメンバーに依頼され、生活社が廃刊した中国文学の出版も引き受けた。私は中国人の義務として、昭和二十二年九月一日第九十九号から復刊した。中国文学研究会とは、東大文学部出身者の現代中国文学を研究するグループで朝日新聞の岡崎氏や金瓶梅の翻訳者小野氏らが中心となっている。食住に奔走する戦後の社会では中国文学を勉強するものは少なかったとみえ、一年後廃刊と

なった。誠に残念！

経営合理化にせまられて外注もずいぶん引き受けた。その中に東芝電気のパンフレット、NHKの放送年鑑、国鉄の機関車図鑑等々がある。日刊として競馬新聞も印刷したこともあったが、これはめまぐるしかった。中国通信社の週間ニュースを印刷した為に、警視庁に印刷機を封印されたこともある。

昭和二十二年四月のある日、二十六回の渡辺裕君ら学生三人が私を訪ねてきた。昭和二十二年は義塾創立九十年にあたるので、これを記念して三田山上に天皇をお迎えするが、その写真を入れる医学部新聞をつくりたい。だが、金も紙もない。何とかしてくれという依頼だった。私はよしと即答した。代金は新聞を売り上げた分だけもってきてくれればよいと。渡辺君は非常に喜んで満足そうに帰った。その新聞は、確かタブロイド版号外みたいなもので、どこかにその保存版が残っているはずです。

終戦直後の出版界は寂しく、私の出版社も割合めづらしがられた。そのエピソードもいくつかある。昭和二十一年冬、東京都庁主催の懇話会で、私の向かいにいた司会者安部能成先生が出席者の名札を見ながら「本日は光華社をはじめ、朝日新聞社、読売新聞社——御臨席下さ

いまして——云々」と述べ上げた。この会は、東京都の復興再建について各社の意見を聞きたいという主旨の会合だった。私は何をしゃべったかの記憶は全くないが、尾頭つきの鯛一匹ついた弁当をもらったことだけはよく覚えていいる。

昭和二十二年夏、東京駅南口にある鉄鋼会館で中央公論社の出版記念会があった。私は同席の秩父宮殿下に名刺を差し出したところ、殿下は私は名刺をもっていないと——。私は赤面した。あれ以来、名刺はやたらに出すものではないと決めた。

埋め立て直前の夢の島の地鎮祭の時、記念撮影を東海汽船の海老名氏に依頼され、わが社の松平カメラマンがとった。これも夢のような思い出です。

だが、出版事業はうまくいかず、印刷業務も低迷し、毎日が火の車だった。経験も財力もない私に文化事業が続けられるほど世間は甘くない。結局、出版物を廃刊。印刷設備を処分して医学の道に戻ることにきめた。

昭和二十二年夏、医学部に復学させて欲しいと申し込んだところ、教授会の許しが必要だと教務の丸田さんにいわれた。私の休学事情は審議案として教授会に提出され、運よく復学の許可を得た。私は慶應義塾大学ならではの温情に感激した。そして四年間の延滞授業料二二〇

田を追納して第三十二回に滑りおちた。私は九七年おくられたことになる。ずいぶん皆様のお世話になった。

昭和二十五年六月朝鮮戦争が勃発し、同十年中国人民義勇軍が出動したその年に私は整形外科を選んだ。というのは、戦争終結後、中国では大勢の傷痍軍人が私を待っているに違いないと。偶然にも私達のグルッペの指導教授に当たったのは岩原寅猪教授だった。先生の門下生になったのも何かの御縁でしょう。

岩原先生は、出来のよくない弟子を手塩にかけるのが趣味らしい。国家試験の合格発表前に入局を許可し、君は医局長に会いたまえ」といわれた。ところが会った医局長殿は七年前の同級生今中欣一君（故人）ではないか。今中医局長は昔の友情を念ずる為か、昼休みを利用して長い間私に特別講義をしてくれ、これがその後の臨床生活に非常に役立った。振り返って見ればあれから五十年。歲月の流れはおそろしい。

近況

平成二年八月十三日～十五日 狭心症の為慶應義塾大学に入院

平成二年九月三日～五日 心臓カテーテルの為再入院

平成四年一月 長女京子整形外科認定医授与

平成四年七月十一日 長女京子結婚（婿は北里大学医

学部講師）

平成五年五月二十二日～六月八日 結腸癌の為前田外科病院に入院

科病院に入院

平成五年八月十二日 初孫靖久誕生

平成六年一月 次女東整形外科認定医

平成六年九月十二日 次孫誕生 王泰士と命名

平成七年七月九日 次女東結婚（婿は整形外科医）



## 課外授業

樋口智久(特)

一九六九年十月メキシコシティに於いて第十一回SICOTが開催された。偶々幼若犬の脊椎固定の実験をしていて池田教授の発表論文の一部になったことで出席することになり、学会終了後アメリカを廻って帰ることになった。義父の知人でメイヨークリニックの耳鼻科教授を通して整形外科のリンシャイ准教授を紹介していただし、シカゴ經由でロチェスターへ降り立った。巨大な病院都市で三千床の病院を中心に町が成り立っていて、道路を隔てた前に大きなセラトンホテルがあり、入院出来ない患者が宿泊しながら通院しているとのことであった。外来は診察室が廊下の両側に並んでいてドアの上には豆球がつき、その色を見て診察の用意の出来ている自分の患者を医師が診て廻る。病棟は円型で中央にナースステーションがありそれを囲むように病室がある為三百六十度一望出来る。手術は中心部から少し離れた同規模のメソジスト病院を見学した。早朝から一日中手術をしていて、昼食は予防着のまま立ち食いには驚かされた。研究は十五〜六匹の犬が手術台に並んでいて手術を次々と

やっていくと後から縫合、覚醒はラボラントがすませるので期間は約三ヶ月で終るとのことであった。子曰く“ことうゆうアメリカの物量と日本を比べてはいかん”

次の訪問地ミネアポリスへ千野先生の車で向う。黄金色に焼けた麦畑の地平線の彼方のブラックホールに吸い込まれるように一直線に延びたフリーウェイをただひたすら走りに走った。途中フリーウェイを降り一軒屋のドラッグストアでパンと牛乳とハムを買い求め、麦畑の畦道に腰をおろし平林先生と四人で食べた。岩原先生は生き生きとして潑刺とした顔であった。私を見て“くたびれたか”初めての海外旅行では無理もないな”再びフリーウェイを走っていると前方の地平線上に玩具のプロックのようにミネアポリスの町が見えてきた。喜びも束の間それから数時間走ったように思う。当地では朝五時起床、早朝カンファレンスに出た。上級レジデントに散々シュートされ立ち往生する演者、英語の分らない小生にもその厳しさが膚を刺した。カッキー教授の部屋に案内され秘書が三十人いるのには驚かされた。流石にニューヨークのラスク教授とリハビリ界の双璧をなす教室は違うなと思った。夜、千野先生の招待で市内のダウンタウンの一流レストランに行った。高さが五cmもあるピレステーキで口に入れると溶けるような美味しいものだった。

聞くと二十五\$らしい。因に我々の宿ホリデーインは一泊十五\$であった。

ミネアポリスは隣接してセントポールがありツインシティと呼ばれる。十月中旬であったが外は寒く紅葉が綺麗だった。紅葉は日本の方が良いな。黄色ばかりで赤色が少ないし大ざっぱだな。深い崖下にはミズーリの支流がゆるやかに流れ、大木の森の下は御伽の国を想わせる住宅地であった。悠久の時の流れの中エイトが音もなく水面に四対のカルマン渦を残しながら上流へと進むのが見えた。アメリカインディアン最後の砦として多くの血を流したこの地の歴史を打ち消すかのよう。

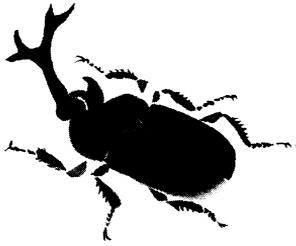
ミネアポリスを離れる日、ロス行の出発時間迄千野先生宅で過した。岩原先生は近くの散髪屋から帰るなり「アメリカの床屋はカットだけで髭もあたってくれないう」大ざっぱだ。

ハワイでのパンパシフィック学会はコーヒーを飲みながらであった。あれは手の外科のボイスだ。夜のパーティ迄時間が有り先生とぶらぶらしていると、旗を持った人を先頭に金魚の糞みたいに連なった年寄の一段と擦違った。ノークョウだな。こんなと一緒にされては困るな。大きな声だったので末尾の人に聞こえないかとびくびくしながら師の三尺後を背を低くして追った。パー

ティで一人ぼんやりしていると老夫婦に声をかけられ岩原教授はどこだと聞かれた。急いで場内を捜し来てもらった。後で「あれがスコリオーゼのリッサーだ」。前の女房も不細工だったが今度のはもっとひどい。そういえば先生の奥様はきれいな方だ。当時正月には医局員が大勢烏山の自宅に押しかけるのが恒例であった。土佐名物鰹のタタキで痛飲した。先生は「高千（奥様のお名前）」と大声でお呼びになって得意満面であられた。天衣無縫、豪放磊落、沢山の人に愛され、親しまれ、尊敬された。



ある夏の日、入院中の先生を訪れた時病室は唯お一人だった。不自由なお軀をベッドに起し、無中でお身体を揉ませていただいた。言葉にならないお声だった。大粒の涙を留めどもなく流された。万感胸に迫る思いであった。想い出は尽きることなく脉々と脳裡に浮かぶ。お蔭様で一人前にしていただきました。



## Bungy Jump

Crazy Doctor (44)

Bungyは弾性ゴムの意。足首にゴムロープをつけ、高所より飛び降り恐怖を楽しむ冒険遊び。ニュージーランド人A. J. Hackettの考案。パリのエッフェル塔から飛んだのが最初。現在、常設のBungy Jump spotはニュージーランド、オーストラリア、フランスに計五カ所。

三十五年程前の「シネラマ」の一シーン。南太平洋のどこかの島での原住民の成人式。勇気の証明に、足首につたをくりつけ高い櫓から真逆様にダイビング、地上スレスレでガクンと停る場面は当時彼等と同年代の自分にショックでした。自分に出来るだろうか？そして今、Bungy Jump。TVで見て以来、いつかやってみたい、何故か、やらねばならないと感じてました。本当に馬鹿々々しいことです。

その機会が意外に早く訪れました。円高で国内旅行も、外国旅行もさして変らない。特にオーストラリアは安く時差も無い。職場で、希望者を募って行く事になりました。自分は当初行くつもりはありませんでしたが、旅

行ガイドに、二文字Bungy Jumpを目にして参加を決めました。日本のガイドブックにはBungy Jumpについての詳しい案内は見当りません。現地のホテルに行く、英文のガイドがあり、電話一本で専用のバスがJump spotに送迎してくれます。日本の観光業者が意識的に避けるオプション・ツアーのようです。自分一人だけBungyツアーに参加する訳にも行かずあきらめかけていました。旅行の最終日はゴルフでしたが、その帰り道からJump spotが近いことを知り、無理を言って車を廻してもらいました。同乗の四人の間は、何故か浮かぬ表情です。無視を決めこみました。

一九九三年七月某日。pm11:00。薄曇、無風、気温二十八℃前後の好コンディション。車を乗り捨てJump spotに向かう。薄暗いジャングルの山道を登ってゆくと、突然、頭上から、女性のけたたましい絶叫が響きわたる。歩を早めて小走りに坂道を駆け上ると、突然視界が開け、黒ずんだ水面をたたえた小池に出る。池の端の橋から上空を見上げる十数人の見物客。そこには巨大な木製の門型の塔が山を背にしてそびえ立ち、その中央から垂れ下った長大なロープの下端には、金髪をふり乱した若い女性が逆さ吊りになって、未だ興奮覚めやらず何やらわめき叫んでいる。先客がいたのかと、ほんの少し

拍子抜けしつつ、四人の間を池の小橋の上において、さらに登る。

Bungy Jumpオフィス。飛びたい旨申し出ると、何のチェックもなく気軽に“OK(オーカイ)”。老眼の自分には全く読めない誓約書にサイン。飛び降り料約六千円、プラスVideo代約三千円。体重測定し手の甲にマジックで書きこみ、ポケットの中身をあずけて、手続き終了。おそろしく長い長いラセン状の階段を登りつめ、ツインタワーの間にかけられた十五m程のブリッジにたどり着く。自分の前に、ドイツ人青年と二人の香港女性。ドイツの若者は見事なフォームでダイヴ。彼女達は、飛ぶというより膝がくずれて踏み切り台から悲鳴をあげながらの転落でしたが、その勇氣は見上げたもの。ついに自分の番。アシスト役の陽気なオーストラリアの若者が、*“Hay, It's Your turn.”* といいながら、両下腿下中1/3をごく普通の折りたたんだピンクのバスタオルを巻きつけ、ロープで横と縦にしっかりと縛る。そのロープに長い長いゴムのロープの端についた、がっしりした登山用カラビナをはめ、さらにその上からベルトで締めつけるという単純な仕掛け。手の甲に書きこまれた体重に合わせゴムロープを調節。こうした作業をしながら、若者はジャンパーの不安をまぎらそうと陽気に話しかけて

きます。「どこから来た？仕事は？医者か、どうせ外科だるう？」とメスで腹を切る真似してニッと笑う。「だいたいこんな所から飛びうなんてのはクレージーだ。高い所から飛んだことは？」「三十年以上前だが十五mの断崖から海に飛び込んだことはあるよ」「What? You are crazy, really crazy doctor!」準備完了。

熱帯雨林の生い繁る山腹にそびえ立つ四十四mのツインタワーのブリッジの中央から空中に突き出た約五十cm四方の踏み切り台上に立つ。うっそうとした木々の梢ははるか下。樹海は山の裾野まで広がりそのはるかかなたに南太平洋の海が光る。踏み切り台の真下、樹陰では暗い二十五m四方程の小池はまるで深い井戸の底。池の対岸の橋からこちらを見上げる見物客達は豆粒のようで、そこにいるはずの仲間の姿は識別出来ない。恐いと思つたらキリがない。初体験の微妙の空中遊泳を思い切り楽しんでもうと自分にいい聞かせてやって来たものの、小さな踏み切り台に乗ったとたん、身体中にアドレナリンが全開で噴き出し、全身総毛立ち、喉はカラッカラ。アシスタントの二人のオーストラリア人若者が叫ぶ。「Hay, crazy doctor! It's your turn! Let's go! four two! one! zero! Bungy!」

踏み切り台を思いっ切り蹴り、大きく手を広げて高く

遠くにJump。フワッと一瞬間中に停止。この瞬間がたまらないエクスタシー。両足に一本のゴムロープがついてはいるが、感覚としては全く生身ひとつの空中遊泳。重装備のスカイダイビング、ハンングライダーとの決定的な違いはここ。この気持ちを表現することは至難です。

月並に鳥になった気分としかいいようがありません。次の瞬間から、徐々に身体は回転し頭が下を向くと、グングンと加速して熱帯雨林の樹海にポッカリ口を開けた穴の真只中に飛び込み、見物人が、水面が猛烈な勢いで接近。着水と思つた瞬間、何のショックもなく急減速し、アツという間にゴムの弾力で再び空中にフワッと放り上げられる。この急上昇の間に、これまでの過緊張状態から身も心もいっぺんに解き放たれ、空中に躍りながら思わず奇声をあげガッツポーズ。バウンドを二〜三回くり返して水面上三m位に逆さ吊りで静止。岸からゴムボートに乗って来た若者の差し出す長い棒につかまりボートに降り、無事生還。

岸に上がると見物していた外人客は「Great!」「Beautiful!」とくったくなく笑顔で声をかけてくれる。Tシャツ姿の金髪娘がニコニコして渡してくれたのがCertificate of Valoa (勇気の証明)。さらに彼女は、街で絶対に買えない飛んだ者のみに与えられる、

背に Bungee Jump の絵入り T シャツを、身体に合わせて選んでくれる。T シャツを渡してくれながら私の帽子をヒョイと持ち上げ禿頭を手荒になでたり、たいたいたりして「You made Spaceit! ヤッタネ」。単純素朴なヒロイズムに、今回は素直に酔い知れ、文字通り舞い上ってしまいました。

「勇気の証明」には「Y. T. of Japan has lost all touch of reality and sense of responsibility towards life by throwing themselves 4m head first from a tower ..... attached nothing more than a large rubber band。」



これは飛ぶ前にサインした誓約書も兼ねていて、下段に小さな文字で、自分の責任の下で行うこと、何が起っても告訴しないことが記されています。現地の日本人ガイドの話では、着水時（希望により頭がつかる程度にゴムロープを調節してくれる）に目を傷つけて視力低下をきたし、告訴されてから、少しうるさくなったとの事でした。

Bungee Jump は技術も体力も不要です。やる気さえあれば年令を問わず誰にでも出来ますが、決しておすめは致しません。本当に馬鹿々々しいことですから。

## 近況報告

松木 忠 (特)

静岡に開業して約二十年になります。この間なんとかやってこられたのも医局での御指導、同窓の先生方の御指導、御支援によるものと感謝しております。

町の整形外科医院の一日は索引療法とか温熱療法などに朝早くから通ってくる数名の高齢者の治療からはじまります。そして夕暮れ時、勤め帰りの初診、再診の人達のおわただしい診療のひとときが過ぎて終了となります。一日が終りほっとして夕食につくと電話が鳴ります。「今、バイクで転んだんですが……」今日、子供が学校の部活で足をくじいて腫れて痛がっているので診て下さい。」これらの診療が終って本当の意味の「本日終了」となります。

同じ場所で長いこと診療していますと、以前しばしば肘をはずして(肘内障)きた子がいつのまにか大学生となつてあらわれたり、かつてバスケットやバレーでよく突き指して受診していた女子中学生達が今度は母親となつて子供を連れてきたりしてまさに「時の流れ」或は「年輪」を感じることがあります。以前には診る患者さ

んはほとんど自分より年上の人でしたが、今では年下の人の割合が多くなってきてくやしい限りです。

学会への出席も最近は県整形外科医会とか認定医のため東海地区教育研修会などに出席して認定医、スポーツ医、リウマチ医の単位をもらっては「今日は長時間みっちり勉強させてもらった」と充実感(?)を味わっている状況です。全国規模の学会には足が遠のいていました。来年の矢部教授会長の日本整形外科学会に出席させていただきます。ただだくのを楽しみにしております。よく「医学の進歩はラセンの道を行く」と言われますが、整形外科においては直線的に進歩をとげている感もあり、なんとか知識だけでもついていきたいと思っています。



診療時間  
AM 9:00-12:30  
PM 2:00-6:00  
但し土曜日は午前中  
休診日 日 祭日  
木整形外科医院  
TEL.52-0437

二人の子供は長男（鳥取大医学部）、二男（高知医大）とも家を遠くはなれて学生生活を送っているので、現在は妻と二人だけの生活です。とりたてて趣味とてありませんが、子供の頃からずっと興味をもってきた短歌、俳句のゆかりの地、歌枕、俳枕を訪ねての小旅行に時折出かけたりしております。しかし西行、芭蕉の境地にはなかなか到達できないのが現状です。



岡田 菊三 (46)

慶大整形外科同窓の皆様方がお過しでしょうか。私は昨年六月世田谷中央病院を退職し世田谷は三軒茶屋の地で新規開業し、約一年を経過いたしました。地域の多数の患者が来院してくださり、私を含めて約十五人九職員が毎日頑張っております。父の遺した親切、丁寧、細心、緻密をモットーとして、every day a little changeを念頭において診療を行っております。骨折整形、一般整形、骨塩整形とWC整形等の各方面に新機軸をうち出しすべて工夫と努力をかさねております。

三人の子供達については長男は慶應経済学部、次男は塾高より現役で順天堂大学医学部に入學、長女は慶應女子高二年で学生生活を楽しんでおります。

国立東京第二病院整形外科と世田谷中央病院在職中は先輩後輩の諸先生方に大変お世話になりました。感謝致しております。同院在職中に皮膚自動縫合器プロキシメイトの本部への導入、頸椎の野末―岡田の圧痛点、頸椎椎間関節造影法と同関節のブロック、坐骨神経周囲造影法、上腕骨頭広範切除後の人工骨頭置換術の際の腱板と二頭筋腱長頭を直接縫合する手術方法（岡田法）、肩関節部知覚神経電気凝固術と股関節部知覚神経電気凝固術

を皆様の御協力と御指導をいただき導入開発し、発表させていただき感謝致しております。又後二者の論文は雑誌整形外科の臨時増刊二十七号に掲載させていただきます、

同誌の編集委員をなさっている杏林大学整形外科石井良章教授に深く感謝申し上げます。

矢部教授が明年運営なさる日整会総会が盛大に挙行され、みのり豊かな成果をあげられることをおいのり申し上げます。

後輩各位、新入医局員にあられては益々創意工夫をもつてOpelless, Rehalless, Painless and Costlessの新しい整形外科領域における治療法を開発されることをお願い申し上げます。



青山 哲 (51)

私は漢方医です。八十七年から青山大按と号し、新宿で漢方専門の診療所を開いています。煎じ薬を中心に、鍼と灸も組み合わせて、様々な病気に対処します。漢方の治療対象は、病氣（病人）全体です。漢方医は一人でも全疾患に対処することができる、つまり漢方はそれが可能な構造をしているのです。当然、多くの専門領域に分化した現代医学に比し、かなりきめの粗いものですが、なかなか有用です。

七十六年ことも福祉医療センター出張中、難波先生が医局に内緒で？隠し持っていた鍼を面白半分を試したところ、驚くべき著効例となりました。以後外来で実施すると様々な著効例に遭遇し、すっかり鍼の虜になりました。北里研究所附属東洋医学研究所（東医研）で伝統的な鍼灸をやっているとの話聞き、七十七年から週一回北里での研修を始めました。

一番驚いたのは、遠い過去に滅亡したと思っていた漢方医（漢方薬を操る医者）なるものが現存していたことです。当時私は鍼に興味を持ちながらも、漢方に興味は全くありませんでした。が、東医研の医師に勧められるまま、所長である老漢方医に半日NEIBENとしてつく

ことになりました。その老漢方医は、今まで私の見た大学や病院の医師とは異なるまるで別世界の人、イメージとしては仙人(小柄で痩せて、風が吹くと空を飛びそう)といったところ です。

七十九年ついに、お世話になった慶應整形外科学教室を辞し、東医研の漢方部門に入所し、漢方医として第一歩を踏み出しました。東医研は七十三年設立の若い小さな組織です。その中心である漢方部門は、所長を頂点として、私と同年代の駆け出しが十名程で底辺を造り、この間に中間管理職風が三名という構成です。他に、所長の古くからの同志の生き残りであるもう一人の老漢方医と、この二人の古い弟子達数名とが客員として漢方外来を支援していました。以上が当時の関東に於ける漢方医の過半でもあり、漢方界では抜きん出た規模の組織とされていました。

慶應関連病院で一、二を争う低給病院とされていた北研附属病院に、東医研は準じていましたが、東医研にはこの低給与を補ってなお余りある、多くの長所がありました。

何といっても一番は、通常の病院勤務では考えられない程DUTYが少ないことです。このため、タッパーある時間を自己啓発・リストラに向けることができます。

三ヶ月もすると通常の整形外科医としてはおろか、どんな病院勤務医としてでも勤まらない体になってしまい、六ヶ月も経つと現代医学からも通常の医師からも、遠く離れた者になっていました。

連綿として続いてきた漢方の研修教育体制は、明治になって消滅しました。しかし幸いなことに、漢方の世界・知識は約二千年に及ぶ膨大な書籍として蓄積され、内容がほぼ現存しています。つまり理屈上は、漢方の世界の再構築が可能です。とはいえその中身たるや、難解な漢字の古文で、たとえ現代日本文に訳せても、意味は理解できないものが殆どです。それどころか、それが良書でそれが悪書なのかすら判断するのは困難な有り様です。

このような三重苦・四重苦にもめげず、我ら若手は毎日のように勉強会を開き、何冊かの本に挑みます。しかし所詮解らない者が何人集まろうと解るはずもなく、定刻になると飲み会となって元気になる、という日が続きます。この中の一冊に、中国初の教科書「中医学(日本でいう漢方)基礎」の翻訳本がありました。これまた難解な訳文である上に、毛沢東の革命思想が重要であるとする文章が多く、漢方の教科書として信頼しきるにはチョット不安で、精読できませんでした。ちなみに、指導者がいない体験は、意欲ともどかしさと危険と自由と



がないませになった、妙な気分でした。何とも原始的な勉強方法で、著しく効率の悪いものではありません。

というところで当然、全員漢方力の向上はまるでみられず、単に漢方的雰囲気の中に漂っているだけの危険な状況に陥っていました。一年も経つと、空虚と不安と焦りが生じます。

そんな時、中医学の専門教育を受けた人が中国初の国費留学生として東医研にやってきました。まさに天佑です。彼との困難な会話の中から「中医学基礎」重要性を知り、読むに際してのヒントを得、精読と彼への質問を繰り返すうちに、漢方を理解する方法がわかり、やがて彼が帰国しても自力で理解を深めていくことができるようになりました。

整形的素養は、漢方に習熟する上でとても有効でした。守備範囲が内臓以外のほぼ全身に及ぶ★老若男女広く接する★身体各部に直接手で触れて所見をとる場面が多い、これらは整形の特徴です。これらの診察体験が豊富なことは、入力データの精度という観点から、漢方の診察上重要な価値を持っていました。更に、漢方の中心である五臓六腑という純概念の世界に入るには、内臓に関する無知・こだわりの無さも幸した、と思っています。

これは、ロッシニーですよ

片田重彦 (51)

「片田さん、この絵からどんな音楽が聴こえてきますか？」

一枚の絵の前で宮嶋画伯が私にこう尋ねてきました。

「うーん、ちょっと待ってください。ええと、これはヴェルディのトロバトーレでしょうか。」

と私が答えます。それを聞いて宮嶋画伯はにっこりうなずきました。

宮嶋画伯の個展でのひとこまです。

\* \* \*

宮嶋喜久夫画伯は本拠地パリで二十数年も活躍している著名な画家です。三年に一度、来日して銀座で個展を開きます。

もう二十年もの間、家族ぐるみのつきあいが続いています。来日時に私の家に立ち寄ると、オペラ談義が始まります。つい徹夜になってしまいます。

私はいつも彼の絵から音楽を感じます。それは彼が絵を描くときに、オペラのモチーフを考えながら製作するからだそうです。

絵と音楽というのは水と油のようなものです。絵画は時間と空間を凍結しますが、音楽は空間を流れ時間とともに消えていきます。

ルードウィッヒ二世はノイシュヴァンシュタイン城にワグナーのオペラを題材とする絵をたくさん据えつけました。これは瞬時に消えていくワグナーの音楽を自分の空間に固定しようという途方もない試みだったように思います。

ルードウィッヒ二世ほどではないにしろ、私は自分の「城」を作るときには宮嶋画伯の絵を中心に据え付けて、彼の絵から音楽を聴き取りたいという夢を描いておりました。

私の診療所建設にあたってのひとつの主題は宮嶋画伯の絵をどのように診療に取り入れるか、であったのです。さいわいすばらしい設計家とめぐりあったため、それが可能となりました。設計にあたっては宮嶋画伯の絵を生かして、診療機能を考えるよう要請すると、壁面をドーム面にする事で理想的な設計ができました。

完成した設計図をパリの宮嶋画伯に送ったのは開院予定日の八ヶ月前でした。

「宮嶋画伯の絵を中心とした『城』を作りたいので、ご尽力をお願いしたい。」という内容の手紙を添えたの

です。

すぐに了解との返事ももらいました。しかし、相手は友人とはいっても有名な画家です。予定どおり製作してくれるかどうかわかりません。その後の進行状況についても音沙汰がありません。

開院日である平成五年八月十七日には間に合わないな、となかばあきらめていたところ、八月十日になって突然、画商のTさんという人から電話がありました。

「パリの宮嶋画伯から絵が空輸されてきたので今から額縁の製作に入ります。なんとか開院日には間に合います。」

ということです。

それを聞いて、開院のための雑事に疲れはてていた私は高揚感ですっかり元気を回復しました。

ついに開院の前日になって宮嶋画伯の絵が大型コンテナに積まれてやってきました。

それは想像していたよりもはるかに大きな絵で、一二〇号（二〇〇×一二〇cm）のサイズをもち、総重量五〇kgもあります。その巨大な絵は鎮座すべきドーム状の壁面にぴたりとおさまりました。

その絵にはまるで絵巻物のような雄大な空間が描かれております。左方にはパリの街がセーヌ河を中心として

淡い明るい色彩で広々と描かれています。

一方右側には屋外カフェテラスで談笑する人々が描かれています。セーヌ河を見下ろしながら食事やコーヒーを楽しんでいます。その中にテーブルを囲んで楽しげに話している一組の家族がおります。

それをよく見た瞬間、私は驚きのためそこに立ちすくんでしまいました。それは、なんと、パリにいたころの私達一家、即ち、若き日の私と妻、そして幼い二人の娘たち、ではありませんか！

宮嶋画伯は私達一家のとても幸福な時間に魔法をかけて、永遠にこの美しい空間に凍結させてみせたのです。

\* \* \*



開院日の前夜、宮嶋画伯から贈られたこの絵を妻と二人でじっくり鑑賞しました。見れば見るほど美しく感動的な絵でした。一時間ほどじっとこおりついたように見入ってから、私はポツリと言いました。

「この絵からはモーツアルトのコシファントゥッテの香りがする。」

妻は、じっと考えていましたが、

「いいえ、これはロッシニーですよ。」

と言って、微笑むのでした。

## 開業一年を経て

植野 満 (59)

昭和五十五年に入局して、十四年目の平成六年六月に東京の江東区亀戸で開業いたしました。

今にして思えば、十八歳の時に慶應医学部に入学したのが自分の人生に大きな岐路でしたが、この次は、四十歳をもう一つの伏し目として、新しいスタートをする時期と考えていましたので、医局に残るか、開業するかのも悩みは人並にありましたが、タイムリミットが来てしまったと思います、すんなりと開業を決断しましたので、自分の人生設計としては、その計画にちょうど間に合ったと言えます。

診療所は、亀戸天神の二ブロック東側にあり下町の住宅地と言える所です。表通りより少し奥に入ると、小さな路地を挟んで、昔からの住宅が建ち並んでいて、比較的人口密度の高い地区と言えます。

このような所に三階建ての小さな診療所を建てましたが、開設には特に専門のコンサルタントには頼らず、家内と二人で準備をしていきました。今は四歳になった長男を連れて備品の買付けをしたり、診察室のレイアウト

を決めたりと開業前の半年ほどは忙しい日々でしたが、自分達の手造りと言った感があり、これも良い思い出となり、できあがった診療所には満足しています。

土地が狭いので、一階に診察室を置き、理学療法は二階で行っています。階段を上がるのもリハビリの一つと患者さんには納得してもらっています。

診療所のスタッフは、私を含めて七人ですが、おりからの不況による就職難で人材の確保にはそれほど苦労はしませんでした。しかし、スタッフの募集をすれば応募は多いのですが、良いと思って働いてもらったら数日でやめた人がいたのには驚かされました。人事や保険請求などの雑用は増えましたが、これも初めから覚悟していたことなので、何とか対応しています。

診療所の場所がJR亀戸駅から八〇〇m程度の距離があり、少し駅から遠いのが交通のアクセスの面からの心配事でしたが、地域医療に対しては住宅地の中の開業ということ、かえって良かったと思っています。

無床の診療所ですので入院や手術の必要な患者さんは、近くの個人病院や都立墨東病院に紹介していますがやはり安心してお願いできるのは同窓の先生方で、東京歯科大学市川総合病院の高橋教授や同期の小柳先生に、また比較的浅草に近いので、永寿病院の崎原院長先生、森先

生に無理を聞いていただいており、大変心強く思っています。今後も同窓の先生方にはお世話になることと申しますので、よろしくお願いいたします。



## 開業して思うこと

米山芳夫 (59)

開業して約六年、医局にいるときには経験することのなかつた様々なことを学び、学ばされ、あるときは楽しみ、そしてあるときは痛めつけられました。私をはじめに懸念したのは、こんなに開業医の多い地域ではとてもやっつけられないのではないかということでした。ところが現実には生活に困っているという先生の話を近所で聞いたことがないので、開業医の密度と収益とはあまり相関関係がないのだということを初めて知りました。しかしそれが何故なのかというと正直言って今でもよく分かりません。

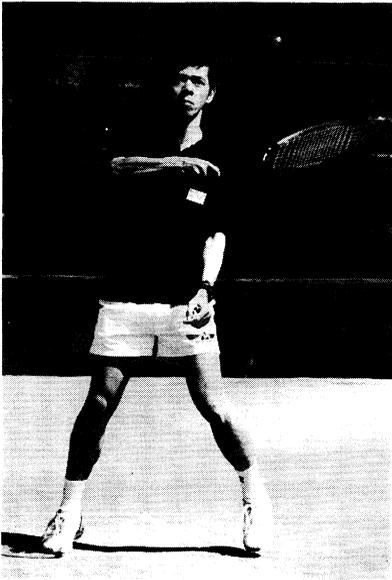
私が最後に勤務した病院は防衛医科大学です。教授選の熾烈な戦いのなかで、思い出すと頭にくることが山のようにありますが、結局は新名先生が教授選を勝ってくれたので、それはそれで結果がよかったのだからと自分自身としては納得しています。ただ、ときには厳しいことを言われたけれども、医局に在籍中もともと公私ともにお世話になった新名先生が他界されてしまったことは、いまだに信じたくない悪夢のようなできごとです。防衛

医科大学は個人的にはたいへん好きな病院だったので、勤務していたことを必ずしも不運だとは思っていません。開業すると手術がなくなってしまうので面白くないだろうとまわりからはよく言われましたが、案外それは当たっていないかもしれません。私の場合は手術ができなくなるということにはあまり抵抗は感じませんでしたし、他の開業医の先生方もそういった実感はない人が多いようです。「オペはもうたくさんだよ」と言われていた先生がいましたが、似たような思いをいだいてる方も少ないのかもしれない。

ただ、毎日が外来、外来と同じことの繰り返しでつまらないと不満を言う先生はけっこう多いと思います。私も特に始めの三年間はそうでしたし、今も多少はマンネリを感じています。この我慢ができるかどうか、開業医をできるかどうかののだと書いてあった本がありましたが、その著者はそれができないので開業医にはならなかったそうです。しかし、年齢とともに知力、視力そしてとりわけ体力が衰えてくるにつれ、複雑で込み入ったことが煩わしくなり、なるべく単純で労力の少ない仕事を好むようになるのも事実のようです。開業医が単純で労力の少ない仕事であるとは思いますが、仕事のペーシングを自分自身で変えることはできませんので、その点では

各人各様に忙しくしたいひととは忙しくし、暇にしたいひととは暇にすることはできません。です。

開業して自分のまわりがすっかり変わってしまいました。やはり何と言っても自営業ですからそれにつきまとう勤務医時代には考えられなかった無数の経営などの苦労があります。でも勤務医のときには経験し得なかった数多くの世界を知るようになったのは大きな収穫であると思っています。だからといってどちらがよいという比較はできませんが、それぞれにそれぞれの人生ですし、私は毎日を少しでも充実して楽しく過ごしていきたいと感じている今日この頃です。



## 脊椎脊髓班の現況

藤 村 祥 一 (74)

脊椎脊髓班の過去二年間の動向について報告させていただきます。平成五年十月、鈴木信正先生が帰室し、私と鈴木、戸山、朝妻、小柳先生の五名を中心に活動を続けておりましたが、平成六年四月に小柳先生が東京歯科大学市川病院講師に、また平成七年六月からは朝妻先生が防衛医科大学校講師に就任され、現在は小野、鎌田先生が加わっております。

二十年以上にわたるオール慶應の脊椎症例検討会は毎月一回定期的に行われ、間もなく二〇〇回を迎えます。出席者の顔触れはこの一、二年、研究中の若手を中心になってきたため、症例検討ばかりでなく、手術手技の実際を習得してもらうため、実技の講習をとり入れております。治療技術を磨くことが今後、益々厳しくなるであろう医療現場において脊椎外科医として不可欠であると考えらるべきであります。症例検討会発足時からの大谷、平林、土方、有馬先生らは要職に就かれたため大所高所よりのご助言をいただいておりますが、また第二世代の先生方は各々の大学、施設において指導者として多忙の

ため症例検討会に出席していただけないのが残念です。しかし、慶大脊椎脊髓セミナーにはご協力をいただき、二年毎に開催しております。平成六年十一月に鈴木先生が企画された第七回セミナーには、全国から二〇〇名以上の参加者があり、大きな励みになっております。若い先生方には実績を重ね、できるだけセミナーの演者をめざして欲しいものです。

現在、臨床例の中心は変性疾患、脊柱靱帯骨化症、脊髓腫瘍、脊柱側弯症などであり、また他院からの再手術例も増加の一途にあります。この現状から疾患ごとの病態に即した治療体系の確立が急務といえます。脊椎外科において、高齢者の手術適応の拡大や *instrumentation Surgery* の洪水のみられる今日、この問題を避けて通ることはできません。これには技術の習得に裏付けられた長期成績の評価が不可欠です。本来ならば *Prognostic* な評価が重要といえますが、たとえ *retrospective* な評価でも有用な治療法は推し進めるべきと考えます。しかし、日進月歩の現在、より良い新しい治療手段の開発にも努力したいと考えております。幸い、臨床面の成果は年間二十前後の学会、研究会において発表し、欧文論文の投稿も少しずつ増えております。

基礎的研究面については、その成果はまだまだ評価に

耐えず、学位論文の完成も年間二〜三編で、しかも矢部教授就任以前の研究テーマもあります。しかし、脊髓、側弯、脊椎バイオメカなどの研究テーマで少しづつ成果もみられますので、今後を期待しております。

最後に私見ではありますが、脊椎外科を志す者が最近減少しているように思えてなりません。原因はいろいろあると思いますが、脊髓領域はともかく、脊椎領域への脳神経外科医の著しい進出を考えると、整形外科医には是非とも脊椎外科を志してもらいたいと考える次第です。



## 膝関節研究班活動報告

富士川 恭 輔 (43)

慶大整形外科膝関節研究班は伊勢亀富士朗先生が退職された後、教室内では私が最年長となりその責任者となりました。

現在膝関節班に所属するアクティヴ・メンバーおよび膝関節班の指導で研究を行っている教室員は、竹田毅(47)、松林経世(53)、菅沼淳(55)、阿部均(56)、松本秀男(57)、堀江康夫(59)、大谷俊郎(59)、川久保誠(59)、小林龍生(60)、野村栄貴(61)、野本聡(61)、大熊一成(63)、桃原茂樹(63)、増本項(64)、須田康文(65)、宮坂敏幸(65)、栗村誠(65)、今本雅彦(66)、徳永祐二(66)、相羽整(67)、中村光一(67)、豊田敬(67)、月村泰規(67)、笹崎義弘(68)、井上元保(67)、大平孝之(67)、関口治(69)、中山新太郎(69)の先生方で、約三十名であります。このほか関連病院の部長として第一線で活躍中の水島斌雄先生、磯田功司先生、竹田誠先生などが元老としてメンバーがそれぞれの病院にローテーションすると厳しく指導してられます。

現在の研究体制は、基礎的研究は大きく分けて生体工

学的手法を用いるグループと生物学的手法を用いるグループに分かれ、主として半月板、靭帯を対称に研究に励んでいます。臨床的研究は膝靭帯損傷による関節不安定性の病態解明と治療、人工靭帯 (Leeds-Keio) の臨床応用の拡大、靭帯損傷と変形性膝関節症の相関などをテーマに深夜まで教室でディスカッションを戦わせています。これらの成果は年間約三十一四十篇の学会発表、約二十五篇の学術論文発表として現れています。特に基礎的研究 (学位論文) は、研究割当時間の不足などいろいろな制約もあり予定より遅れ気味であり責任を感じています。野村君の medial patello-femoral ligament 及び内側副靭帯の機能解剖学的研究はその結果が直ちに臨床に応用され、須田君の膝関節外側支持機構の機能解剖学的研究はこの面の世界的権威である Hughston Clinic の G. Terry 君と肩を並べ、栗村、今本君の靭帯機能不全膝の動的解析は今まで不安定性を静的に検討してきた研究と一線を画するものであり学会でも評価されています。

大熊、相羽君の局所環境の変化により靭帯の物理特性や組織学的構造がどの様に変わり、その環境を戻すと靭帯はどの様な適応を示すかに関する研究、宮坂君の前、後十字靭帯の tension pattern の変化を同時に計測する

実験、中村君の靭帯損傷膝における半月板の受ける負荷の計測実験、笹崎君の膝関節運動における膝蓋骨の動態を膝蓋骨にかかる tension の変化で解析する実験、井上君の人工膝関節の脛骨板が負荷を脛骨へ伝達する様式を分析する実験、また関口君の人工靭帯を中心に誘導された新生組織を EM により観察する研究は麻布獣医大学との共同研究に発展し、これらの研究成果はいずれも十分に国際学会に通用するものなので早急に結果がでることが期待されています。徳永君の半月板移植に関する実験、豊田君の滑膜細胞、前十字靭帯由来の細胞の各種負荷様態に対してどの様な態度を示すかに関する研究 (東京女子医大齊藤聖二先生指導) はすでにほぼ完了し、本年五月に香港で開かれた国際膝関節学会で発表しプログラム委員長の Jacob 教授の賞賛を受けました。中山君は松本君が開発した tension measuring system を用いてこれら一連の靭帯の機能解剖学的研究に着手したところでです。

国際的には、松本君を中心に毎年英国整形外科基礎学会で発表を重ね Dr. B. O. の名を有名にしました。しかし何度注意しても彼らが慶應をキーオーと呼ぶことは気に入りません。川久保君は現在リーズ大学大学院に留学中ですが、シードホム博士のご指導により本年末に受験し工

学修士の学位を授与される予定です。

本年の香港で開催された国際膝関節学会（正会員は厳選され世界で二九八人しかいない）に日本から十二題の演題が採用されましたが、その内三題は慶應からでありました。さらに来年アムステルダムで開催されるSICOの膝前十字靭帯損傷のシンポジウムに世界から三名のシンポジストが選ばれましたが、その内の一人はわがグループから選ばれ、来年アムステルダムで世界的権威Noyes、Rosenbergと議論を戦わせることとなります。私は、すべての関節の研究はまず自分の目で関節をしっかりと観察することから始まりまた自分の目でしっかりと観察することで終わる、すなわち解剖と機能解剖が基本であると考えています。幸い矢部教授と小川講師のご努力により新鮮屍体膝標本を十分に使用することが出来ます。我々全員両先生に足ならぬ膝を向けては寝られません。

## 手の外科班

堀 内 行 雄  
(52)

手の外科班の最近二年間の活動報告をさせていただきます。

木曜日午後の手の外科外来が八月は一ヶ月間夏休みで休みになりますので、その間は、カンファレンスも休みにしていますがその期間以外の木曜日午後七時から十時過ぎまで症例検討と抄読会を中心に手の外科カンファレンスを行っています。それらが終わってから研究中の一つのテーマにつき一人ずつ進み具合と問題点をチェックしています。もし、お困りになっている手の外科の症例がございましたら、優先して検討致しますので、お気軽に参加して下さい。

また、年一回九月上旬に慶大手の外科研究会を開催していますが、昨年は第十回になりましたので講師として矢部教授に記念講演をお願いし、多数の参加者を得て盛大にとり行いました。本年第十一回より、日整会の研修単位を一単位とれるように致しました。本年十月に岡義範先生（50）に「肘離断性骨軟骨炎の診断と治療」の題名で講演をしていただきました。これからも、是非御出

席下さいますようお願い致します。

次に臨床と研究に関する手の外科班の現況について簡単に述べさせていただきます。

臨床面では、市川、山中両君(61)がそれぞれ埼玉中央、済生会神奈川へ出張し、交代で高山真一郎君(57)と仲尾保志君(63)が慶應にもどって来ました。いつもながら、同窓の先生方より貴重な症例を御紹介いただき感謝致しております。最近は、プロ野球の選手の手術も多くなり、テレビの記者会見に出たりして冷や汗をかいています。

最近の臨床のトピックスとしてあげられるのは、末梢神経に生じる“くびれ”だと思います。今まで前・後骨間神経マヒの手術の際に砂時計様のくびれがみられたことがいくつか報告されていますが、神経炎との関係で特に最近注目をあつめています。このくびれは肘の近傍に生じ、本来の圧迫が生じる場所ではないところに生じるので不可解です。これが神経炎といっていたものの治癒期間に関連があるものと考えていますが、これからの問題です。

研究面では、徐々に研究成果が実を結んできています。この二年間に学位を取得したのは、神経の研究では、持田郷君(60)、仲尾保志君(63)、西浦康正君(64)、渡

辺理君(66)、腱の研究では池上博泰君(64)、奇形の研究で松村崇史君(63)、肘で飛驒進君(59)、骨関節で亀山真君(63)の計八人にのぼります。また、吉川泰弘君(65)、寺田信樹君(65)投稿済)、新井健君(64)は、すでにほぼ論文が完成しています。その他にももう少しで論文が完成するものが数人おり、たのしみになっています。研究中の十数人の他にこの二年間に、直長(69)、牧田(70)、石井(70)、杉本(70)、照屋(70)、川島(71)、吉田宏樹(71)が加わりました。

以上が、この二年間の手の外科班の現況ですが、小生の力不足を、臨床研究両面にわたって矢部教授ならびに内西客員教授が御指導して下さいと、優秀な後輩が多いことで十分に補ってくれていると信じています。これからも諸先輩方のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

## 足の外科班

井口 傑 (49)

足の外科班は慶應整形外科の中で最も若い弱小班である。慶應の足の専門家には小川正三先生、加藤哲也先生をはじめ多くの諸先輩がいるが、班としての活動を開始したのは私が一九八七年に帰室した後である。矢部教授にサブスペシャリティーとして足の外科を始めるように指示され、翌年二月十五日に初めての研究会を開いたの  
で、今年で七年目、小学一年生の腕白盛りである。創立時のメンバーは宇佐見則夫(58)、星野達(61)、平石英一(62)、橋本健史(63)に私の総勢五名で、既に先輩の薫陶、自助努力により足の外科の分野で活躍中であつた。その後、宮永將毅(65)、桜田卓也(特65)、片岡公一(特67)、富上雅好(特68)、若松次郎(特69)、早稲田明生(特70)、水谷憲生(特71)が加わり、班員も二桁となった。

一九九三年十一月には宇佐見則夫先生が班員としては初めて至誠会第二病院の医長に就任し、スポーツクリニックの兼任講師も務めている。一九九四年一月には星野達先生が帰室しサブスタッフとして班の番頭さんとし

て活躍している。その間、レジデントとして片岡公一先生、富上雅好先生、若松次郎先生が慶應にローテートしている。一九九四年の九月には橋本健史先生が日瑞基金の派遣留学生試験に合格し、一年間の予定でスエーデンのストックホルムにあるカロリンスカ研究所付属フツティンゲン病院整形外科のルンドベルグ教授の基に、足の外科とバイオメカニクスの研究のため留学した。この「ふるさと」が発行される頃には成果をあげて帰国しているはずである。一九九五年七月には富上雅好先生が班員の第一号として立川市で開業するために退室した。

学会発表は宇佐見先生を中心に、足の外科をはじめ日整会、靴医学会、骨折、関節鏡、臨床スポーツ、リュウマチ関節、整形バイオ、東日本、中部日本、関東整災と上から下まで担当を決め、幅広く発表してもらっている。慶應の足の外科を知ってもらうには、学会で発表するのが一番と努力している。また、宇佐見、平石先生を中心に一九九三年の国際足の外科学会を皮切りに、国際関節鏡学会、SICOT、日英足の外科学会、米国足の外科学会、米英欧足の外科学会など海外での英語での発表にも努力している。特に、国際足の外科、第一回、第二回日英足の外科では宇佐見、星野、平石、橋本、宮永先生に私と団体で参加し、それぞれ発表の機会が与えられ

た。班員の活躍のおかげで、私も足の外科の幹事、靴医学の評議員に選ばれ、国際足の外科学会（CIP）のアジア支部の会計を担当し、英国の足の外科学会の機関誌「The Foot」の編集委員も依頼されている。

来年四月には矢部教授の学会長の基で第69回日本整形外科学会学術集会が開かれるが、当番校の恩恵を最大限に受けて、シンポジウム「外反母趾」、パネル「足関節外側靭帯損傷の手術療法」、特別企画の対立する治療法「アキレス腱断裂」、研修講演、外人招待講演と弱小班でありながら全ての企画に参加できる榮譽を頂けたことは班員全員の励みになり、感謝の念に堪えない。特に、外人招待講演には来年の米国足の外科学会の会長でアトランタ・オリンピックで活躍するであろうカール・ルイスの主治医でもあるバクスター先生を迎えられることは、第一回の日米足の外科学会を前に慶應足の外科班ばかりでなく日本の足の外科学会にとって有意義なことと喜んでいる。

一九九三年から始めた足の外科研修会も第三回を迎え、第一回の加藤哲先生、第二回の小川正三先生に続き、今年には学外から獨協大学の関講師を招いて特別講演を行った。フレッシュマンや若手のレジデントの足の外科の研修と興味に役立てばと行ってきた。来年からも、こ

れまでの反省を基に、少し型式を変えながら続けて行きたい。

やっと足の外科班も小学一年生になり、質より量、習うより慣れる、で走り抜けてきたこの二年間を反省し、今後は質も量も努力せねばと考えている。同窓、教室の皆様にも、足の外科班の存在を知って頂き、なお一層のご指導、ご支援をお願いしたい。



## 肩関節班

小川 清久 (50)

私共の班は、研究班としては七名、臨床班としては五名からなる小さな班です。現在出張病院に四名、大学に三名が在籍しております。最近二・三年間の基礎的研究活動に限って言えば、小川が肩峰骨棘と腱板断裂との関係について第四報まで出し、そのまとめを本年の世界肩関節学会シンポジウムで報告しました。吉田篤君は腱の石灰化と抑制因子の生体内における働きに関する研究を終え、この同窓会誌が皆様の手元に届く頃、教授室に論文が届けられる予定です。さらに、腱板損傷と大結節高位の関係についても詳細に検討を行ない国内・外の学会で報告しました。早晚皆様のお目に入れられるようになると思います。又、投球動作の生体工学側面についての研究が井口理君によって進行中です。同君は、医局の御好意によって留学したデンマーク・オーフス大学では、肩関節内圧の問題に取り組み、これも近く投稿がなされます。他に研究テーマを4つ出してありますが、様々な理由で、中断または着手が遅れており、研究指導者としての私の力量不足を痛感させられているのが昨今の状況

です。

臨床的研究活動は、医局員・同窓会員の皆様の御協力により、症例数が多いため、基礎的研究よりは、活発に行なうことが出来ました。小川は一連の肩関節不安定症の画像及び手術術式、腱板断裂及び骨折を主に報告しました。吉田篤君は、前方関節包断裂が主原因となった反復性肩関節前方脱臼や、bursal typeの R. A. Charcot 関節など比較的稀な病態をコツコツと報告しております。高橋正明君は、手術時に見られた解剖学的破格や、石灰沈着による急性外転拘縮や、自験例からの報告をしております。井口理君は、肩甲上神経麻痺の節電所見・MRI 所見について、おそらく世界最初と思われる面白い結果を報告しました。宇井通雅君は、基礎研究が主体のため、胸郭形成術の鎖骨々折に対する影響についての報告だけにとどまっていますが、今後もっと多くの報告が出されることになりそうです。基礎的研究の妨げにならぬようにすれば、母校の名に恥じない高いレベルの臨床的研究をし得る人数が制限されてしまう、と言う小さな班の苦勞と悲哀は当分ついてまわりそうです。

## 股関節研究班の現況

坂 卷 豊 教 (50)

第一に日常診療について現況を紹介します。外来は水曜日(午前)に坂巻が、木曜日(午前)に石橋昌則(平成七年六月迄)、井上邦夫(平成七年七月以降)が担当しております。このほか木曜午後には小児・股関節外来として泉田(良一)、井上、私が行っております。疾患内容の変遷によりほとんどは成人のOAおよび大腿骨頭壊死症で、小児疾患は著しく少ないのが現況です。外来の特徴は同窓の先生や他科の先生から紹介していただく患者が多いことのほか、Second opinionを求めて来院されるケースも結構あることです。入院は常時十五名前後の患者があり、週三回の手術日では足りないこともしばしばあります。手術は人工股関節七に対し、骨切り術

(RAO、キアリ、大腿骨頭回転骨切り術など)三の割合です。先天股脱の手術は年に一、二例です。人工股関節の機種としては矢部教授ご指導のもとで私達グループで開発した京セラのKKS人工股関節システムがすでに六年を経過し、大学で行った数は三〇〇を越えております。信頼性の高い製品であると自負しております。入院

待機患者は常時四十名前後あり、入院まで二、三ヶ月かかってしまうのが実情でなんとかしなければならぬと思っております。手術中、術後の輸血については七十歳以上のケースを除いてほとんどを術前貯血式自己血輸血により行っております。内科池田康夫教授、輸血センター半田誠選任講師の指導のもとに入院してから手術までの七、十日間という短期間に貯血を行う方式をとっており、実用性の高いやり方として注目されています。

第二に研究面について紹介します。臨床研究は泉田重雄先生、石井良章先生以来蓄積された豊富な症例をもとに、日整会学術集会、日本股関節学会、日本人工関節学会、日本リウマチ関節外科学会を中心に多数の発表を行っております。基礎的研究では主に人工股関節に関するものを行っております。本間、下村、千葉は人工股関節ステムデザイン(長さ、断面形状、大腿骨髄腔との適合状況)を生力学的実験により決定する研究を、井上、山下はバイポーラ型人工骨頭を挿入した場合の臼蓋側の変化を、仁平、大山、日下部はセメントレス人工股関節表面加工処理の改良に関する研究を行っています。私はグループ内に三、四本の柱ができるよう基礎的研究の基盤が確立することを考えておりますが、そのためには整形外科医以外の領域と広く手を結び、数年間の研究にと

どまらない息の長い研究テーマを考え、指導していくことが重要であると考えております。



## 腫瘍班

矢部 啓 夫 (53)

慶應義塾大学整形外科教室に帰室し、腫瘍班を花岡先生から受け継ぎ約一年半となりました。長い間一般病院で臨床中心、しかも腫瘍以外に多く関わり、大学では今後どうすればよいか、不安がなかったといったら嘘になります。幸い優秀なスタッフに恵まれ、少々アンフェアな面もあるかなと思いつつも、間隙を探し、なんとか症例をこなす努力をしてきました。それでもさばききれず、関連病院にお願いしたり、少々(かなり)無理して外来手術を行ったり、薄水を踏む思いも時にあります。現在、自己貯血、自己血輸血の外来手術も真面目に考えております。

ここ数年でも、腫瘍に対する取り組み方に大きな変化がみられ、帰室当時より、まず臨床面での高いレベルの維持、過去の症例の見直し、学会活動をより積極的に、そして研究の成果を挙げることを考えております。

実際、私が帰室してから悪性腫瘍の新患症例数が五十例近くです。腫瘍に積極的に取り組んでいる他大学や病院でも注目されております。多くは慶應の関連病院、先

輩達の病院、診療所の紹介です。いかに関連病院が充実し、諸先輩が活躍されているか、頭が下がります。治療に困難な症例も多く、他班や他科に手伝っていただき、手術室では、一体いつ終わるのですかと、冷たい視線を受けながら、なじみのない、胸部、腹部臓器とも付き合いつながり、それなりの成果を挙げていると思っております。しかしながら病床数の関係もあり、なかなか終末医療まで充分なことができず、諸先生方に御迷惑をおかけしていることも事実であり、この文面をお借りしてお詫言を申し上げさせていただきます。

過去の症例の見直し、学会活動については、昨年の骨・軟部学術集会で七題（シンポー、パネル一、和文投稿一、英文投稿 in press 1）、東日本臨整会三題（和文投稿二）、中部整災三題（主題一）発表し、本年の骨・軟部学術集会では一二題（シンポー、ラウンドテーブル二）、アジア・パシフィック三題、東日本臨整会五題発表とまずまずと思います。これら発表した論文の投稿が今後なされると思います。特に英文論文数編の投稿義務を与えておりますが、なかに他人事のような顔をしている者もいて、多少心配です。

研究面では現在、腫瘍班のなかで研究活動を行っているのは、大学院生を除き七名であり、花岡先生以来の

テーマであり、形態学中心の破骨細胞、多核巨細胞に三名（現在英文 in press 1、来年発表予定一）、生化学的なアプローチとして腫瘍におけるプロテアーゼについて三名（現在就中一）、腫瘍におけるサイトカインについて一名が、それぞれ頑張っております。今後のテーマとしては、現在の七名の成果がもつとでるまでは、追加テーマはださずに、骨・軟部腫瘍における DNA 分析について外科と一緒に研究するつもりです。いつでも研究ができるように腫瘍組織を液体窒素内に保存しており、予備実験を始めております。

大学院生、他班、まだどの班にも所属していない若い先生方のなかに腫瘍に興味をもってくださっている先生方が多いことを知り、非常にうれしく思っております。今後はさらに充実した high level な臨床班となるように努力するつもりです。

最後に入院、手術など一般病院にはない色々な苦労があります。特に悪性腫瘍においては他大学、他病院でも入院待ちが大きな問題となっております。来年はスタッフもより充実すると思えます。スムーズに入院、手術が可能になるように表から、裏から、さらなる努力をするつもりですので今後よろしくお願い致します。

## その後のスポーツクリニク

竹田 毅 (47)

スポーツクリニク(以下スポクリ)が慶應義塾大学病院の新しい中央診療施設として、平成三年九月にまず外来部門が、次いで平成五年十月にフィットネス部門が開設されたことにつきましては前号までの本誌上で紹介させていただきました。

今回はその後の歩みについてご報告いたします。

### ○患者数・診療内容など

患者数は徐々にではありますが年々着実に増加してきております。その内訳は八十〜九十%が整形外科領域のスポーツ傷害で、残りが内科系の患者です。内科系はその診療内容が、虚血性心疾患、肥満、糖尿病、骨粗鬆症の運動療法などが主体のため一人一人に時間がかかるので、診療可能な患者数には限りがあります。しかし担当医がいずれも積極的な方達なので、歩みは遅くとも確実に発展していくものと思われま

す。整形外科領域の診療には富士川助教授、小川講師、堀内講師はじめ各診療班のチーフや、関連病院から若野絃一先生や宇佐見則夫先生、さらには内西兼一郎先生が参

画して下さっておりますので、これ以上は望めない診療が行われております。先生方は全くの無償でご協力下さっており、感謝の言葉もございません。

### ○専属スタッフ

発足当時定員として認められたスタッフは看護婦二名と検査技師一名のみでしたが、現在は外科系、内科系各一名の医師の有給枠が認められ、整形外科から増本項君が、また老年科から石田浩之君がスポクリ専任医師として移籍いたしました。この他PTが二分の一名配属されました(午前中スポクリ、午後リハビリ科に勤務)。このように徐々にではありますが専属スタッフも増えつつあります。

### ○閑話休題

最近「スポーツは身体に悪い」ということが話題になっております。たしかにお相撲さんの身体を見ていると「身体によいわけがない」と思いますし、「激しいスポーツをやり過ぎると、活性酸素という怖い物質が発生して、これが大病のもとになる」、「事実プロ野球選手経験者の平均寿命は一般より低い」という話を聞きますと、「なるほどそういうこともあるのか」と感じます。

これほど難しい話ではなくても、スポーツ外来で競技スポーツの選手達を診ていますと、「この世にスポーツと

いうものがなければスポーツ外傷もスポーツ障害も絶対にありえないのに……なぜ苦しんでまでスポーツをやるのか？」と思うことがしばしばあります。しかしすぐに思い直します。「この世からスポーツがなくなったら、世の中は死ぬほど味気なくなる。したがって人類がある限り、また人に向上心と競争心がある限りこの世からスポーツがなくなることは金輪際ない。第一スポーツがなくなったら、スポーツクリニックがいらなくなる。」……「冗談はともかく、「健康の維持増進のためのスポーツ」は必要不可欠なものです。同窓の先生の中で小生より年長の方は、健康に絶対の自信のある方でも、是非一度スポクリにおいてになって、メディカルチェックと運動指導をお受けになることをお勧めします。熱烈歓迎いたします。」

#### ○目標

当面の目標は施設の整備とスタッフの増員ですが、私学である以上実績が重視されますので、臨床面で患者数の一層の増加を図ることはもとより、今後は研究面でも実績を上げるよう微力を尽くしたいと思います。



## 国立埼玉病院

石名田 洋 一 (40)

当院については『ふるさと』一九八七年号泉田教授退任、矢部教授就任記念号において、紹介させていただいたが、八年経った現在、その後の変化を織りませて再度ご報告もうしあげます。

当院は一九四一年七月二十日白子陸軍病院として創立され、一九四五年十二月一日厚生省に移管され国立埼玉病院となったので、ちょうど今年が五十年に当る。これは多くの国立病院・療養所において当て嵌まることであり、特に目新しいことではないといえる。しかし厚生省において一九八五年『国立病院・療養所の再編成・合理化の基本方針』が策定され、これに基づきこの十年間に二施設を移譲し、二十施設を統合し九施設とするなどの動きがみられた。今回新たに『国立病院・療養所の政策医療、再編成等に関する懇談会』が作られ、六月に国立病院・療養所の果たすべき役割及びその具体的方策の中間答申を纏めた。それには政策医療、経営改善、定員管理、再編成の推進等さらに厳しい方針が打ち出されている。ここでいう政策医療とは、癌、循環器病、神経・

精神疾患、母子医療、腎不全等の分野における高度先駆的医療をはじめ、多くの項目が挙げられている。

これらをうけて、当院にあっても事業計画の作成、診療報酬に関する細かな指導、勤務状態に関する調査等が一層増えている。さいわい当院は患者数が前年を上回り診療点数も順調に伸びており、厚生省（地方医務局）に呼び付けられることもない。しかしこのように国立でもそれぞれの病院が生き残りをかけて、自助努力を要求される時代になった。あたりまえだいまさら何を言いかとお叱りを受けそうであるが、国立のつらいところはここから始まります。例えば整形外科は患者数が院内一、二を争うほど多い科だが、配置されるのは看護婦三人のみで、内一人は六時間パート、つまり時間外に働いてもこの人には金が出ない（払う予算がない）から、午後三時にはどうしても帰さねばならない。さらにパートにも定員があるから、看護婦だけでなく、あらゆる職種で一人といえども人を雇うことができないのが現状である。これが定員管理である。いろいろと制限を設けておきながら、頑張れ、稼げでは疲れて、息切れをするのは当然である。最近はメリットシステムと称し、医療機械は成績の良い病院に、比較的優先して付けてくれるが、これとても事業計画に盛り込んで、計算上借金を返す当てがな

いと認められない。一千万円以上の機械等は財政投融資からの借金として、返済しなければならぬ。ちなみに当院は累積三十七億円の借金があることになっており、診療収入が四十八億余円（六年度）あることから、収支は悪いほうではないそうである。つまり忙しいところには人をつける、この機械でこれだけの診療収入が上がるということが、わかっている。つまり忙しいうちで、これが認められても、二年後位になるため、短期でロテイションする先生方には不満が残るやすすいシステムになっている。どうか国立に出張される先生方は、長期的に院内を見て戴くようお願い致したいものである。

一九八六年十月発足した臨床研究部は、五研究室七研究班で形成される。整形外科は新治療開発研究室に廻り、泉田良一先生を中心に、3-D CT画像を用いた手術シミュレーションシステムを開発、改良し、これから光硬化樹脂モデルを作製するという段階に達し、文字通り立体的「手術ナビゲーション法」（泉田良一先生は控え目にこう呼んでいる）を完成させた。これは既にしばしば泉田先生単独で、或いは逸見治先生と協同で学会発表や論文が掲載されているので、御存知の先生も多いことと思われる。これら一連の仕事は泉田先生の学問的情熱が、勿論最大の原動力であるが、この程度の規模の病院

で、研究部をもてるのは国立なるが故の特権といえる。長期に国立を見て欲しいという意味のひとつの例でもある。消化器科、心臓外科、小児科等も積極的に研究部を活用し、有用な研究が行われている。

前書きが思いがけなく長くなり臨床の紙面がなくなってきたので、かいつまんで紹介したい。

現在のスタッフは、市川亨医長、相羽整医師、金治有彦医師の三人で、副院長の石名田洋一は外来のみである。非常勤として、股関節の泉田良一医師、脊椎の松本守雄医師を迎え、六年度の入院患者数は一日平均四十・四名、診療点数一人一日平均二、二九三・三点、外来患者一日平均九十八・九名、診療点数一人一日平均六〇一・八点をあげている。

以上甚だ簡単であるが国立病院の現状と、埼玉病院を紹介した。最後にここまでご支援ご協力を戴いた当院に關係された先生方に感謝し、併せて常にバックアップして下さる教室關係者に心から御礼申しあげ、引き続きご指導ご鞭撻をお願いする次第である。

## 清水市立病院

高橋 惇 (特)

平成七年の夏は昨年の異常気象による猛暑を凌ぐ酷暑となり、真夏日記録を更新して終わろうとしている。当病院は新病院開院以来七年目を歩んでいるところである。患者中心の医療の確立、基幹病院としての機能の充実、経営基盤の確立を基本方針とした新病院初代院長の小山先生は、昨年三月を以て勇退され名誉院長になられた。現在は清水市立看護専門学校長に就任されている。

清水市医師会の会員と清水市立病院の密接な連携システムを通じ、医療の機能分担、医療資源の効率的利用や地域医師などの生涯教育を行うことを目的とする病診連携事業も今年度より静岡県推進事業として発足し、そのマニュアルも出来たところであり、今後の実績が期待される。

ご多分に漏れず当院も、赤字を抱える自治体病院であるため、少しでも赤字解消に役立てようと、院内経営改善委員会なるものを作り、各部門、各科の実情の把握、将来展望、改善点の指摘等を行うことになっている。患者中心の医療を謳う当院にとって裏腹な気持ちも禁じ得

ないが、赤字縮小ないし解消も大いなる課題であることには間違いない。

当科では一日平均二四〇人の外来患者があり、五箇所で診療している。診察室が足りないのでギブス室まで使用している。今年度から予約診療に踏み切ったが現在なお試行の段階であり、患者の待ち時間は減少したと思われるが、我々の診療時間に変わりはない。いきおい残ったカルテの数を減らすことに勢力を費やし、貴重な症例を見逃すことを危惧している。また外来診療の時間が長引くにつれ、午後の手術開始も順送りに遅くなり、手術件数の伸びを鈍らせているようであり、物理的なスペースの増加、スタッフの増加が望まれる。

現在のスタッフは高橋、外川、松本(隆)、君島、田中(藤田学園)、谷島の六名で、週二回の小山名誉院長に外来をお願いしている。この度、五年あまり当科に貢献してくれた外川が開業のため当院を去ることになった。私としては、人望も厚く性格温厚で若いスタッフのよき指導者であった彼に今ここで去られるのは非常に残念であるが、彼自身の選択でもありスタッフ一同心から応援し、栄えある成功を祈りたいものである。

松本は肩関節疾患を初めとして多くの症例について三人の若手の相談役、インストラクターとして面倒見がよ

い。若手三人も朝から夜遅くまで外来、検査、ギプス、手術、救急にと休む間もなく勤めてくれる。

今年七月より仲間入りした谷島は巨体を揺すりながらの勤務で、手術衣、スリッパ、白衣は特注した。ゴルフ出身という事であるが、噂の三〇〇ヤードドライバーショットは多忙なためかまだ見せてくれない。



九月から外川に代わり新鋭野々宮が就任する。新たな指導者、纏め役としての活躍を期待する。

今年の希有なる一症例を報告する。

頃は二月のある未明、自転車で国道1号線を西下する一人の不審な男を、パトロールカーが発見し職務質問した。男は急に逃げ出し、追い詰められるとやにわに隠し持っていた登山ナイフを取り出し、たじろぐ警官の眼前で自分の項頸部を切り、自殺を図った。急救車で運ばれた男を当直であった君島は穏やかな表情で迎え、治療を始めた。創は右項部、頸部に筋を切り裂いていたが、頸動脈は損傷を免れたために多量の出血にも拘らず救命された。男は『自分は人を殺している、死なせてくれ』と口走ったが、まわりの警官は信用せず、精神異常者と決めつけた。男は表情をこわばらせ警官の尋問には徹底して黙秘し、両手指を握り締め指紋の採取をも不可能にした。数時間後、警官が引き上げようとしていたときに、男は治療してくれた先生に話がしたいと言い、君島に自分の住所、氏名、年齢、人を殺したことなど詳しく話した。その結果、男は迷宮入り寸前の殺人及び殺人未遂事件の容疑者として神奈川県警より指名手配中と判明し、殆ど同時に病室に三人の警官が詰め掛け、二十四時間体制の見張りについた。男は逃走生活からの解放感からか表情も

落ち着き、病院食をうまそうに平らげた。数日後男は歩行可能となり、ポリネットをつけ病室を出る時に『治療してくれた君島先生に宜しくお伝えください』とはっきりした口調で言い、三人の警官に取り囲まれ、救急外来を出た途端手錠を掛けられた。その後約二週間して犯人逮捕に協力した功績により警察署長から感謝状が贈られた。

## 東京歯科大学市川総合病院

高橋 正憲 (48)

東歯大市川総合病院は、歯科の学生に口腔内の疾患を、全身的な観点から、また全身との関連において診断、治療することを目的として、歯科大学としては日本で初めて昭和二四年二月に設立された。整形外科の初代部長は、故野口好之名誉教授である。先生は市川病院設立と同時に外科教授として着任され、昭和三五年四月に整形外科が外科から独立するまで、外科はもちろんのこと、整形外科を含めて外科系一般の手術を広く手掛けられた。昭和三六年三月、故山内健嗣講師が教室より派遣されたが、先生は当時の様子を『東京歯科大学一〇〇年誌』の中で次のように語っている。当時、近隣には整形外科専門病院はなく、地元出身の神野助教授がいたこともあって、外来はかなり忙しかった。現在の本館工事が始まった頃で、窓をあけるとうるさいし、閉めれば暑くて閉口した。昭和三六年四月、野口教授は第三代病院長に就任され、在任中の昭和三九年五月に旧病院の本館が竣工した。昭和四〇年一月、田辺雅久講師が教室より着任されたが、当時の様子を次の様に語っている。神野先生が外



科に移ったので野口先生と二人で整形を担当した。外来患者は一日五〇名前後、入院患者は二〇名前後で、脊椎、脊髄外科的なのが多く、脊椎カリエスなど結核性のももかなりあった。症例によつては、教室から岩原教授をはじめスタッフにきていただき手術を行なった。昭和四四年六月には稲垣壮太郎講師が、同七月には上石英明助教がそれぞれ教室から着任された。

昭和四七年三月、野口教授が定年退官され名誉教授に任命された。同年五月、森雅文先生が第二代教授として着任された。十二月には旧病院の新館病棟が竣工し、整形外科は四階に四三床の独立した病棟を開設した。初代婦長は渋谷洋子氏である。昭和四九年三月、畠中卓士講師が着任された。当時の診療体制は常勤医三名で、他に野口名誉教授（整形外科とりハビリ担当）、非常勤として内西兼一郎先生（手の外科担当）、中西芳郎先生がおられた。当時の様子を森前教授を次のように述べている。「外来患者は一日平均一―五名前後で、外傷を含めて、あらゆる整形外科的疾患の症例があったが、人口の高齢化に伴って整形外科でも退行変性に由来する疾患が増加していた。」昭和五〇年四月、教室から新進気鋭の岡義範助手が着任し、慶応の手の外科班のチーフであった内西講師らと共に『末梢神経修復に関する実験的研究』

と題して、イヌを用いた一連の共同研究が始まった。これらの実験的研究において十二名の医学博士が誕生している。当院整形外科に在任し、一任の研究に携わった方は次の先生方である。岡義範、彦坂一雄、坪山寿郎、堀内行雄、田崎憲一、松本昇、根本孝一、高山真一郎、森岡英雄、持田郷、山中一良、西浦康正、の各先生。

昭和五一年一月、フランスから帰った鈴木三夫講師が着任され、東歯大の関連研究室と関節疾患を中心に研究を開始した。昭和五二年四月、鈴木講師は助教授に昇格された。昭和五六年二月、鈴木助教授が退官され、同月、不肖、高橋が着任した。昭和六〇年七月、森教授が第八代病院長に任命され、手狭になった病院フロントロビーの改築などを行ない、三年間大役を務められた。昭和六二年一二月、森教授が退官され、以来高橋が整形外科の責任者を務めさせていただいております。

現在、当院は東京歯科大学市川総合病院と名称を改め、平成四年七月に四七〇床で、臨床一七科を有する総合病院として新築オープンしました。床にはジュータンを敷き、各病室にはトイレを付け、各自に冷蔵庫付きというアメニティーを重視した今流行りの病院となったこともあり、外来は一日平均一三〇〇名、手術件数も昨年は三六〇〇件を越えました。整形外科は、小柳、栗村、小粥、

加藤の各先生と、研修医の菅田先生の六名で、一日約一九〇名の外来患者と年間五八〇件の手術をこなしています。症例としては、当院は救急指定ではないこともあり、外傷よりも整形外科的疾患が多かったのですが、最近は人口の高齢化もあって、合併症のある大腿骨頸部骨折で悩まされています。近隣には五四回の文先生を初め、各大学出身の整形外科の先生が一〇数名開業されており、それらの先生方からの紹介で症例は多彩です。当院では医師の身分が教職であるため、年間一〇回の歯科の学生を対象として整形外科の講義とポリクリがあります。給与も教職に準じているため、週一回の研究日が認められています。冷暖房付きの研究棟もあるのですが、時間と研究費不足のため閑々としているのが実状です。給与は安いものの、症例は豊富である、慶應に近い、研究室がある、東歯大との関係で硬組織などの研究がしやすい、などの特長を生かして、慶應からの若い先生方により良い活躍の場を提供し、地域医療の発展のためにスタッフ一同尽力いたします。

## 日野市立総合病院整形外科

市原 真 仁 (49)

日野市立総合病院整形外科のあゆみ  
病院沿革

昭和三六年 十月 町立日野国民健康保険病院として五

科(内科、外科、産婦人科、眼科、

耳鼻咽喉科)、二〇床で開院。

昭和三八年十一月 市立日野国民健康保険病院に名称変

更

昭和四一年 四月 三科(小児科、泌尿器科、整形外科)

を新設、八〇床増床し、一〇床と

なる。

昭和四一年 八月 伝染病棟二〇床を診療受託(南多摩

東部共立病院組合)

昭和四三年 四月 現在の日野市立総合病院に名称変更

昭和四六年 四月 一般病床四二床増床、一四二床となる。

昭和四九年 十月 伝染病床三〇床増床、五〇床となる。

昭和五六年 十月 一般病床二〇床増床、一六二床とな

り、伝染病床五〇床とあわせ二二二

床となる。

昭和五七年 十月 齒科開設

昭和五九年十一月 脳神経外科開設、一〇科となる。

平成 七年 四月 皮膚科外来開設、外来のみの神経科

をふくめ、一二科となる。

平成七年九月現在、職員数二四〇、うち医師二九名で、その内訳は院長（稲垣 宏、外科、慶應四四回）、副院長（私、整形外科、四九回）、内科六（慶應一、北里五）、外科四（慶應）、整形外科三（慶應）、産婦人科三（慶應）、小児科三（順天堂）、泌尿器科二（慶應一、順天堂一）、眼科二（慶應）、脳神経外科一（慶應）、耳鼻咽喉科一（杏林）、皮膚科一（慶應）、歯科一（慶應）となっている。

整形外科のあゆみ

昭和四二年 五月 加藤哲也先生が初代医長として着任。

昭和四二年 四月 村尾真俊先生が二代目医長に就任。

大谷清先生、木住野喜善先生等々の

応援をうけて、四年余り一人医長として勤務。

昭和四五年 八月 慶應より塩原治男先生が就任し、よ

うやく二人体制となる。

昭和四七年三月〜昭和四八年六月 ふたたび村尾先生の

一人医長となる。

昭和四八年 七月 肥沼龍之介先生が着任し、二人体制

となる。

昭和五〇年 六月 小林信男先生に交代。

昭和五二年 六月 青山哲先生に交代。

昭和五四年 六月 堀内行雄先生に交代。

昭和五六年 八月 藤田享介先生に交代。

昭和五六年 九月 大谷俊郎先生着任し、待望の三人体制となる。

昭和五九年十一月 村尾真俊先生、副院長に就任。

昭和五九年十一月 飯島謹之助先生が整形外科医長に就

任し、四人体制となる。

平成 二年 一月 市原真仁、整形外科医長に就任。

平成 四年十二月 村尾真俊先生退職。二五年間ご苦労

様でした。

平成 六年 一月 市原真仁、副院長（整形外科医長兼

務）に就任。現在に至る。

昭和四一年、当院整形外科が、加藤哲也先生の一人医

長で開設されて以来、本年でちょうど三〇年になります。

その間、昭和四二年から平成四年までの二五年間をずっと当院とともに歩んでこられた村尾真俊先生を始めとして、教室から派遣された先生方は、私を含めて総勢二十

九名にのびります。私は平成二年一月、飯島謹之助先生

の後任として、当科四代目の責任医長に迎えていただき、本日まで五年八ヶ月、なんとか無事に整形外科の運営に当たってまいりました。そして、平成四年一二月、副院長の村尾先生が退職され、昨年一月、前院長の三田先生が退任されるとともに、不肖私が副院長を拝命して現在に至っております。

当院は現在、一般病床一六二床、伝染病床五〇床で運営されておりますが、日野の市街地の狭い敷地に継ぎ足し継ぎ足して建てられた古い建物であり、病棟も外科系、内科系、産婦人科、小児科の四つだけで、整形外科としての単独病棟は望むべくもありません。

病室も狭くて術後や重症の患者さんの収容には不備な点も多く、実際には一四二床程度として運用させるを得ない状態です。病院が古い、汚い、病室が狭いということがネックとなっていて、残念ながら日野市民の全幅の信頼を得るところまではいっておりませんが、そんな中で何が整形外科はご近所の評判も良く、スタッフの常日頃の努力もあって、ここ四〜五年は外来患者数では常に全科のトップ、外来、入院の合計診療報酬でも内科、外科とともに一、二位を争っております。

私にとりまして、当院は整形外科の責任者として赴任した初めての病院であります。混合病棟も初めての経験

でした。規模はこれまで勤めた中では一番小さな病院です。しかし小さな病院には長所も沢山あります。第一に、他大学出身の先生も含めて、他科の先生方との連携がごく自然にできます。CTを始めとする放射線関係の諸検査や手術も、大病院にありがちの週何件までとか、何日前に申し込むとかの制限なしに可能です。混合病棟のお陰で当科の患者さんをあちらこちらの病棟に、かなり強引に押しこむことも可能です。但しそのために病棟の看護婦さん達とは多少ぎくしゃくすることもあります。

現在の当科のスタッフは、西村正智先生（63回、手の外科、主として外傷担当）、王東先生（北里大、66回相当、股関節担当、最近結婚されて島田先生になりました）、関口治先生（69回、膝関節担当）と私の四人です。月に一度、泉田良一先生に股関節外来をお願いしております。本年四月からは、日立製DXA全身骨密度測定装置を導入し、骨粗鬆症にも本格的に取り組んでおります。私事ですが、昨年一月以来、本来の診療以外の雑務で多忙をきわめたためか、本年五月になって突然体調を崩し、昨年夏からの一年足らずの間に一〇kg以上もやせてしまいました。検査をしてみたところDMということ、食事制限をされ、ビールも飲んではいかんとやわれすっきり意気消沈しております。しかし主治医の言いつ

けを守っていれば確かに体調もよく、外来も手術も、やたら多い各種会議もしっかりとこなしております。

この一年半の間に、当院の内容はかなりの変化をとげました。古くからの先生が何人かやめられ、内科も六名に増員となり、うち一人は慶應腎内科の63回の先生になりました。眼科も二人体制となり、長い間欠員となっていた耳鼻咽喉科も杏林大学から常勤医を一人いただきました。皮膚科にも慶應から若い女医さんが着任し、五年前には二十三名だった医師数が一一科二十九名となり、さらに麻酔科のドクターを獲得すべく慶應と交渉中であります。また、長年当科を中心に熱望しておりましたMRIも、ようやく市長の説得に成功し、来年四月を目途に導入される見込みとなりました。

しかし、病院の老朽化は誰の目にも明らかで、これ以上の改築、増築は全く不可能な状態です。市民の間でも市議会でも病院の新築は常に大きな問題でしたが、今回やっと正式に病院建替検討委員会が発足し、一〇月には基本計画をまとめて市議会に提出する運びとなっております。現在地に隣接して、地上六階、地下二階、三〇〇床規模の病院を新築して移転するという計画であります。敷地の広さが不十分で、将来の発展性に乏しい、十分な広さの駐車場がとれない等の欠点がありますが、緊急災

害時用ヘリポートの設置、可能な限りの近代化、省力化を目指した一大プロジェクトで、順調に市議会の承認が得られれば、平成一二年開業を目標に計画が進行することとなります。これが実現すると、整形外科も五〇床単独病棟をまかせられることになりそうです。その節は少なくとも一名の増員が必要となりますので、教室の先生方にも是非ともご協力いただきたいと思っっている次第であります。





も混んでいます。私は先生には公私共にお世話になり心から感謝しております。

整形外科部長は（53回）生の森謙一先生です。ご紹介するまでもなく専門は手の外科で医局員の指導や総合医局の医局長として活躍されています。

そして大熊一成先生がおられます。当院に関節鏡視下手術を初めて導入してくれました。今は大学での研究も大変なようですが持ち前のファイトで頑張っています。

もう一人安井慎一先生です。卒業後外科に入局されましたが整形外科の勉強を希望して当院にこられました。整形の認定医をめざしております。同窓会員になっていきますので宜しくお願い申し上げます。

当院は都内で慶應に近く研究中の先生にも勤めやすいと思いますからファイトのある先生はどうぞおいで下さい。去年空調や内装工事をして大分綺麗になりましたので同窓の先生方もお近くまでこられたら気軽ににお立ち寄り下さい。大歓迎です。

さて最後になりましたが院長になった感想を書かせていただきます。去年矢部教授にご挨拶に行きました時「和が大切だぞ」とご忠告戴きまして今その言葉の重みを感じています。つくづく交通整理だと思っております。よく整形の出身で大変だろう、と言われるますが余り気に

なりません。最近外科系の院長が増えている印象があり、整形は独立していますのでむしろ客観的に判断できるのではないのでしょうか。若輩で非才ですので小川先生のご支持と医局員のご理解とご協力でなんとか元気でやっております。去年六月地域医療連絡室を設置して開業医など外部から直接検査予約ができ結果も専門医が報告するというかなり先進的な試みをして好評を得ています。どうぞご利用ください。リーテルホスピタル（身近な病院）を目指して努力をしております。同窓の先生方のご支援が何よりも心強く感じますので今後とも宜しくお願い申し上げます。



## 東海大学病院

持田 讓治 (54)

東海大学医学部は昨年、創立二十周年を迎え、また整形外科教室の運営も今井望教授から福田宏明教授へとパトントンタッチされました。今井先生は名誉教授になられ、茅ヶ崎中央病院院長、茅ヶ崎福祉看護学校校長としてお忙しい毎日をおくられています。

戸松助教授と私が東海大へ赴任した十一年前は、関連病院への出向者も含め医局員はわずか十七名でした。しかしその少数陣営で非常に幅広い臨床活動をつづけていたことを記憶しています。今井教授は若い医局員がごく限られた分野だけを専攻することを嫌われ、general orthopaedicsをしっかり身につけるように指導されてきました。医局の雰囲気が家庭的であったことも助け、その後の医局員の急増はめざましく、現在は七十五名と東海大で二番目に大きな陣営になっています。

福田教授（現在本院副院長）はご自身がつくりあげてこられた大磯病院と本院の有機的連携と、医局の国際的活動を大きな柱とされています。本院の救命救急センターの完成（一九八九年）に伴う外傷例の増加は、若手

医局員の教育に大変貢献した反面、一般外来からの手術予定患者の入院が滞り、一時は二から三カ月待ちの状態となり、ご紹介頂く先生方にも大変ご迷惑をおかけしたわけです。昨年四月以来、大磯病院（戸松助教授）では膝関節を中心とした症例を、また本院では肩関節（福田教授、浜田講師）、手肘関節（岡助教授）、脊椎脊髄（持田）の症例を主に扱うこととし、さらに、術後患者を早期に近隣の関連病院に送ることや、救命救急センターから比較的軽度な症例を直接関連病院へ送ることを励行した結果、入院予定患者の流れはかなり円滑となっています。本院と大磯病院の合計一三〇の整形外科ベッドを有機的に使うことが目的であり、「伊勢原と大磯は廊下でつながっているから」という福田教授がよく使われる表現がその意を表わしていると思います。九十二年の秋に国立療養所箱根病院副院長として赴任された有馬先生のところには脊髄損傷や長期化した患者を転院させていただいていますが、一三〇ベッドの効率のよい回転のために貢献頂いていることはいうまでもありません。

医局の国際化の源が福田教授にあることは無論ですが、上記スタッフは全員海外での留学研究を経験し、外人を招く国際化“からもうひとつグレードの高い国際化にむけて努力しています。過去五年間にJBJS, Clinical

Orthopaedics, SpineとPeer review journalに  
掲載された論文の数もその前の五年間に比べ数倍になっ  
ており、母校慶應の業績に追いつける日をめざして努力  
しています。フレッシュマンの一例報告でも英語で投稿  
できる若手医局員も増えてきており、将来が楽しみです。  
東海大は一番最後にできた医学部ですが、英語教育や医  
局の国際的活動は今後の活動のキーポイントと考えてい  
ます。また、余談ではありますが、医局には星整夫人の  
会という医局員夫人の会があり、外国からのゲストとの  
交流には夫人同伴で参加することを奨励しています。

さて、この医局の歴史も二十年をこえたわけで、いつ  
までも新設医大というキャテゴリーで話をし、またされ  
ることは好ましくないことです。毎年五人程度の入局者  
があり、二または三人が学位を希望して研究テーマをも  
らいます。病理病態学、バイオメカニクス、分子生物  
学とそのテーマは多彩ですが、しかし彼らの研究数だけ  
では医局のスタッフが意図している研究の質も量も頭打  
ちになるわけで、継続的な研究を完成させるために臨床  
とは離れた研究グループをつくるべき時期かもしれない  
と、私は考えております。

昨年春、今井教授の退職記念パーティーの際に、先生  
は「知性の福田、理性の関、情の有馬の三本の矢に支え

られて仕事をつづけることができた」と話されました。  
いま、時間が経過し医局の面々も変わりつつあり、また  
医局の活動が非常に多様化していますが、自分がどの様  
な矢として活動できているのかを問い直してみることも  
たまには必要かも知れません。平成七年夏。



## 防衛医科大学病院

朝妻 孝 仁 (57)

このたび平成七年六月一日付で、防衛医大整形外科に着任しました。着任したその日の夕方に病氣療養中の新名教授が亡くなられたとの第一報が医局に入り、六月一日は私にとって一生忘れ得ない日となりました。この場を借りて新名正由教授のご冥福をお祈りしたいと思いません。着任してわずか三か月しか経過しておらず、教室の現況を正しく理解しているか甚だ不安ではありますが、私の眼からみた当教室をご紹介します。

当教室は昭和五十一年開設以来、今年で十九年目を迎えています。平成四年四月からは、第二代新名正由教授（44回）が教室を主宰されていましたが、現在は山岸正明助教授（49回）を中心に教室員一丸となって臨床、研究、教育にあたっています。

現在同窓会のメンバーは一三七人を数えますが、教室員はスタッフ九名、専修医（卒後五、六年生）五名、研修医（卒後二年生）五名、大学院生二名の計二十一名と大学の教室としては比較的小じんまりした所帯です。現在、慶應出身者は山岸助教授、根本孝一講師（55回）、

山田治基講師（58回）、小林龍生（指定）講師（60回）、伊崎寿之君（64回）、高石官成君（69回）、堀田 拓君（71回）、そして小生（57回）の八人です。スタッフが若いということはいろいろな不安や問題がある反面、大きな潜在力があるとも言えます。また教室が小さいためいろいろな面で意思の疎通がスムーズにいく利点もあります。

防衛医大卒業生の人事権が防衛庁にあるため、卒後教育のシステムは慶應と全く異なっています。すなわち、卒後一年目は大学病院において各科のローテーション（内科、外科、麻酔科あるいは救急部）を行ない、二年目に初めて整形外科のトレーニングが始まります。二年目も耳鼻科、眼科などのminorなローテーションします。その後三、四年目に陸上、航空あるいは海上自衛隊の医官として各駐屯地にある医務室に勤務することとなります。さらに五年目になると再び大学に帰室し、二年間臨床、研究に従事するのが一般的なコースと言えます。六年終了後、原則的には各駐屯地の医務室あるいは病院に赴任していきます。この間大学以外では整形外科指導医がいなく、ところがほとんどであるため、希望者には近傍の一線病院で臨床経験を積む機会も与えられています。ご存じのように防衛医大は医師国家試験合格率で毎年上

位にあり（本年度も第一位でした）、卒業生の能力には素晴らしいものがあります。その反面、慶應のレジデントに比べて関連病院での臨床修練の場が少なく、五、六年生の二年間大学に在る間に臨床を習得しなければならぬのは大きいハンディです。それだけに教室員の卒業教育に対する私たちスタッフの責任は重大であると言えます。

研究については研究主任の山田講師を中心に生化学を柱として行っており、慶應からは高石、堀田両君が実験に従事しています。今後、多方面の研究の発展が期待されます。

最後に臨床について触れたいと思います。よく防衛医大では自衛官とその関係者しか診ていないとの誤解を受けますが、そのようなことはなく、広く一般の患者さんも来院しています。現在臨床班は、脊椎（山岸、朝妻）、手（根本）、股関節（山田）、膝（小林）、腫瘍（伊崎）に分かれています。所帯が小さいこともあり、各診療班の連携は万全です。ベッド数が約六十床と少なく、かつ一週間の全麻件数が九件と限られていますので、症例を厳選し、効率のよい診療を心がけています。

以上、簡単ではありますが、防衛医大整形学教室の現状について述べさせていただきました。今後とも慶大整

形との親密な関係を保ちつつ、教室の発展に教室員一丸となって努めていきたいと思えます。同窓の先生方の一層の御理解と御協力をうけたまわりたくお願い申し上げます。



## シアトルの“NOMO”

市村正一 (59)

神戸大震災、地下鉄サリン事件、一連のオウム真理教疑惑、日米自動車紛争、大雨による被害等々、今年は日本からの便りは暗いものばかりでした。中でも新名教授の訃報を知らされた時は、全く言葉を失いました。二月に病院にお見舞いに伺ったばかりでしたので、ただ驚くばかりでした。心より御冥福をお祈りいたします。

米国における今年前半の日本関係の明るいニュースはなんとといってもLADジャースの野茂投手の活躍でしょう。全米オールスターに選ばれるだけでも名譽なことなのに、ナショナル・リーグの先発投手になったのですから大変なものです。彼はドジャースだけではなく大リーグの救世主として、今や全米の野球ファンの注目的になっています。

日本でもTV中継されたのでご存じの方も多いと思いますが、相手のアメリカン・リーグの先発投手はシアトル・マリナーズのジョンソンでした。先日子供にせがまれてそのジョンソンを見に行きました。ジョンソンは長身の左腕で、この日は調子が良かったせいか十六三振を

奪い完封しました。

その十歳の長男も地元のリトルリーグに入りました。

リーグは五月半ばから学校の終了する六月半ばまで、週二回の練習と、週二度の試合があります。練習は平日のみで夕方の四時半頃から二時間あり、試合は平日と土曜にあります。各野球場とも大抵はスタンドがあり、試合では三十人位の大人が応援に駆けつけます。味方の選手が活躍したりすると例の調子で大歓声があがるわけです。まさか自分自身が映画「がんばれベアーズ」の中の親たちのようになるとは夢にも思ってみませんでした。

運が悪いことに、長男がボールのコントロールが良いということも投手になったからたまりません。はらはらどきどきの連続です。息子が登板する時には“NOMO”と叫ぶ親たちもいますが、実力は雲泥の差で、ある時など六点リードで迎えた最終回で一挙に二十点近く得点されたこともあります。全く残念やら申し訳ないやらで、応援する言葉も忘れていました。結局チーム(Bears)の最終成績は二勝十四敗でした。それでも子供たちは楽しんでいました。懲りないことに長男は夏期のリーグにも参加していますが、今度のチームの名前がなんとBearsです！

シアトルは緯度的には北海道よりも北で、樺太中部と

同じ程度です。夏のシアトルは軽井沢のような気候で、朝は肌寒いのですが、昼は日差しが強く肌が痛いぐらいです。日陰は涼しく、普通各家庭にクーラーはありません。ただし、今年はやや雨が多いようです。

自宅から研究室までは車で約三十分かかります。研究室はPhDのErie教授をはじめPhDが三〜四人に、研究助手が五〜六人、学生のアルバイトが二名、秘書が一名といった構成です。教授の専門がコラーゲンの生化学のため、研究内容はすべてコラーゲンに関したものです。

これまで専ら臨床像から分類されてきました遺伝性のChondrodysplasiaのいくつかが近年タイプII、X、XIなどの軟骨特有のコラーゲンの異常によることが次々に明らかにされました。さらに、変形性関節症の中にもこれらの構造蛋白の異常に起因する例も報告されております。私は現在比較的研究の遅れているタイプIXコラーゲンについてこれらの疾患との関係を研究をしておりま

す。研究室ではこのような各種タイプのコラーゲンのmutationによるchondrodysplasiaの研究の他、コラーゲンの中でも特に架橋結合について優れた業績を出しており、エーラス・ダンロス症候群の六型における架橋結合の分析や、それに関連した酵素の遺伝子の解析を

しております。さらに最近では、骨タイプIコラーゲンの代謝産物の架橋結合部位に対する抗体を開発し、骨吸収代謝マーカーとして骨粗鬆症をはじめとして広く臨床応用しております。

こちらに来て約一年経ちますが、時々手術の夢をみたりいたします。そろそろ臨床が恋しいのかもしれません。現在臨床の方には顔を出していませんが、帰国するまでに少し臨床のリハビリが必要かもしれません。



## リーズ大学での研究と生活

川久保 誠 (特)

期待と不安を抱いて家族とともにリーズに來たのが四年の一月二十六日でした。

私が留学しているところはイングランド北部にあるリーズ大学の Rheumatology and Rehabilitation Research Unit (RRRU) と云う医学部の中の独立した研究所です。RRRUではリウマチの臨床研究、臨床薬理、リハビリテーション医学、そしてバイオメカニクスの四つのグループに分かれていて、私はバイオメカニクスグループに属し Dr. Seedhom のもとで研究をさせていただいています。本研究室は英国のバイオメカニクスイオニアで、英国のみならず世界中に多くの研究者を育て世に送り出しています。日本からも信州大学の前教授寺山先生が初めて留学されてから約二十年の間に十五人以上の先生方が当研究室で学び、慶応からも竹田毅先生が最初に留学されて以来、富士川先生をはじめ膝班を中心に多くの先生が学ばれ、私で七代目となります。研究室のメインテーマは変形性関節症の発生起序に関する生体工学的解析で、特に軟骨の物理特性に関する研究は長

年グループで続けている研究テーマです。その他、現在行われている研究はMP関節の人工関節の開発、膝靭帯の力学特性の解析、労作性腰痛の疫学などです。私は膝靭帯不全における膝蓋大腿関節症の発作起序に関する研究をしています。今年の秋には英国整形外科基礎学会に研究の一部を発表する予定にしています。

さてリーズでの生活についてお話ししましょう。リーズはイングランド北部のウエストヨークシャーにあり人口約七十五万でイングランド第三の都市です。織物産業で発展したこの都市は、さながら国際都市で、アジア、アフリカなどからの移民が多く生活しています(ちなみに息子たちの小学校では同級生の三割以上が黒人かインドなどのアジアからの移民の三世です)。英国は白人社会と想っていた私には大きな驚きでした。もう一つ驚いた事は英国は紳士の国、大人の国と日本では紹介されているこの国は、さぞかし親切的な紳士、淑女が多くいることと想像していましたが、実際は街には捨てられたごみが風に舞い、道には犬の糞が放置され、また空き菓は日常茶飯事と(私の車も二回ドアをこじ開けられてしまいました)、かつての大英帝国はどこにいったのかと言った感じで、俗に言われている英国病を目の当たりにした事でした。これらとは対照的に、英国の自然は

すばらしく、特にここヨークシャーは緑にあふれ、なだらかに続く丘陵地帯に羊や牛の群を眺め、日本では決して経験することのできないような自然を肌で感じることができます。週末になると家族でヨークシャーの小さな村を訪ね、羊と戯れ、ヨークシャー・プディングを食べると言う様なのんびりした休日を過ごしています。

最近、引越しを余儀なくされ、家を探していたところ、知り合いの伝で、本来我々留学生などには決して住めないような、リーズで一、二の高級住宅地に引越しました（驚くほど安い価格で借りています）。引越して間もなく、旅行で数日間留守をするので隣の家の人に鍵を預けて出かけました（空き巣の多いこの国では長期不在の時には鍵など隣の家に預けるのが普通です）。家に帰ってみると、わが家の生ゴミがきれいにかたづいてあることに気がつきました。なんと留守中に隣の人が生ゴミまで捨ててくれたのです。ここには英国紳士、淑女がまだいたのです。やはり経済的な余裕がなければ英国でも奉仕の精神は存在しなかった訳ですが、あこがれの英国で本場の紳士たちに会えてはっとしました。ここにすんで約一年半ようやくイギリスの良さがわかってきました。ごみを捨てる人も多ければ、それを片づける人もいる、泥棒も多ければ、ホームレスに食事を提供する人

もいる、林望ではありませんが、イギリスは愉快だと  
言った感じですよ。



残る半年でこちらの学位論文を仕上げ、日本に帰らなくてはならないと思うと、イギリスの生活をのんびり楽しんでいる場合ではありませんが、英国紳士になって帰るにはもう少し時間がかかりそうです。なにせイギリスはとても奥が深いのです！



## シカゴよりその一

千葉一裕 (82)

父の仕事の関係で海外生活の経験のあった私は小さい頃より、いずれは海外に出てみたいという漠然とした希望を持っていました。いや単なる希望というよりも自分の人生の来るべき当然の過程のように思い込んでいました。医師になってからもその思いは強くなるばかりで、慶應でのチーフレジデントを終え栃木の佐野厚生病院へ出張した後留学先を探していましたが、現実は厳しく簡単には受け入れ先が見つかりませんでした。そんな折神様のお引きあわせだったのでどうか、義弟の結婚式のあったホテルでたまたま別の結婚式にいらしていた防衛医大の故新名教授とお会いしました。世間話のあと留学の話になったところ、新名先生は例の口調で「おまえさんにやる気さえあれば、いくらでも留学先は紹介してやるよ。ただし遊び半分のいい加減な気持ちではだめだぞ。」とおっしゃってくださいました。さすがに世界中に名が知れ友人も多数持つておられた新名先生です（アメリカでの新名先生の知名度は抜群で、こちらへ来て改めて先生の偉大さを再認識致しました）。わたしが二つ

返事でご紹介をお願いしたことは言うまでもありません。その後新名教授主宰の国際シンポジウムのため来日した Rush Medical College 生化学教室の vice chairman, Eugene Thonar 教授にお目にかかり、やがて Thonar 教授より同大学整形外科の Gunnar Anderson 教授を紹介され私の留学先はとんとん話で決まりました。土方先生にご指導頂いた研究を何とか論文にまとめ、学位の審査の終わった直後の一九九四年三月末、Push のあるシカゴへと向かいました。こうして私の留学生活は始まりました。所属は整形外科でしたが実際の研究は生化学教室で始まりました。生化学の「せ」の字も知らなかった私ですので、初めは（今でも！）基本的用語や操作さえわからず、先行きが思いやられました。Thonar 教授、Anderson 教授の（ご）指導や当時防衛医大より留学していた舛田先生の協力でよたよたしながらも何とか研究を続けることが出来ました。九月になり帰国した舛田先生の替わりに我が教室より私の一年後輩で生化学班の桃原君が生化学教室にやって来て心強い味方となってくれました。現在は桃原君に助けてもらいながら、慣れぬ手つきで椎間板の組織培養や細胞培養の研究を隅々この方で細々とやっております（この生化学教室では閑節軟骨の研究が主で、椎間板を扱っているのは私一人です）。

研究に関する詳しいことは桃原君が専門ですので、私は文化、レジャーを中心に米国生活の模様を皆様にご紹介したいと思います。

シカゴと言うとギャングや屠殺場、冬の厳しい寒さなど、日本人にはあまり良いイメージはないようです。わたしもこちらに着いたばかりの頃は先人観もあり、何となく殺風景で恐そうなところだなという印象を持ちました。しかしそのイメージも徐々に変わってきました。確かに冬は寒いのですが（ $-12^{\circ}\text{C}$ 以下になることはしばしばで、特に体感温度で $-15^{\circ}\text{C}$ 以下になることもあります）。春になると寒さに耐えた木々の新緑が目に見え、春になると青さとなり、それはきれいです。またシカゴはアメリカ中央部の大平原のどまんなかで、海のようなミシガン湖沿いにあるため人々の気性も比較的穏やかで、西海岸の妙な明るさや東海岸のギスギスした感じはなく、よく働きつつ家族を大切にするという古き良きアメリカの価値観が残っている所とされています。よく言われるような個人主義、自分勝手という面も無いとはいえませんが、仲よくなるまでは人見知りをし、人に気を使うなど、日本人と変わらない面も多いような気がします。一方で、麻薬、殺人などの犯罪の増加、エイズの蔓延、人種差別などアメリカの大都市が抱える問題点も持ち合

わせています。市の南および西側 (Rush) がある辺りも含む) は、貧困層の居住区で殺人、強盗などが多発しております。Rushの隣にあるCook County Hospitalという全米でも有名な公共病院には毎夜銃やナイフによる殺傷事件の犠牲者の死体が数体から十数体運び込まれています。逆に市の北から北西にかけての地域は一部を除き、中産階級以上の白人居住区で比較的安全です。特に日本人 (我々も含む) が多く住む北郊外の住宅街は、パトカーが常時うろろしており、日本並みにというより物騒な事件が多発している最近の日本より安全な気がしています。この地域では車や家のドアをロックしない人も大勢います。わたしも鞆をアパートのロビーに忘れたことがあります。が、しばらくして戻ってもちゃんと置いてありました。緑の生い茂る並木道のなかに大きな家が建ち並び、徒歩で大きな公園や湖畔まで行け豊かな環境での生活が enjoy できます。北と南ではとても同じ国とは思えません。アメリカは成功してお金を得ると快適で安全な生活ができ、逆ですと犯罪多発地帯で明日をも知れない (少し大袈裟ですが) 暮らしを強いられると言う社会で、皆が中流という日本とは大違いです。一方アメリカの社会資本の充実度は日本の比ではありません。美術館、博物館も多数あり、入場料も五―六ドルと安く、しかも必

ず週一日、入場無料の日を設けています。毎週どこかで無料のコンサート、フェスティバルが行われ、お金の無い人でも楽しめるようになっていきます。しかし、シカゴで一番有名なのは市の三十キロほど郊外で行われるラビニア音楽祭ではないでしょうか。六月末から九月初めで、ラビニアと言う広い公園の野外ステージで、シカゴ交響楽団を中心としたクラシック、Ramsey Lewis Trio や David Sanborn の ジャズ、Manhattan Transfer, George Benson, Donna Summer の ポップスなど、一流 musician が毎夜入れ替わりコンサートを行います。しかも公演の芝生に寝転がって、ビールを飲んだり食事をしながらコンサートが楽しめます。入場料も芝生席ならたったの七ドルです。高速の渋滞も少なく、週末は気軽に郊外へ足を伸ばせます。宿代、航空運賃も安く、レジャーに関しては日本の半分のお金で倍楽しめると言ったら言い過ぎでしょうか。培養実験をしているとまとまった時間が取りにくいのですが、それでも合間を縫っては息抜きをしています。

さて、整形外科はこちらでは今最も人気のある科の一つです。それは人口の高齢化と共に人工関節をはじめとする手術料の高い症例の件数が増え、整形外科医の収入が急増しているからです。レジデントを除いた整形外科

医の平均年収は二十八万ドル、とある雑誌に載っていました。日本円に換算すると二五〇〇万円位ですが、こちらの物価は日本の半分程度（土地に限っては1/3 - 1/5以下）のことを考えあわせると、五〇〇〇万円以上の価値はあると思います。羨ましい限りですが、そのかわり競争も厳しいようです。医療訴訟に備えるための保険料が払えなくなり、医師を辞める人もいるようです。同じ医師同士間でも知名度や実力により相当の格差が生じています。良い悪いは別にして、厳しい競争に勝ち残ったものが良い思いをするという考えてみれば当たり前のことのような、しかし実際には行い難いことが現実に行われているのがアメリカです。

## シカゴよりその二

桃原茂樹 (63)

医局の皆さん、御機嫌如何でしょうか。

千葉先生と共にアメリカ、シカゴにありますが Rush Medical College に留学しています 桃原 (63回) です。

「J」 Rush Medical College は Rush - Presbyterian - St. Luke's Medical Center に属しており、以前幾つかに分かれていた大学、病院が、徐々に統合された総合医療センターとして存在しています。場所は、シカゴのダウンタウンより車で西に約十五分程行った所にあります（これ以上西へは、治安があまり宜しくない地域になってしまいます）

留学先である生化学教室は、ほぼ全員が関節軟骨の研究に携わっています（驚くことに faculty, technician 併せて約五十人以上の人間が関節軟骨の研究に従事しています）。ですから必然的に O A の研究が盛んです（もちろん一部の先生は R A の研究も行っていきますが）。臨床系の doctor や他研究機関との関連も緊密で、毎週他施設から色々な人を招いて講演を行って貰っています（米国だけでなく、ヨーロッパやオーストラリアからも

研究者を招待してこます。

Chairman の Klaus E. Kuettner 教授は、関節軟骨、O A の分野では、Ph. D. の中では Cleveland Clinic Foundation の Hascall 教授と並んで、真に名前が挙がるほど有名です。また、直接私が、千葉先生と一緒に師事して居る Assistant Chairman の Eugene J. M. A. Thonar 教授も、これまで proteoglycan の代謝、特に keratan sulfate に関しては第一人者です。この二人は度々来日してこますので、ご存じの方も多いと思います。Eugene は (目上の人に限らずですが、人の名前を first name で呼ぶのはアメリカでは普通のことです) 日本との文化の差を感じる点の一つです、大変人柄が良く、誰からも親しみをもたれています。我々も家族を含めて、時々食事に招待して下さいます。もちろんそれだけでなく、頭の回転、データからの理論付けは天才的です。また、実験やその結果に対する慎重さや情熱などその姿勢も大変勉強になります。

現在我々が行っている実験ですが、alginate というもので beads を作り、その中に千葉先生は兎から採取した椎間板軟骨細胞、私は犬や牛、人間から採取した関節軟骨細胞や半月板細胞を取り込ませて、それぞれの proteoglycan (PG) / collagen (Coll) の代謝について

を研究しています。この方法は従来の培養法に比べて三次元で細胞が培養できること、PG や Coll の代謝を調べするのに大変有効であるという利点があります。丁度今、来年の Orthopaedic Research Society (O.R.S.) に演題を出すべく準備をしているところです (二人とも二題 apply の予定です。もし、二題とも通ってしまったら、来年二月は思いやられます。ちなみに、例年の採用率は五十〜六十%ぐらいのことです)。

こうで少し O.R.S. の事を書きますと、例年 O.R.S. は A.A.O.S. (American Academy of Orthopaedic Surgeons) と同時期に開催されます (丁度、日本整形外科学術集会和基礎学術集会和の関係にあります)。昨年は、二月に Disney World で有名な Orlando で開催されました。内容に関しては、もちろんレベルが高いのですが、関節軟骨一つにしてもその研究者の数の多さは大変驚きです (また、一般にも関節炎に対する意識は、日本よりも高いように感じられます。何と言っても、肥満者は遙かに日本人よりも多く、その肥満度は少し日本人には信じられないような人達があります。たぶん、その為による O A も多いでしょう)。ただ、基礎系の研究と臨床とのタイアップはまだまだのような印象を受けました。

我々二人は、矢部教授に便宜を計って戴き、故新名先生にここを紹介して頂いて、現在大変貴重な研修を送ることが出来ています。その御恩に少しでもお応え出来るよう一生懸命仕事をし、かつ自分達の人生にとって大変有意義な時が過ごせるよう、残りの留学生生活をさらに頑張りたいと思っています。

「さあ、着いたぞ。」

橋本健史 (63)

成田からスカンジナビア航空機で十二時間あまり、四歳と二歳の子供を連れての長旅はさすがに大変でした。しかし、空港には、私達がお世話になるlundベリイ先生の奥様イングリッドが出迎えに来ていて下さり、とても助かりました(イングリッドという名前は、スウェーデン女性に多い名前です、ちなみに有名なイングリッド・バーグマンもスウェーデン人です)。

平成六年九月二十日、私は、スウェーデンの首都ストックホルムのカロリンスカ研究所での一年間の留学を矢部教授にお許しをいただき、大きな希望と少しの不安を胸に家族を連れ当地にやってきました。井口 傑先生が留学をされていたところで、先生自ら諸手配をして下さり、本当に感謝しています。

北欧スウェーデンは、面積が四十五万km<sup>2</sup>(日本の二・二倍)、人口八五〇万人で、南部はなだらかな田園、丘陵地帯で人口の九〇%が集中しています。北部はどこまでも続く原野です。スウェーデン人は、混血の少ない純粋な北方ゲルマン人で、金髪、碧眼の背の高い民族です。



男はみな一八〇cm以上で、病院の総回診では、日本人の平均身長である私は壁と話しているようです。立憲君主制ですが、日本のように万世一系ではなく王家は途中で変わっています。この国は、バイキングで勇名を馳せた後、一時デンマークに併合されましたが、五〇〇年ほど前に独立後、十七世紀にはノルウェー、フィンランドを併せ、北方の獅子の黄金時代を迎えました。その後、国力は衰えましたが、ふたつの世界大戦を中立でとおし、豊富な鉱物資源とノーベルに代表される発明によって先進工業国化に成功し、今日に至っています。

私の住む首都ストックホルムは、七十万人の人口を持ち、五十年代に綿密な都市計画に沿って大改造をした町で、たいへん美しい町です。いたるところに広い公園があり、道路も歩道、自転車道、車道と分かれており、どこかの国のように歩道を自転車車が物が物顔に走るなどという野蛮なことはありません。

福祉の発達は、やはり目をみはるものがあります。町じゅうどここの階段にもスロープまたはエレベーターがあり、車椅子、乳母車は本当にどこへでも入っていただけます。乳母車を押している人はバス代が無料で、身障者やお年寄りが乗りやすいように、車高も低く作っており、さらに乗降時にはバスが傾いてさらにタラップを低くします。

また、日本も顔負けの超ハイテク車椅子がレストランや病院を走っています。

私の通うカロリンスカ研究所は、ノーベル医学生理学賞の選考機関として勇名です。三つの付属病院を持ち、総ベッド数は三〇〇〇床で、全世界から研究者が集まっています。私が今住んでいる留学生センターには一五四世帯が住んでいます。その内訳はアメリカ二十六、日本二十一、中国一十四、ロシア一十二、ドイツ九、フランス七、イギリス六などとなっています。

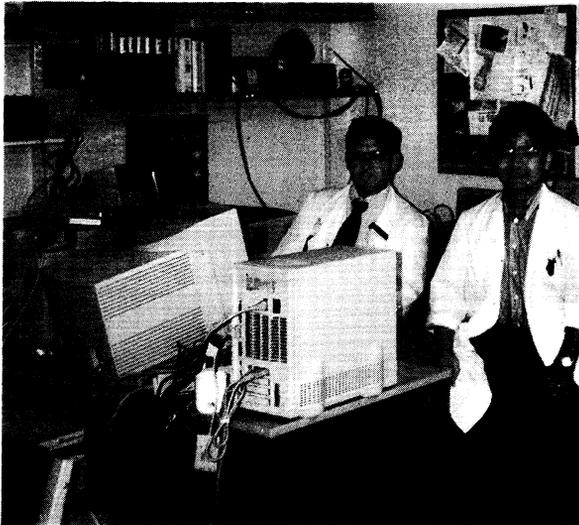
私の研究室は三つの付属病院のひとつ、フッディング病院整形外科のなかの歩行解析研究室です。一〇mの歩行路を備えた歩行解析専門の部屋で、光学的三次元動態解析システム、床反力計、シート状態圧センサーが同期され、数多くのコンピュータに囲まれて研究しています。主任のルンドベリイ先生は三次元動態解析の専門家です。とくに足関節をおもに研究されているということもあり、足の外科をやっている私としては大変都合で、公私にわたり非常によくしていただいています。研究室には仏語のネイティブスピーカーが二人おり、英語、仏語、スウェーデン語が飛び交う国際色豊かなところです。

私のここでの研究は行軍骨折の原因に関する基礎的研究と歩行時の足関節靭帯の挙動に関する研究です。実験

はだいたいの終わり、膨大なデータをコンピュータで解析する毎日が続いています。

休みの日には家族とともに近くの湖のほとりの閑静なお店でお茶を飲んだり、お城めぐりをしています。とにかく車で十分も走ると数多くの湖が点在する森となります。子供達も美しい自然のなかで元気にとびまわっています。

こちらにきて、非常に良かったと思うことは、研究を含めて非常に視野が広がったことです。とにかく、文字どおり世界中から研究者が集っているので、世界各国の人と友達となり親しく話し合うことができ、異なる医療観、世界観と出会うことができました。帰朝後はこれを生かし、大学さらには国家の発展にいささかでも貢献できたらと思っています。



先生方におかれましては益々御清祥の事とお慶び申し上げます。私は諸先生方の御厚意により、約一年間、Harvard大学付属病院であるMassachusetts General Hospital (MGH) に留学させていただきました。この原稿を書いている現在ボストンにいますが、来週には帰国の予定です。さて、私のいたMGHですが、一八一年に作られた全米で三番目に古い病院で、建物が建て増しに継ぐ建て増しのため非常に複雑で迷路のようになつており、職員の数も膨大で、民間ではボストン最大の企業です。またノーベル賞受賞者が八人いて、しかもその中の三人は最近五年間の受賞ということでした。私はこので、約半年を、R. Gelberman教授のもとHand Surgery Serviceで、残りの半年をJ. Jupiter教授のもとTrauma Serviceで臨床を勉強させていただきました。整形外科だけで手術件数は、一カ月約四五〇と非常に多いため、手術室は非常に巨大で数も多く、九十室以上あります。驚いたことに、靴は脱がないでShoes coverをつけるだけです。(日本のように履き替えたりしません)。また昼食の時間がなくて患者の出し入れの間に適当にパンやクラッカーをつまむだけという状

態です。手術そのものはあまり日本と変わりませんが、手術器械などは常に最新のものが使われています。ただその分患者さんの負担する医療費はびっくりするぐらい高くなっています。またアメリカ人の七人に一人は、医療保険にすら加入していません。この医療費の問題は現在、国民皆保険の議題としてワシントンで議論されていますが、ただこの問題も去年の中間選挙で民主党が歴史的な敗北を喫したのでますます混沌としたさうです。日本にいるときは、日本の医療システムの欠点しか見えませんでしたが、新しい視点からながめてみれば、少なくとも患者さんにとっては、アメリカよりはるかに恵まれていると思います。この高い医療費のせいで、多くの患者さんは可能な限り早く退院しがります。(日本の患者さんができるだけ入院したがるのと対照的です。) 車椅子に乗れるようになるとほとんどの患者さんは退院します。(車椅子の生活が日本ほど大変ではないのも事実です。)

カンファレンスもたくさんあるのですが、出席していたのは、Journal of Hand Surgery (J.H.S.) の抄読会、外傷の症例検討会、整形外科全体のカンファレンス、cadaverを用いてのanatomyのカンファレンスで、これらは、週一回およそ朝の七時から七時半に始まり、

一時間半ぐらいいやります。J.H.S.の抄読会はかなり批判的で、特に臨床においては、母集団の選別に片寄りが  
ないか、統計学的手法に誤りがないかについて論議され  
ます。また、anatomyはなかなかおもしろく、レジデ  
ントがcadaverで機能解剖をプレゼンテーションします。  
また、整形外科全体のカンファレンスでは、レクチャー  
以外に月一回、手術の合併症あるいはうまくいかなか  
った症例の検討会があり、これは討論がいつでも盛り上が  
り、皆率直に意見をいうので（レジデントすら）大変有  
意義でした。

予想していたよりも、忙しい毎日でしたが、近所の  
方々が非常に親切なので、アットホームな気持ちで暮ら  
せました。また六才の子供を通じてのアメリカ人との交  
際では米国の価値観、文化、習慣を学びました。私達が  
住んでいるのは正確にはボストンではなく、その郊外に  
あたるニュートンというところです。車でMGHまで約  
十五分（朝とても早いので道が空いています）と近いの  
ですが木が多くて静かな住宅街です。家は一軒家を二世  
帯で使っており、私達は一階でした。この家は築一〇  
年と非常に古いのですが、造りがゆったりとしており、  
よく手入れがされていて住み心地は良好、暖炉もあり、  
冬は重宝しました。また、バックヤードが広く、りすや

あらいぐまがいるなど東京では考えられない豊かな自然  
の中での快適な生活でした。二階の方達はとても親切な  
アメリカ人でご主人はアメリカンエア어의パイロットで  
す。日本にも住んでいたことがあるせいか親日家で新鮮  
な野菜の買える店からスラングまでいろいろと教えてく  
れました。予想していたほどのカルチャーショックもな  
く、米国での生活は楽しいものでした。また異なる価値  
観の中で暮らしたことで今まで見えなかったものが見え  
てくるような気がします。留学させていただいたことに  
心より感謝するとともに、この経験を帰国後の医療に役  
立てたいと思っています。



## スウェーデン留学中

寺田信樹 (65)

平成六年四月に出発、スウェーデンのマルメ市にある  
ルンド大学マルメ総合病院に留学しました。その後一時  
的に帰国しましたが、再び留学続行することになりました。

総合病院には実験研究部門があり、そこ手の外科部  
門の両方に属していることになっています。スウェーデ  
ンは人口八百万人、その第三の都市マルメは人口二十万  
人と日本では想像のつかない人口の少なさで、それゆか  
実験棟の窓からはウサギ、カモ等が走っているのは見え  
ても人間は時々見かける程度です。

またこれらの人々も根気を入れて仕事をすると言うの  
ではなく、のんびり適当にといった感じです。昼時には  
天気が良いれば仕事をさっちのけで日光浴をし、五時前  
には必ず帰り、日曜に研究室に居ようものなら驚かれる状  
態です。その為日本のように仕事の後飲みに出かけるこ  
ともなく、日本でそれを日課としていた私にとっては何  
分の時間があり過ぎて処置に困ったものでした。しかし  
今はそれにも馴れて特に不自由もなくこちらのペースに

はまっていますので不思議です。

それでは以下に感じた事を少し書きたいと思います。

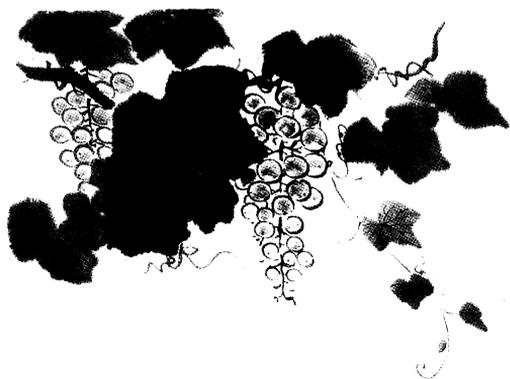
以前先輩にアメリカでも現在基礎研究をしているのは  
ほとんど日本人と中国人だと聞かされましたが、ここ  
も同様に他のセクションを見ても中国人がとても多いの  
には驚きました。そして彼らは優秀で一緒に仕事をして  
いるジャオ（中国人）は、先日のヘルシンキ国際手の外  
科学会で座長をする等なかなか活躍しています。マルメ  
には日本人はほとんど居ないので、はたして活躍してい  
るのか否か不明ですが、慶應で研究に没頭している同志  
を思うにアイディア、研究に関しては充分国際レベルに  
あると思います。ただ日本人は語学のハードルを越えな  
いと国際舞台に出にくい事があり、ハードルが一つ多い  
と言えると思います。

留学する都市にマルメの様な小都市を選ぶか、大都市  
を選ぶかは生活に大分差があると思われませんがどちらが  
良いかは判りません。

日本女性は外人男にモテるそうですが、日本男児は外  
人女性には全くモテませんので、これから留学なさる方  
は是非結婚してから行かれる事をおすすめします。(この  
点に関しては広島大から同じ研究室に来ている独身土肥  
君も同意している)

それでは皆様、日本に帰ったらまた仲間に入れて下さい！

井 口 理 (66)

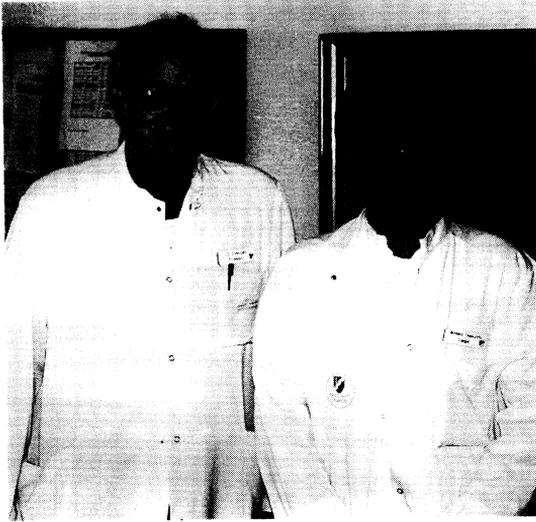


一九九四年夏、猛暑の日本を抜け出して、北欧デンマークのオーフスに来て一年が経ちました。来た当初は、日本語は持ってきた物でしか接する事ができず、また周囲は全く分らないデンマーク語ばかりで、スタッフが私に話してくれる英語を聞いてホッとする状況でした。中学時代から英語の苦手な私が、なんとか一人で過ごせたのもラボの皆さんのおかげと思います。

ここオーフスは、デンマーク第二の都市ですが、人口二十余万人の日本でいえば小さな町です。バイキング時代からの港を中心に広がった町で、私の暮らしているところは、町の中心から二kmくらいはなれた大学の病院の一画です。オーフス大学は、学生二、七〇〇人の大きさで、緑一杯のキャンパスの中には小川が流れ、水鳥の来る池があります。私は、オーフス大学付属整形外科病院のバイオメカ研究室でStephen教授をはじめ臨床・研究のスタッフにお世話になっています。(ラボと同じ建物のゲストルームに住んでいます。)

ここでは、毎朝、ヨーロッパ大陸風に八時から仕事が始まります。教授のofficeで臨床カンファレンスをした

後、主にラボで肩・肘のバイオメカの実験・研究したり、臨床では手術の助手に入れて頂いたりしています。大体四時頃、ほとんどのスタッフは帰宅し、後はみんな家族サービスをしている様です。いつも夕方残るのは独身の研究者たちで、六時ごろまで（時々夜中まで）仕事をしています。夕食は、病院の食堂で取ったり、時に日本食を自炊しています。



来た当初、言葉が全く分からなくて、宿舎の共同のキッチンや洗濯機の張り紙が読めず、ラボの友人を何度も呼んで来て、訳してもらいました。日本人にはほとんど接触しない生活を一人でしていると、デンマーク人（ヨーロッパ人）の生活が見えてきたような気がします。ここは税金が物凄く高率ですが、日常生活費は日本に比べれば安く感じます。国民（長期滞在者も）全員が登録番号を持っていて、その番号は銀行の口座・税金・病院の診察・図書館のカードなどほとんどすべてに共通で便利ですが、すべてを一括して国が把握しているようです。年度末の銀行預金残高に対して税務署からの問い合わせがあったのには、びっくりしました。日本のような祝日は少ないのですが、完全に週休二日制で、更に、年五週間の休みがあります。みんな最低一回に一週間単位の休みを、夏は二〜三週間まとめて取り、南の国へ遊びに行きます。（北欧には、ドイツ人がたくさん遊びに来ます。）日本の夏休みを考えると羨ましい限りです。

退屈な週末を過ごしていましたが、半年を過ぎた頃から、大学の外国からの学生・研究者向けの施設である International Student Center のイベントに、参加するようになりました。そこで、いろいろな国からのいろいろな分野の研究者・学生に会い、友人が増えました。

他国の・他分野の人の話を聞いて、今まで狭い視野の中にいたことを痛感しました。ほとんどの人達が、何の苦もなく英語を話すのには、感心させられてしまいます。

また、同じ学生・研究者でも、国によって貧富の差があることを、実感しました。みんな顔には出さないで、低いレベルに合わせる、全員で楽しむようにしています。

この原稿が読まれる頃には、帰国していると思います。忙しい日本での臨床を離れて、研究したり、いろいろな国の人に出会って話をし、自分自身を考える時間が持てました。この一年は、一生のうちで最も貴重な時間になると思います。出発前後に、お世話になった先生方、そして、こちらで、お世話になった先生方、友人たちに感謝致します。あと一カ月となりましたが、残った時間を有意義に使いたいと思います。

## アメリカ留学便り

渡辺 理 (66)

一九九三年九月からミズーリ州ワシントン大学の、マキノ形成外科教授の研究室に留学させていただいております。本大学は一八九一年に設立され、現在では全米でも五本の指に入るメディカルスクールに発展してきました。ワシントン大学のメインキャンパスから二、三マイルの所に、バーンズ、ジュエッツシュ、チルドレンの三つのプリンシパル病院と、医学部のキャンパスがあります。これら三つの病院の他に、セントルイス内に二つの病院と、州内のいくつかの病院群を合わせ、私立では、アメリカ最大のヘルスケアシステムを誇っております。

研究室は、二十以上もあるキャンパス内のビルに散在していますが、中でもクリニカル・サンエス・リサーチビルは、十階建てで、すべてが臨床、基礎系の研究室で埋まっています。現在このビルの建て増し工事が進んでおり、研究に対する資金の豊富さには、本当にびっくりさせられます。アメリカの多くの大学では、各研究室がNIHから得たグラントの五十パーセントを大学が吸収するシステムになっており、ワシントン大学は、現在N

1日グラント保有数が全米第四位ということですので、大々的な研究棟建て増しも少しは納得できます。いずれにしても、多くの研究室には、必ずM.D.の他にPh.D.と何人かの技術員、さらにマスターコースの学生や、夏休み期間のみ研究室に来て研究をしようという若い学生が来ることもあり、大学全体としては常に膨大な数の研究が行なわれています。技術員として雇われている人々にはアメリカ人の他にインドや中国等のアジアからの医者も少なくなく、彼等は勤勉で非常に良く働き、アメリカの医学の成果の陰にはこういったアジア人の見えない力がかくされていることを強く感じました。

マキノン教授は末梢神経外科医としてばかりでなく、末梢神経移植等の基礎的研究でも世界的に有名で、週一回のラボミーティングで私たちに会う以外は、外来と手術に、非常に忙しい毎日を過ごしています。私は、最初の数カ月間は研究室で進行中の実験を手伝いながら、英語に苦労する日々でしたが、神経外科学教室の研究室でHRPによる神経細胞の標識法を学んだのがきっかけとなり、ラットを用いた末梢神経再生の年齢依存性に関する仕事、私の主な研究となりました。他の医学分野同様、末梢神経研究においても、分子生物学的手法がほとんど取り入れられており、私たちの研究室でもその必要

性は充分に感じているのですが、設備と、それを扱える人材の確保には、もう少し時間がかかりそうなのが現状の様です。

ワシントン大学のあるセントルイスは、中西部ではシカゴに次ぐ第二番目の都市で、バドワイザーで有名なアンホイザーブッシュの本拠地として知られているほか、戦闘機を生産するマクドネルダグラス社や、試薬会社シグマの本社も当地にあります。町の北部は全米でも有数の犯罪地帯となっていますが、それ以外の地域は、緑が多い閑静な住宅地が広がり、住むにはとても良い所です。

最初の一年間は、病院まで二十マイル弱のアパートメントコンプレックスに住みましたが、二年目は、病院まで六マイルのアパートを探し、天気の良い日には、自転車で病院まで通っています。セントルイス郊外には、車で一〜二時間も走るとカヌーのできる川やキャンプ場が無数にあり、四才になる娘も日本ではなかなか体験できないアウトドアの生活をエンジョイしております。

アメリカに来て、つくづく感じた事ですが、こちらの人々は家庭を非常に大切にします。大変忙しいレジデントたちも朝六時頃から仕事を始め、遅くとも夕方七時頃には家に帰り家族と一緒に食事をする様です。週末は子供と遊んだり芝刈りをしたり、とにかく家族と一緒に過



ごす時間を大切にしており、私たちも少しは見習うべき  
と思います。もうひとつ、アメリカ人は、自分をアピ  
ルするのがとても上手なこと。学会だけに限  
らず、毎週行なわれるカンファレンスなどでも、アメリ  
カ人の医者は、自分の実験を、わかりやすく印象的に説  
明します。日本人は、英語ができないというハンディを  
別にしても、もう少し他人に自分の考えを上手に伝える  
ということを訓練すべきと感じました。

今年の秋には帰国しますが、アメリカで得られた私の  
経験を何らかのかたちで医局で役立てられればと思っ  
ております。

最後になりましたが今回の留学の機会を与えていた  
だきました矢部教授はじめ、様々な御援助、御指導をくだ  
さいました教室の諸先生方に心より御礼申し上げます。

# 秘書紹介

教授秘書 宮城直美

教授秘書としてスタートをきり一年半経ちました。皆様にはいつもお世話になり心から御礼申し上げます。同窓会員の先生方とは電話で接することが多いのですがお目にかかる日も楽しみにしております。

医局秘書 白土若菜

秘書になり二年が経ちました。手紙の書き方や、電話の応対、忙しい先生方への取り継ぎなどいまだに戸惑ってしまう事があります。もっと経験を積み、皆様に失礼のない様頑張ります。

医局秘書 坂口憲子

英会話講師から、違う環境のここ医局で働き始めて一年半がたちました。まだまだ力不足ですが、これからますますに頑張るつもりですのでよろしくお願い致します。

医局秘書 石井洋子

平成六年の十月から、医局秘書となり、もうそろそろ一年がたとうとしています。先生方の御名前と顔、医局の毎日の仕事とともに、早く覚えたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

日本パラプレジア医学会日本脊椎外科学会秘書

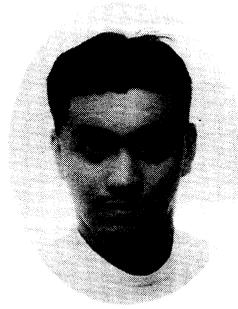
大西美穂

四月から学会担当秘書としてお世話になっております。先生方をはじめ、多くの方の御指導により支えられ感謝しております。これからも、マイペースな私ですが、よろしくお願い致します。



# 新入局者紹介

(平成六年度研修医)



奥島 雄一郎

生年月日 昭和四十三年七月一日

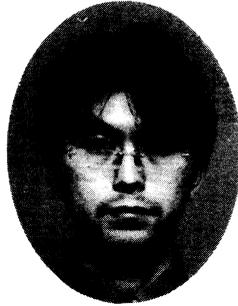
出身校 慶應義塾大学医学部

運動機能を出来るだけ、正常に近い状態に維持し、修復することが整形外科の一つの治療目的と考えて、入局させて頂きました。

入局してから、約一年以上たちますが、まだ毎日が分からないことの連続です。こうした時に先輩方に丁寧

お教え頂き感謝しております。

上の先生方の知識、技術はもちろんとして知識に対する姿勢なども習い、常に少しずつでも努力していくつもりですので、よろしくお願い致します。



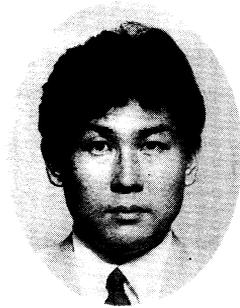
西本 和正

生年月日 昭和四十四年五月十三日

出身校 慶應義塾大学医学部

大学でのフレマン生活もあっという間に終わり、現在浦和市立病院の方で御世話になっております。最初は諸先輩方のタフさについてゆくのが精一杯でしたが、ようやく慣れてまいりました。毎日がすさまじく速く過ぎていき、慢性消化不良状態の私ですが、最も革

新的な科にあつて、自分も、既存の事実のみにとらわれない目を養っていきたくと考えております。どうぞ宜しくお願い致します。



金子博徳

生年月日 昭和三十九年六月十四日

出身校 慶應義塾大学医学部

平成六年四月に整形外科学教室に入局させて頂き、早一年余りが経ちました。

平成七年七月より済生会神奈川県病院にて研修させて頂いております。初出張のため、期待と不安でいっぱいの中仕事に取り組んでおりますが、諸先生方の御指導のもと、より一層の精進をしてまいる所存です。一日も速

く諸先輩方に近づけるよう努力してまいりますので、今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。



奥山邦昌

生年月日 昭和四十二年四月十二日

出身校 慶應義塾大学医学部

平成六年四月に整形外科学教室に入局して慶應病院での辛くも楽しいフレマン生活を終え、七月より静岡赤十字病院にて勤務させて頂いたこととなりました。初めての出張ということで、期待と不安でいっぱいですが大で研修し教えていただいたことを糧に、出張病院の先生方の御指導のもと頑張りたいと思います。一日も速く諸先輩方に近づけるように努力しますので今後と

も御指導、御鞭撻の程宜しくお願い致します。



金 治 有 彦

生年月日 昭和四十四年十月十五日

出身校 慶應義塾大学医学部

整形外科教室に入局してから早いものでもう一年以上もの月日が経ちました。現在は国立埼玉病院でお世話になり、臨床を学ばせて頂いております。

最近、国立埼玉での生活の中で心より痛感致します事は、先輩方の偉大さであります。可能な限り早く、初心者マークのとれた、一人前と呼ばれる医師になりたいと考えております。

まだまだ若輩者ですが、先輩方を手本として努力して

いく所存です。今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



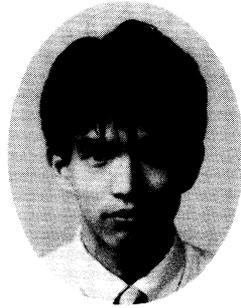
奥 山 訓 子

生年月日 昭和四十三年十二月四日

出身校 慶應義塾大学医学部

「面白そう」という単純な理由で整形外科を希望したのですが、実際に仕事を始めてみると、予想以上に整形外科は興味深く、楽しい毎日を送っております。知識も技術も経験もなく、私から患者さんにさしあげられるのは「上機嫌」くらいなので、楽しく過ごせることを周りの諸先輩方、看護婦さんや職員の方々、同僚達に感謝しております。これからも皆様、よろしくお願い申しあげ

ます。



堀内圭輔

生年月日 昭和四十四年六月十三日

出身校 慶應義塾大学医学部

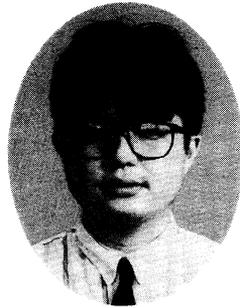
入局してからあっという間の一年でした。

学生時代、整形外科の系統講義には一度も出席したことがなかったため（他の科も全く出ていませんでしたが）、学問的面からは全く白紙の状態でのスタートでした。

そんな私がこれまで何とかやってこれたのも、すべて諸先生方の暖かい御指導のおかげです。

七月から出張となり、また白紙の状態からのスタートとなりました。期待に添えるよう努力するつもりであり

ます。御指導御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



望月竜太

生年月日 昭和四十四年三月二十二日

出身校 信州大学医学部

初めまして、この度入局致しました望月竜太と申します。出身地は静岡県清水市、趣味はテニス、読書、野球評論、カラオケ等です。

伝統ある慶應義塾大学整形外科の一員となれて大変光栄に感じておりますが、何分まだ右も左もわからないことゆえ、皆様には色々御迷惑をかけるかもしれませんが、精一杯頑張りますので……

……と言って早一年、実際に迷惑のかけ通しでしたが、

諸先輩方の暖かい御指導のもと、現在は芳賀赤十字病院で研修させて頂いております。今後とも宜しくお願い致します。



谷 島 浩

生年月日 昭和四十一年十二月八日

出身校 東邦大学医学部

伝統ある本教室に入局することができ、光栄であると思います。

この一年の研修生活におきましては、先輩方の永続的努力こそが本教室の繁栄をささえている事を知りました。たるんだ我が身を、今一度引きしめまして、努力してゆく所存であります。

今後とも、御指導よろしく御願いたします。



今 井 仁

生年月日 昭和四十二年一月十六日

出身校 昭和大学医学部

入局の動機 外科系志望であったことに加え、運動器の機能再建に興味があったため。

大学での研修を終え、現在足利赤十字病院にて研修させて頂いております。日常診療を通じて、あらためて整形外科の奥の深さと整形外科医としての力の無さを感じさせられている毎日です。一人前の整形外科医に一日も早くなれるよう努力致しますので、今後とも御指導、御鞭撻の程宜しく願致します。



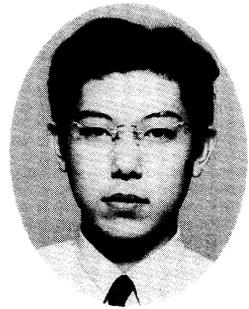
矢 吹 有 里

生年月日 昭和四十四年十一月二十五日

出身校 東京女子医科大学医学部

様々な論議を呼ぶ中、私達（73回）フレッシュマンが入局してから早くも一年が過ぎました。この一年はあたたかい諸先輩方、同僚達に助けられ、ただただ迷惑をかけぬようと必死で過ごしてしまった気がします。

一年を終えたばかりで、これからまだまだ長い修業の道が続いていますが、精一杯努力して勉強・筋トレに励みたいと思います。今後とも御指導の程よろしくお願い致します。



陣 内 雅 史

生年月日 昭和四十二年二月八日

出身校 東海大学医学部

右も左も分ならず不安と期待を胸に入局して、あっという間に一年三カ月が過ぎてしまいました。何年何十年と経験を積んできた優秀な整形外科教室の諸先生方と一緒に仕事ができ、とてもエキサイティングな日々でありました。また、もっと勉強しなければと思うことの多い日々でもありました。

七月より稲田登戸病院に出張となります。今以上に医師としての自覚と責任を問われることとなるでしょう。一生懸命頑張る所存ですので、今後とも御指導・御鞭撻のほど宜しくお願い致します。



濱野 尚子

生年月日 昭和四十三年十月四日

出身校 東邦大学医学部

入局して一年と二ヶ月。やはりあつという間に過ぎてしまいました。

今、出張を前にしてこれからどんな毎日が待っているのか、不安は挙げればきりがありませんが、それと同時に期待にもあふれています。一度はあきらめていた整形外科医の道を選んだのは自分です。これから先、挫折しそうになっても、入局を決めたあの日のことを思い出し、頑張っていきたいと思います。

諸先輩方、まだまだ未熟者ですが、御指導の程、よろしくお願い致します。



中道 憲明

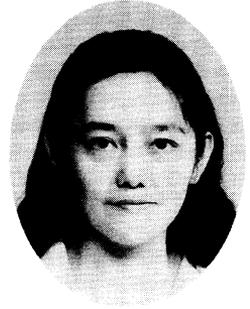
生年月日 昭和四十二年四月十五日

出身校 日本医科大学医学部

入局の動機 学生時代フットボールの練習中に足関節内果骨折にみまわれ手術を受けたこと。同じく試合中の肩関節脱臼というアクシデントが決定打となりました。

学生時代は、アメリカンフットボール、ラグビーを特技としていましたが、現在はその名残を見い出すのは難しい状況です。

抱負 患者としての体験を忘れず、常に患者の気持ちを考えられる医師を志します。



島村知里

生年月日 昭和四十二年十月三日

出身校 琉球大学医学部

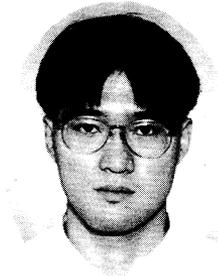
整形外科学教室に入局させて頂き、早くも一年が過ぎました。

初めての出張を控え、緊張しておりますが期待も多く持っています。

私達は、同期に女性が四名おり、このことは一年を振り返ってみて私にとってはとても心の支えになっていたと感じます。今後は、それぞれの施設でお互いに頑張っていきたいと思っています。

御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

(平成七年度研修医)



今林英明

生年月日 昭和四十六年三月十日

出身校 慶應義塾大学医学部

(74回) 生の今林英明です。卒後二年間横浜市済生会南部病院にて研修させて頂く予定であります。

医学の奥深さを肌身に感じ、自分の医学的だけでなく人間としての未熟さも痛感する毎日であります。

医師としての道のりを出発したばかりですが、多くの先輩方、同僚、又スタッフの方々の導きにより一歩一歩踏んで行こうと思えます。

このような恵まれた環境にいることを感謝し、努力し

ていこうと思えます。よろしくお願い致します。



今 林 正 典

生年月日 昭和四十三年六月十三日

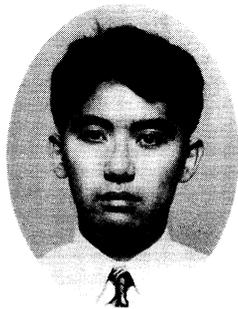
出身校 慶應義塾大学医学部

季節は巡り寒くそして長い冬の後春はやって来ました。

大地には緑が輝き色鮮やかな鳥達が喜びの讃歌を口ずさんでいます。そんな眩しい季節の中、私は慶應義塾大学医学部整形外科学教室のフレッシュマンとして新しい人生のスタートを切るようになりました。フレッシュマン。

嗚呼、何といい響きの言葉なのでしょう。しかも私は素晴らしくそして偉大なる先輩方によって脈々と築かれ支えられてきた伝統ある整形外科学教室の一員と成れた

のです。点滴を入れながら、採血をしながら思わず微笑がこぼれてしまう、そんな私ですが宜しくお願いします。



岡 崎 真 人

生年月日 昭和四十六年一月十四日

出身校 慶應義塾大学医学部

入局から早くも三ヶ月が過ぎようとしています。諸先輩方、ナースの方々、その他多くの方々に多大なる御迷惑をおかけしつつも、温かい御指導のもとで頑張っております。

学生時代は野球部に所属し、捕手をしていました。捕手というポジションは常に全体に気を配り、積極的に行動しなくてはなりません。学生時代の自分にこれが出来

ていたかは疑問がありますが、今後この目標が達成できるような心がけていく所存であります。今後とも宜しくお願い致します。



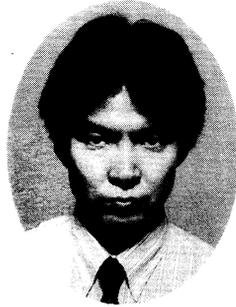
杉木 正

生年月日 昭和四十六年二月十二日

出身校 慶應義塾大学医学部

入局以来すでに三ヶ月。毎日が学生時代とは比較にならないスピードで過ぎてゆきます。社会人として新しい人間関係の中で仕事をするようになり、責任感と緊張感でいっぱい状態です。けれども日々遭遇する出来事は非常に新鮮に感じられます。最近では採血・点滴はほぼ百パーセント独力でこなせるようになり、当直先でも救

急車のサイレンに以前ほどは動じなくなりました。とはいえ若輩者には変わりありません。これからも良き整形外科医となるべく一歩一歩精進してゆきたいと思えます。御指導の程、よろしくお願い致します。



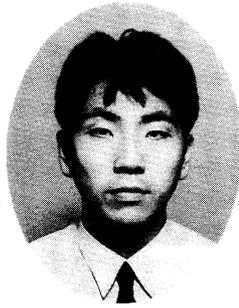
田村 睦 弘

生年月日 昭和四十四年九月十二日

出身校 慶應義塾大学医学部

この度、伝統ある慶應義塾大学医学部整形外科学教室に入局させていただくことになりました。大学では硬式野球部に所属し(一番センター)、チームワークを大切にした部を目標に活動してまいりました。とにかく、スポーツが好きであります。現在病棟を駆けめぐり汗を

かいております。先生方の御指導のもと、技術的にも精神的にも、患者さんに『安心感』を感じてもらえるような整形外科医になりたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。



谷野 善彦

生年月日 昭和四十五年八月二十四日

出身校 慶應義塾大学医学部

平成七年四月より、慶應義塾大学整形外科学教室へ入局させていただくことになりました。伝統ある当教室へ入局できたことは、大きな不安を抱きつつも、最高の環境で整形外科を学ぶことができることに喜びを感じています。まだまだ、何もわからないことはばかりで諸先生方

の足手まといとなっていると思われますが、少しでも多くのことを吸収し、良い整形外科医となれるよう努力していく所存です。今後とも、長い目で見守っていただけたら幸いです。どうぞ、宜しくお願い致します。



辻 崇

生年月日 昭和四十五年十月二十一日

出身校 慶應義塾大学医学部

入局の動機はスポーツ医学に興味があり、スポーツ外傷等に対する機能再建が夢である為です。入局させていただき二ヶ月程経過した現在は、麻酔科をローテーションで頂いております。

二十一名の同僚にも恵まれ、厳しくも楽しい研修医生

活は、失敗の連続ですが、諸先生方の温かく熱心な御指導に感謝する事しきりの毎日です。

私も一歩一歩前進出来る様努力してゆく所存ですので、今後とも御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

今後ともよろしくお願い致します。



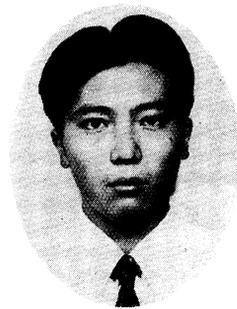
西脇 正夫

生年月日 昭和四十四年十二月十五日

出身校 慶應義塾大学医学部

長い間の憧れであった整形外科に入局させて頂きどうも有難うございました。

まだ分からないことばかりで先輩方に迷惑ばかりかけていますが、一日も早く患者さんの力になれるよう人の何倍も努力して頑張っていきたいと思っておりますので



野尻 賢哉

生年月日 昭和四十五年十月二日

出身校 慶應義塾大学医学部

昨年の十月にポリクリで整形外科をローテートした際に外来・手術・病棟を実際に見て勉強する機会を得ることができ、学問的に非常に興味も持ったのでその頃から入局を考えはじめました。実際に入局して、仕事をするのと今まで以上に興味がわいてきて、毎日、新しいことを学ぶたびに奥の深さを知り、整形外科を選んで良かったと感じている今日、この頃です。

これから、自分の足りない部分を、埋めるため、全力

で勉強していききたいと思っていますので、御先輩方、今後とも御指導の程、よろしくお願い致します。



藤田 貴也

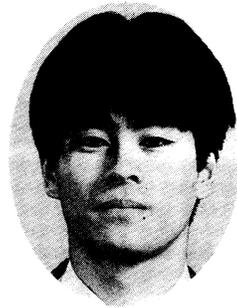
生年月日 昭和四十四年一月十八日

出身校 慶應義塾大学医学部

四月十二日より医局員の一人となりました藤田貴也です。他のフレッシュマン二十人よりも緻密に確実に仕事をこなしていき、サイエンスの目とヒューマニティーの心を備えもつ医者になりたいと思います。

まだまだ、知らないことも多く、諸先輩方に御迷惑をかけることもあるかと思いますが、同じ轍を踏まぬよう対策を練って、常に前進していき、一日も早く戦力と

なれるようにしたいと心がけていますので、温かい目で御指導の程、お願い致します。



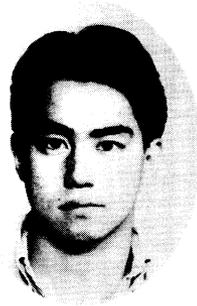
三尾 健介

生年月日 昭和四十四年九月十八日

出身校 慶應義塾大学医学部

「整形外科医となって三ヶ月が過ぎましたが、久しぶりによく怒られた期間だったと思います。いままでの人生の中でも一、二を争う程かも知れません。毎日毎日失敗を繰り返しても、「僕だってやればできる」などと自分の可能性に期待しているのですが、やらなければできないのが現実であり、「世の中甘くないなあ」などと思っています。

どんなに怒られても、めげずにくらいついていく決意です。で、びしびし鍛えて下さい。よろしくお願い致します。



森田 晃造

生年月日 昭和四十五年九月三日

出身校 慶應義塾大学医学部

入局の動機は、スポーツ医学、及び機能の再建を目的とした整形外科の分野に興味があり、最もやり甲斐のある分野だと思えたからです。

四月に入局して以来、早三ヶ月になりますが、現在済生会横浜市南部病院にて麻酔科の研修を行なっております。整形外科からは一步離れておりますが手術中に南部

病院の諸先生方に色々とお指導して頂く機会もあり、医局の良さを痛感しております。

まだ分からない事ばかりですが、日々勉強に勤しみ、努力していく所存であります。今後とも御指導御鞭撻の程宜しくお願い致します。



吉川 寿一

生年月日 昭和四十四年七月二十三日

出身校 慶應義塾大学医学部

整形外科教室に入局して早くも三ヶ月たとうとしておりますが、毎日失敗失敗の連続で、日々悪戦苦闘しております。スタッフやレジデントの先生方、またパラメディカルの人々にも迷惑をかけることもあるかもしれま

せんが、今後とも暖かいご指導よろしくお願い致します。

御指導の程よろしくお願い致します。



伊藤 大助

生年月日 昭和四十五年一月二十日

出身校 信州大学医学部

早いもので、入局から三ヶ月が過ぎやっと思ひ毎日のハードスケジュールにも徐々に体が成れてきたような気がします。

毎日がわからない事の連続ですが、やさしい諸先輩方の御指導のもとに、「同じミスを二度くり返さない。」をモットーとして、一日も早く一人前の整形外科医になれるようがんばりたいと思っております。

現在の所、熱意しかない自分ではありますが今後とも

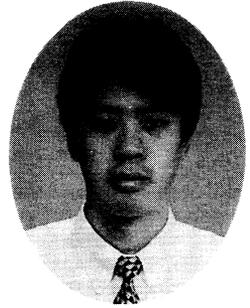


小林 修三

生年月日 昭和四十一年八月十七日

出身校 日本大学医学部

足りない部分は気合いでカバーできる様、がんばっていこうと思ひますので今後ともご指導の程よろしくお願い致します。



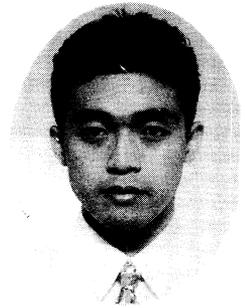
小宮 浩一郎

生年月日 昭和四十五年五月二十六日

出身校 筑波大学医学部

この度は伝統ある整形外科教室の一員として加えて頂き、たいへん光栄に思っております。入局後の二週間を大学で過ごした後、現在は浦和市立病院にて研修医として勉強させて頂いております。研修一年目は、産婦人科、外科、麻酔科、小児科、精神科、内科とローテートするため、正式には、整形外科を研修する時間はありませんが、藤田部長先生を始め、整形の諸先生方には、空いた時間には御熱心な指導を賜り、たいへん嬉しく思っております。

常に“なぜか”を考え、前向きに努力していきたいと思っておりますので宜しく御指導お願い致します。



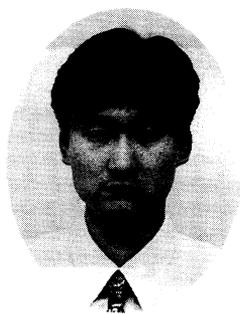
高尾 努

生年月日 昭和四十一年九月十七日

出身校 香川医科大学医学部

医局のシステムや関連施設等考えて自分の能力が一番発揮されるのが、慶応大学整形外科教室だと考えました。

色々と具体的な目標もありましたが、今は自分のなすべき事を一つ一つこなしていこうと思えます。今後ともご指導の程宜しくお願い致します。



森 眞明

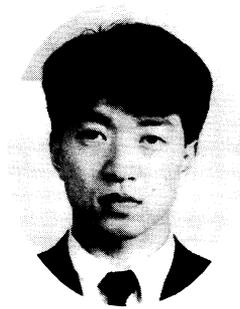
生年月日 昭和四十四年九月三十日

出身校 埼玉医科大学医学部

伝統ある慶應義塾大学医学部整形外科教室に入局させていただき嬉しく思っております。

自分の浅学と無力に不安を感じましたが、諸先生方やナースの皆様方のおかげで無我夢中で三ヶ月が経ちました。

これからも数多くのことを学ばせていただき「自分でも必要としてくれる患者さんがいる」ことを信じて一生懸命努力する所存です。  
どうぞよろしくお願い致します。



森 末光

生年月日 昭和四十六年二月二日

出身校 東京慈恵会医科大学医学部

今年の五月から立川共済病院にて研修を行っております。院内唯一の卒業したてで、仕事がなんにもできません。医者と、かなり悪名高くなっております。まったくお恥かしいばかりです。

仕事は毎回失敗の連続で、毎日が挫折のくりかえしです。上の先生はそんな私に「失敗するのが一番の勉強だ」と言っていて笑ってくれますが、それがかえってつらく思う時もあります。

とにかく、精一杯働いて、少しでも仕事ができるようになろうとがんばるつもりです。ご指導よろしく願います。



山内圭子

生年月日 昭和四十四年十二月二日

出身校 聖マリアンナ医科大学医学部

慶應義塾大学病院整形外科教室に入局させて頂いてから現在までの二ヶ月半、一日が二十四時間しかないことの切なさを正に実感いたしました。悠久の時の流れの中で育ってきた私は、当初二倍の時間が欲しいと思いましたが、諸先輩方や心の広い同僚達の助けもあって現在はあと十二時間欲しいというところまで辿り着きました。今後も、決して後退することなく少しずつでも前進して行きたいと思っておりますので、御指導の程よろしくお願い致します。



山崎智

生年月日 昭和三十七年九月十八日

出身校 信州大学医学部

大学卒業後七年間形成外科を研修してまいりましたが、より機能的な面の追求に興味を覚え、整形外科に入局させて頂きました。

ゼロからの再出発で不安も多々ありましたが、素晴らしい先生方に囲まれて、毎日新鮮で充実した日々を送っております。

今後は、自分の特性を活かし日々研鑽を積んで、少しでも皆様方のお役に立てるようにと、考えております。御指導御鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

## 助教授就任にあたって

藤 村 祥 一 (47)

この度、平成七年十月より助教授に昇進させていただきましました。

伝統ある整形外科教室の歴史を顧みるとき身の引き締まる思いです。入局以来、助教授として申し分のない五人の先生方にご教示をうけました。それに引きかえ、私には助教授としての実力はなく、自分の浅学を恥じ入る次第です。しかし、助教授を拜命させていただいた以上、整形外科教室のために微力ながら、最大限努力する所存です。

整形外科教室は一教授のもとでは医学部でも一、二を争う教室員を擁する教室となり、大世帯ゆえに教室として十分に機能していない面もあります。私の入局時のように教室員が一〇〇人余りであれば、人事、教育、研究、診療、学会活動を含めたすべての面で教授が細部まで目をくばることができたでしょう。教室員が三〇〇人に達する現在、スタッフをはじめ教室員全員の何がしかの役割分担が不可欠になっております。しかし、縦わりの役割分担のみでは必ずしも円滑にはまいません。助

教授は文字通り、教授を助けるものと考えますが、各々の業務を少しでも円滑に機能させることが助教授の役目であると考えております。医療現場の厳しい現状をみると、質の高い卒後教育と研究を両立させるために、人事を円滑に続けることが今後、益々重要になるものと考えます。矢部教授は教室の将来を見据え、着々と手を打っておられますので指示に従いたいと考えております。いよいよ第69回日整会学術集会の成功に向け、助教授という立場でいくらかでも寄与することができましたら幸いと存じます。



## 教室幹事を終えて

戸山芳昭 (54)

矢部教授が慶大整形外科教授に就任して以来、教室幹事は初代内西先生、二代目伊藤先生、三代目藤村先生、四代目井口先生、五代目堀内先生へと受け継がれ、平成六年四月より私が六代目を引き継ぎました。ご存じの通り歴代医局長は錚々たる先生ばかりで、就任当初は私がこの大教室の医局長を無事に務められるかどうか不安いっぱい、何か今日中にやり終えなかったことは無かったか、ミスは無かったか、明日の雑用は何か等など出勤や帰宅中、時には夜中まで考え、今日は全て問題なく終えたことを寝る前に再確認することが一日の最後の仕事となりました。夜中に電話が鳴ると、以前は手術患者が急変したのかなと思ひ受話器を取ったものですが、医局長になってからは教室員に何か起こったのかな、訃報でもなければいいなと思ひながら電話に出る毎日でした。

慶應の医局長は他大学に比べても大変な責任と仕事量があります。その主な仕事とは、年二回の人事、教室および同窓会員の冠婚葬祭への出席、医局運営、教室会計、

医局秘書の人選と教育、パートの振り分けと金銭交渉およびその管理、同窓会の運営、同窓会総会の企画・運営、関連病院医長会の運営、毎週の医局連絡会の運営、毎月の教室協議会の運営、同窓会誌や同窓会名簿の企画・作成、各種委員会への出席などもあります。しかし最も大切なことは、教授の方針に沿って確実に教室を運営し、教授と教室員の架け橋になることと考えてきました。このため教授とは週に一回は必ず相談して参りました。こう述べてきますと医局長は教室で一番の超激務をこなしているように思われますが、実はもっと責任ある仕事を山のように毎日こなしている人がおります。その方が矢部教授です。教授の責任の重さと仕事量の多さを間近で見れば医局長が忙しいなんて戯事を言っているのは申し訳ありません。教授の仕事量の半分もやっていないのです。この一年半は医学とは全く関係ないことが多かったことも事実ですが、この期間に経験できたこと、また勉強になったことはこれからの自分の人生に大きくプラスになると考え満足しています。

毎日の仕事量から判断して、医局長は手術など医者としての仕事や、学会活動、論文執筆などは全くしていないのではとお思いでしょうか、これらもみんなに負けな

## 教室幹事就任にあたって

松本秀男 (57)

いぐらい行わなければ過去の人となってしまいます。医局長を命ぜられたとき、ある先輩から次のように言われました。「医局長を立派に務め終えることも大事なことが、それだけではただの雑用班長だよ。大学では学会・研究活動をし、たくさんの素晴らしい論文を書いて初めて評価される。忙しい医局長の任期中にどのくらい論文が書け、学会活動が出来るか頑張ってみたら?」。この先輩に胸を張れるほど頑張ったとは思いませんが、自分なりに精一杯努力したつもりです。慶應の医局員は皆さん素晴らしい人ばかりです。特に、若い先生方の中にはこれからの教室を背負っていく優秀な人材が沢山います。このためにも、優秀な人材が世界に向かって素晴らしい研究・臨床発表を行えるべき教室、つまり決して上から押さえつけるのではなく、規律の中にも自由で競争力があり、独立自尊とのびのびとした雰囲気、独創的な研究・考えが認められる教室が今後も続いて欲しいと思います。

最後に、私の任期中にも多くの教室・同窓会関係の方々のご逝去なされました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。また、一年半の教室幹事を終えるに当たり、教室・同窓会の先生方のご協力に深く感謝申し上げます。有り難うございました。

昭和五十三年、私が入局したときの医局長は村上隆一先生でした。入局したてのフレッシュマンにとっては教授も助教も講師も医局長も卒訓もレジデントの先生も全部同じ、皆、ただただえらい先生でした。当然、医局長が何をするかは分かりません。ただ、医局会の時には真ん中に座ってしゃべる人であることだけは分かりました。そして、何カ月かが過ぎましたが、やはり村上先生が何をするかは分からないままでした。

その後、足利日赤、飯田市立、高岡市民、警友と出張し、昭和五十八年に今度はレジデントとして帰局しました。帰局した時の医局長は竹田毅現講師です。フレッシュマンの時と違い今度は教授はえらくて、レジデントはえらくないことだけは分かりましたが、相変わらず医局長は何をする人だか分かりません。そんなある日、私が外来の処置室で膝にステロイド（当時はアルツはなかった!）を注射していると、突然竹田先生がやって来ました。一言、「来週から月ヶ瀬に半年間行ってくれ。」やっと分かりました。医局長はえらい人だったのです。

それから医局長が「あそこに行け」と言えば行きまし  
たし、「これをやれ」と言えばやりました（ここは重要な  
ので良く覚えておいてください）。何故ならば医局長は  
とてもえらい人だからです（ここも重要なので良く覚え  
ておいてください）。

月日は流れ、私も留学したり、出張したりした後、平  
成四年にまた帰局することになりました。帰局した時の  
医局長は井口講師です。今度は医局長と話をする機会も  
多く、医局長が何をする人かがだんだん分かるように  
なって来ました。その後、堀内医局長、戸山医局長を見  
て、その多忙さに驚き、それを一つ一つこなして行く能  
力に感動していた矢先、教授に呼ばれました。ついに自  
分の番です。フレッシュマンの時、何をする人か分から  
なかった人を身を持って体験することになりました。

週に一度、医局会の真ん中に座ってしゃべるだけなら  
できそうですが、医局長業務を知ってしまった今、不安  
にうち震えております。来年は慶應主催の日整会もあり、  
若輩者の私にはかなりの重責ですが、幸いなことに、現  
在医局には藤村、竹田、井口、堀内、戸山と歴代の医局  
長経験者が揃っています。先輩達に相談しながら、一生  
懸命やりたいと思いますので、よろしく御援助ください。  
私より上級生の先生方へ。今後ともいろいろ無理なこ

とをお願いすると思いますが、よろしくお願い致します。  
私の同級生および下級生へ。医局長が「あそこに行け」、  
「これをやれ」と言ったら、「はい」と二つ返事で答えま  
しょう。

以上。



◎平成七年十月一日現在 教室スタッフ

矢部 裕 教授  
 富士川 恭輔 助教授  
 藤村 祥一 助教授  
 竹田 毅 講師  
 鈴木 信正 講師  
 井口 傑 講師  
 坂巻 豊教 講師  
 小川 清久 講師  
 堀内 行雄 講師、外来医長  
 矢部 啓夫 講師、保険医長  
 戸山 芳昭 病棟医長  
 松本 秀男 教室幹事  
 高山 真一郎 研修医担当主任

●教室人事

(1) 部長・医長

平成5年11月 倉林博敏君 稲田登戸病院

松林経世君 平塚市民病院

宇佐見則夫君 至誠会第2病院

平成6年9月 白石 健君 国立栃木病院

12月 泉田良一君 社会保険埼玉中央病院

平成7年2月 浦部忠久君 足利赤十字病院

6月 西山和男君 都立清瀬小児病院

7月 福井康之君 大田原赤十字病院

(2) 院長・センター長

平成6年4月 泉田重雄君 富山県高志リハセンタ

1名誉院長

平成6年4月 小山 明君 清水市立病院 名誉院

長

平成6年6月 崎原 宏君 永寿病院 院長

平成7年10月 関 恒夫君 藤田坂文種病院 院長

平成7年10月 吉沢英造君 藤田保健衛生大学リハ

ビリーション専門学校

校長

(3) 副院長

平成5年11月 田中 守君 立川共済病院

平成6年1月 市原真仁君 日野市立病院  
平成6年4月 石名田洋一君 国立埼玉病院

平成7年4月 高橋正憲君 東京歯科大学市川病院  
福田宏明君 東海大学附属病院

高橋 惇君 清水市立病院  
中西忠久君 済生会横浜市南部病院

平成7年10月 土肥信之君 広島県立保健福祉短期大学 副学長

(4) 教授

平成6年4月 今井 望君 東海大学名誉教授

平成6年10月 千野直一君 慶應月ヶ瀬リハセンタ  
ー兼助教授

平成7年9月 斉藤 進君 昭和大学藤が丘病院整  
形外科員外教授

(5) 助教授

平成6年10月 木村彰男君 慶應義塾大学医学部  
ハ科

平成7年4月 持田讓治君 東海大学医学部  
10月 藤村祥一君 慶應義塾大学医学部

(6) 講師

平成6年1月 小柳貴裕君 東京歯科大学市川病院

平成6年1月 中村俊夫君 藤田坂文種病院

平成6年10月1日 浜田一寿君 東海大学医学部  
平成7年6月1日 朝妻孝仁君 防衛医科大学

7月1日 小林龍生君 防衛医科大学(指  
定講師)

10月1日 矢部啓夫君 慶應義塾大学医学  
部

(7) 教室幹事

平成6年4月より 戸山芳昭君

平成7年10月より 松本秀男君

●留学

(平成5年2月より) 浦部忠久君

スウェーデン・ Lund 大学 (平成7年1月帰国)

(平成5年7月より) 福井康之君

米・バーモント大学 (平成6年12月帰国)

(平成5年9月より) 渡辺 理君

米・ワシントン大学 (平成7年9月帰国)

平成6年1月より 川久保誠君

英・リーズ大学

平成6年4月より 千葉一裕君

米・ラッシュ大学

平成6年7月より 市村止一君

米・ワシントン大学

平成6年7月より 井口 理君

デンマーク・オーフツ大学（平成7年9月帰国）

平成6年8月より 池上博泰君

米・ハーバード大学（平成7年7月帰国）

平成6年9月より 橋本健史君

スウェーデン・ストックホルム大学（平成7年9月帰国）

平成6年9月より 桃原茂樹君

米・ラッシュユ大学

平成7年4月より 寺田信樹君

スウェーデン・ルンド大学

平成7年8月より 堀内行雄君

スウェーデン・ルンド大学（平成7年11月帰国）

熊久保貴美君

8月 川島 明君

森本隆雄君

柳田雅明君

11月 石下俊一郎君

12月 持田 郷君

猪飼俊隆君

和田信裕君

馬場 浄君

7年1月 末安 誠君

3月 剣持和彦君

5月 沖永 明君

6月 富上雅好君

8月 中村俊夫君

9月 外川宗義君

●退室

平成6年2月 植野 満君

3月 小山 明君

3月 花岡英弥君

6月 塚原 茂君

田中京子君

●慶弔のお知らせ

○御結婚

平成5年12月 富永雅好君

6年2月 井幡 巖君

2月 関口 治君

3月 剣持太郎君

○御逝去

平成5年11月 三浦正明君 御母堂

11月 浜野恭之君 御母堂

6年1月 森岡英雄君 御母堂

1月 山内健嗣君 御本人

2月 青木善昭君 御母堂

2月 戸松泰介君 御母堂

3月 西 新助君 御本人

3月 末沢慶紀君 御本人

5月 田辺 碩君 御母堂

7月 桑山雅貴君 御尊父

7月 小泉次郎君 御本人

10月 鈴木邦雄君 御母堂

10月 原 貴君 御尊父

10月 田辺 碩君 御子息

12月 高橋昌一君 御尊父

12月 大場良臣君 御母堂

7年1月 小林龍生君 御母堂

1月 木城卓二君 御本人

2月 齊藤正也君 御本人

2月 佐々木正君 御尊父

2月 生越英二君 御尊父

5月 小粥博樹君

6月 宮坂敏幸君

6月 相羽 整君

6月 菊地淑人君

6月 榎本宏之君

6月 関 敦仁君

7月 森本隆雄君

9月 西脇祐司君

10月 宮崎 祐君

12月 小武海成朗君

12月 穴沢卯圭君

12月 森井健司君

12月 龜山 真君

7年1月 稲見州治君

3月 高木賢一君

3月 高橋世賢君

4月 関美世香君

5月 若松次郎君

7月 依光悦郎君

7月 王 東君

3月 小池 昭君 御本人  
4月 池田 彬君 御母堂  
4月 森田 勝君 御尊父  
5月 中村光一君 御尊父  
6月 鈴木 進君 御本人  
6月 新名正由君 御本人  
7月 田辺重信君 御本人  
7月 増田隆一郎君 御母堂  
8月 杉本義久君 御尊父  
9月 鈴木邦雄君 御本人

(平成5年11月～平成7年10月)





